
漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者は守護者で保護者へヤテンノオヤコへ

【著者名】

ZZード

1

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

なのはやフエイト達、そして自分の同類であるフィアアと共にジユエルシード事件を解決したハ神みらい。しかし、そんな彼らを今度は『闇の書』が騒動に巻き込む…。

『漂流者はハイブリッドな現役将校（無印編）』の続き（A, S編）です。

ある世界の物語（前書き）

どうも、金貨の騎士です。改めてよろしくお願いします。
感想は指摘でも不満でもいいんで遠慮なくどうぞ。

とある世界の物語

昔々、あるところに一人の男の子がいました。彼は魔法が大好きでいつも魔法の練習をしていました。男の子はたくさん練習をしたのでとても魔法がうまくなり、天才とまで言われました。

ところが、それを羨ましがつた友達は彼を嫌い、大人たちは彼を化け物と呼び、家族には怖がられて捨てられてしましました。男の子は一人ぼっちになってしまいました。

一人で魔法の練習をして、一人で遊び、一人で食事をし、一人で眠り、いつのまにか男の子は世界で一番不幸な者になってしまいました。

そんなある日、男の子は一冊の本を拾いました。その本は、拾った人の願いを叶えてくれる魔法の本でした。そして彼は願いました。

『寂しいのはもう嫌だ！－誰か僕と一緒に居て！－』

男の子の願いは叶いました。魔法の本に宿る女神様は、四人の家来を彼の家族として呼び出しました。男の子はとても喜びました。

それからといふもの、新しい家族に囲まれた男の子は毎日が幸せでした。一緒に魔法の練習をして、一緒に遊び、一緒に食事をし、一緒に眠り、毎日が光輝いていました。

彼女達と暮らすうちに新しい友達がたくさんでき、好きな女の子もできました。気づいたら彼の周りにはたくさんの人達がいました。

でも男の子は女神様と家族のみんなが一番大好きでした。

ところが、そんな日々も突如終わりを告げました。魔法の本の女神様と四人の家来は旅に出なくてはいけなくなりました。その旅に男の子は連れていけません。男の子は悲しくて泣き続けました。

『一人にしないで！』

女神様は男の子を優しく諭します。

『あなたはもう一人じゃありません、あなたの周りにはたくさんの人たちが居るのだから…。だから、もう泣かないで。私たちに笑顔を見せてください…幸せになつてください…。』

願いを叶え続けてくれた女神様の初めてのお願いに、ついに男の子は泣くのを止め、笑顔で女神様達を見送りました。

それから時が経ち、世界で一番一人ぼっちだった男の子は、世界で一番多くの友達を持ち、世界で一番温かい家庭を手に入れました。

それでも彼は、女神様と家族達のことを忘れないために…“みんなに忘れられないように”、“彼女達と過ごした日々のことを本にしました”。

いつの日か、誰かが女神様たちに会つた時に、こう伝えてほしくて…。

『ありがとう…僕は世界一の幸せ者になれたよ……。』

「アルテミシア王国童話集・男の子と本の女神」

プロローグ（前書き）

れー 憲張れいへ

プロローグ

はやて side

（海鳴市・ジュエルシード事件の2年前）

時刻は午後8時。車椅子の少女が暗い夜道を一人で進んでいた。

彼女の名前は『八神はやて』。幼いときに両親を亡くし、その後は一人で暮らしている。今日は気晴らしに隣町まで電車で出かけたのだが、帰りの電車が途中で止まってしまったのだ。整備不良なのか人身事故なのかは定かでは無いが、そのせいで自宅付近に着いた時には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「はあ……特におもしろいこともなかつたし、今日は散々や……。」

ついつい溜息と共に愚痴が零れてしまう。別に隣町に何も無いわけではなかつた。この辺では見かけない店や、公園だつてあつた。でも……。

「……一人で行つてもつまらへん……。」

学校に行つてないので友達は口クにおらず、通院先の石田先生とは仲はいいが忙しいだろうし、遺産を管理してくれるおじさんも同様である。

「……言つても仕方あらへんか…、氣づいたら家が目の前やし…。」

一人モンモンと考えながら帰り続けてたら自宅が見えてきた。一人暮らしの自分にとつては広すぎて寂しく感じる自分の家が…。

ところが、玄関前に辿り着いたら心臓が止まりかけた。

- - - 黒装束の男が一人、玄関に立っていた。

「だ、誰…？」

当然ながら何者かを問うはやで。しかし男の口から出た言葉は、はやての『困惑』を『恐怖』へと変えた。

「『闇の書』に選ばれし者よ…我らの計画のためにも、お前には死んでもらひ…!…!…」

「……え。」

言ひや否や、男は長い棒のような物を取り出し、はやてに向ける。
そして、その先端に光が灯り始めた…自分の命を奪う死神の光が…
…。

だが、はやはそれを見て恐怖しつつも、浮かべた表情は『苦笑』
だった…。

(神様…私つて、何か嫌われることでもしたん……?)

- - - 私は一人ぼっち…。

- - - 友達もいない…。

- - - 家族もいない…。

- - - もうひいき命まで奪つと言ひたとか…。

(…………あの世で会つたら絶対文句言つたる…。)

そんなはやての心情も知らず、男ははやてを不気味な物を見るよつ
な目で睨む。

「殺されそうな目に遭つてゐにも関わらず笑つとは…やはり、貴様
は死ぬべきだ。消えろ…！」

(こんな…こんなのがんまりや…)

その言葉にはやはては、自分の死を覚悟して目を瞑る。だが、何故か
男が驚愕の声を上げる。

「ツー？ 何だー？」

男が急に焦りだしたことを見たことを不思議に思い、はやはては目を開ける。す
ると、男が驚愕の表情ではやって見ていた…否、はやはての“背後”
を見ていた。つられるように背後を見ると…

「…」

グレーの髪に緑色の目、羽根突き帽子を被り、全体的に茶色い貴公

子のようなスーツを着た男が立つおり、周囲をキヨロキヨロと見回していた。さうこそ、彼の背後には光輝く魔方陣のよつた物が漂つてゐる。

黒装束の男がはやてに向けていた棒を、その男に向けて問つ。

「何者だ貴様！…次元漂流者か！…？」

「ん？ 次元漂流者？…知らぬ。逆に訊くが、『アルテミシア王国』を知つてゐるか？」

「どこの世界だそれは！？」

「そうか、知らないか…。お前はどうなんだ？」

そう言つてはやてに尋ねる。さつきからありえない状況が続いていふにも関わらず、不思議と落ち着いてきた。なので男の質問に答える。

「…知らへん…いや、知りません…。」

「ふむ、わかつたありがと…。ところで、この状況はアレか？俺はどうすればいいんだ？」

そう言ひて黒装束に視線をやる。すると黒装束は口を開いた。

「貴様は俺の邪魔をせず、黙つて消え失せればいい。」

「…なんの“邪魔を”だ？」

「無論、この小娘を殺すところをだ…。」

その言葉を聞いた途端、彼は眉を顰めた。そして、はやてに声を掛けた。

「…おこ、お前は殺される心当たりはあるのか？」

「さつぱりわからへん…。なあ、あんたもせめて理由を教えてくれへんか?」

「どうなんだ、黒いの?」

「貴様らに教える義理は無い。」

二人の問いかけに即答した黒装束の男。それに対し、彼は額に青筋を浮かべた。

「そりゃ…ならば、俺はお前の邪魔をするとしよう。」

「…え？」

「何だと…？」

その言葉に困惑する一人。そんな一人を余所に、彼は指と首をペキペキ鳴らし始める。

「当然であろう。俺からしたらお前は、か弱い少女を襲う不審者か変態にしか見えん。」

「漂流者風情が、ひとつと消えうせればよいものを…後悔するがいい！」

黒装束の杖…デバイスの先端から光の矢が放たれた。しかし、彼はそれを…

「ふんつ。」

- - 魔力を纏わせた片腕で弾いた。

「何！？——（ガシツ！！）ぬツ！？」

「貴様の事情は知らん。だが俺に敵意を持たせ、俺に殺意を向けた
その時点で貴様は俺の敵だ。ならば……。」

彼は驚愕する黒装束に掴み掛かり、そのまま…

「目の前の敵は全て我が屠る！…せえい！…！」

- - - ブオン！！

空に向かつて投げ飛ばした。だが、彼は止まらない。続けて出現させた魔法陣に手を突っ込み、そこから銃剣を取り出した。そして…。

「それが我『ラインベルト』なり……【天河瀑布】……」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

青白い光の柱が夜空へと伸びていった。はやてはその光景を呆然と眺めていた。やがて、自分を助けてくれた彼は舌打ちをしながらこつちを向いた。

「逃げられたか……おい、怪我は無いか？」

「……あ、大丈夫です。ありがとうございます。……あのぉ、おじさんの名前は？」

「グサリツ……！」

そんな音が聴こえた気がした。何故か、名前を尋ねられた彼は〇^z状態になっている。

「えつと…、どうかしたん?」

「…お前は『ミランダル・ライベルト』……まだ、24歳だ…。」

「ええ…?全然ツ見えへんツ…30ぐらいあるかと思ったわ…。」

「氣にしているんだからそれ以上言つたな…。お前の如は…?」

「自分、『八神はやて』言います。改めて、ほんまにありがとうございます。」

とつあえず危険が無くなり、一安心する一人。不意にはやてが口を開く。

「とにかくミランダルさん、さつき次元漂流者つて言われてたやん?それってなんや?」

「俺も分からんが…多分、異世界から跳んできた遭難者のことじやないのか?」

「ミランダルをやつて迷子なん?」

「…別の言い方は無いのか?だいたい、さつも通りてきた魔法陣を
くぐれば帰れ……。」

…彼が出現した時に背後で浮いていた魔法陣は、とっくに消滅
していた。

「…迷子確定やね。」

「…そうだな。」

ミランダルが凹んだその時、はやは何かを思いついたかのような
表情を見せ、ミランダルに話しかける。

「//ミランダルさん、しばらく私の家に来いへんか?」

「…いいのか?」

「ええよ。……どうせ、私しかおりへんし…。」

その言葉にハーリンダルははやくのじとを色々察した。なので、あえて厚意に甘えることにした。

「それじゃあ、少しの間お話をこなる。よろしくね、はやて。」

「うわ、どうしたよおじー、ミランダさん。」

「うへって『銀河の守護靈』と呼ばれた男は、そう遠くない未来に『夜天の主』と呼ばれる少女と出会い、騒がしいくらい賑やかな日々を送り始めるのであった。

第一話 非日常な日常（前書き）

ヴォルケンズの登場までもうしばらくお待ちください…。

第一話 非日常な日常

みらい side

（現在（※）・海鳴市、八神家付近）

『ミランダル・ラインベルト』改め『八神みらい』は、道を歩きながらはやてと出会った時を思い出していた。あの時はちよつと居候したら去るつもりだったのだが、気づいたらもう3年近くも一緒に暮らしており、お互いに家族として認め合っていた。

「みらいさん、どうしたんですか？」

「ふーん。それにしても、楽しみだなーはやはやけやんの家に行くの。」

彼の隣には、栗色の毛をしたはやてと同じ年齢の少女、『高町なのは』がいた。ジュエルシード事件に決着がついたあとも当事者達は交流を続けていた。基本的に暇な八神家やフィアアがちよくちよく『翠屋』に遊びに行っていたのだが、今日はなのはが八神家に行くことにしたのである。はやは家でなのはと彼女を迎えて行ったみ

らいを待つている。

そして、ついに八神家に着いた。

「 もうやめしま～す。」

「いや、せじゅうひ！」

玄関に上ると、前と後ろ（背後のみらい）から返事が返ってきた。
なのはは、そのままはやでが居るであろうリビングへと向かつた。
みらいも続いて靴を脱いで、それを揃えるために視線を下に向かた。
その時…。

- - - ズドンッ！！

はやてとなのはの悲鳴、さらに何かが突き刺さる音がハ神家に響いた。何事かと思い顔を上げると、目に入ってきたのは扉の前で腰を抜かしたなのはと…。

リビングへの扉をぶち破り、顔を突き出すカジキマグロだった。

はやて s.y.e

みらいに拳骨を落とされたはやはては今、頭を抑えてゴロゴロしていた。

「痛い～～そんなに怒らんでもええやんか～。」

「馬鹿野郎！！』家でカジキに刺される『なんてショール過ぎて笑えんわ～～！」

「み、みらいさん…別に怒つてないからもういいですよ……？」

二人のことを待つてる間、暇になつたはやはては最近すっかりハマッタ釣りをしながら待つことにしたのだ。みらい特製の『どこでもフイッキング魔法陣（はやて命名）』を発動させ、魔法で強化した釣り道具を使い、暇つぶしを始めたはやはて。

しばらくして、なのは達が家に来たと同時に竿に魚がヒットした。
みらいとなのはが来たことだし、さつと釣り上げて終わらせよう
と思い、釣竿をおもこつきり振り上げた。

みらいがその釣竿を『鯨が釣れるほど強化してある』ことを『忘れて
…。

「それで…？あれほど勢いよく釣竿を振り上げると言ったのにソ
レをやらかし、異常なくらい勢いをつけてカジキを釣り上げ、その
まま扉にズドンか？」

セツ言つて扉から顔だけ突き出し、ダランとしているカジキに目を
やる。

「…うん。」

「全く…。次同じ」とやつたら「パン（恐怖の制裁）だからな？」

「ひいっ…？それだけは勘弁や————！」

(拳骨より怖いの?)

はやての異常なビジュリ具合に不思議に思つたのは。しかし、彼女は知らない。みらいの「ポン（恐怖の制裁）」は魔力を纏わせた手でやつてくることを…。

「あれはマジで首が飛ぶかと思たわ…。」

「一体どんな『ポン』なの…? ていうか、はやてちゃんの時何したの?」

「エイプリルフールでみらいさんの私物を全部質屋に入れたって嘘ついた。」

「…自業自得な。」

次元漂流者のみらいがエイプリルフールを知つてゐるわけ無いのに…。不意になのはの視界にあるものが目に入った。

「あれ? その本はなんなの?」

そう言つてリビングの窓際に佇む本を指差す。その本は全体的に黒く、独特な装飾がされていたが、一番気になつたのはその本が鎖で縛られていたことである。

「あ、またこんな所に来て……。」

「やれやれ、この前なんてトイレにいたぞ？」

「……ん?」

「一人の反応になのはは違和感を感じた。この本が一人の物なのは分
るのでだが……。

「ねえ、はやてちゃん……一人の言い方がすゞしい気になるんだけど…
…。」「……

「ん?なんか変やつた?」

「うん、なんか『』この本がまた勝手に動いた』みたいに聴こえたの
……。」

「それであつてんよ?」

「…………ふえ?」

- - - 今、なんと仰つた?

「だからこの本、家の中なら神出鬼没なんよ……。戻しても戻してもどつかに行くんや……。」

「……自分だつて魔法少女で魔王だろうが……。」

取り乱すなのはにボソッと突っ込むみたい。だが、とりあえず説明してやることにした。

「これは俺の持ち物でな、俺の一族に代々伝わる家宝……らしい。」

卷之五

「ずつといひの鎖が外れなくてこれがなんの本なのかすら判つて無いんだよ……。ところがだ、はやての家に居候し始めた時にな、はやての部屋にもこゝにそつくりな本が置いてあつたんだよ。」

「それで？」

「折角だから二冊とも本棚に並べて置いたんだが…そつから例の怪奇現象が始まった。」

それを聞いただけでは顔を青くした。ある時はリビング、ある時は玄関にキッチン、さらにはトイレにまで出現する謎の本に最初にこぞビビッドものの、それ以上のことは無かつた。

「ぶつちやけ詳しい」とは私にも分からんかつたけど、呪つてくれる訳でもないから無害やしきつとこいへんや。なにより流石にもう慣れたわ…。」

「あ、そうなの…。」

とつあえず謎の本のことはこれで終わりになった。

「この話はもうこだらう。なほ、フロイドからビトオレーターは？」

「あ、ちやんと持つてきつますよ。」

「ほんまかー? フェイトちゃん私のメッセージ見ててくれたかな?」

何度か『翠屋』に行つた時に、一緒にビデオレターを見せてもらい、なのはが返事を送るついでにはやても自分のメッセージも便乗させてもらったのである。

「私もまだ見てないんだよね。……せういえば、フィアさん来れなくて残念だつたね……。」

「いや、あいつはむしろ結果オーライだ。運がよければフェイト達に直接会えるだらうじ。」

この場にいないもう一人を思い出す一人。彼は今、とある用事で海鳴市どころか地球にすらいない。

「フィア兄、今頃どうしてるんやろか……ボソッ）また一緒にみらこさんからかつて遊びたい……。」

「今頃、武装隊の半分くらいは花畠と川を見る翠屋になつてんじやないか?」

そう言つてみらいは、ジユエルシード事件を経て戦友となつた彼のことを思い浮かべるのだった。

クロノ side

「とある管理外・世界」

そこは碌に生物があらず、瓦礫の山が広がり続ける世界だった。かつては高度な文明を持っていたようだが何かの原因で滅亡し、世界全体がただの廃墟と化したのである。

そんな世界でクロノは瓦礫に身を潜め、今の自分の状況を呪つた。

「……なんでこんなこと……。」

今思えば、心の中で『所詮質量兵器』などと思っていたのかもしれない……。今はそれが恐ろしい勘違いだと自覚していたが……。気づけば味方はほぼ全滅、残つてるのは自分だけだった。

「とにかく、ここから離れない」と……。

『田標を発見しました。クロノさんです。』

「流石と言つべきか…。やつぱり最後まで残つたのはお前か…。」

「ツー？」

突如上空から声が響いた。クロノが慌てて上を見上げると、そこには黒い軍服を身に纏い、背中に黒い4枚の翼、赤みを帯びた茶髪に青い瞳、さらに肩には金色に近い毛並みの猫を乗せた男が居た。

やがて男は口を開く。

「訓練時間終了。クロノ、お前はクリアだ。」

みらいと同じく次元漂流者であり、臨時教導官の『フイーア・レイガード』はやつ言つた。

第一話 非日常な日常（後書き）

次回の更新は月曜日くらいになります。

第一話 鉄と火の脅威（前書き）

あれ？ サイトの画面がおかしい…俺だけ？ 今だけ？

第一話 鉄と火の脅威

クロノ side

（数時間前、アースラ・執務官室）

「生存訓練…？」

「おう。ぶっちゃけ、お前らの質量兵器に対する認識が甘すぎる…。

」

クロノの執務室に来て開口一番にフィーアはそう言った。現在彼は、リンクティとの取引の結果『臨時教導官』をやらされている。素性や能力の関係上ミッドチルダや管理世界には立ち入るのは不可能だが、管理外世界や無人世界なら可能とういうことで引き受けることになつた。

管理局には素性（連邦）を明かしたくないので、『現地協力者』で通している。フィーアと彼の祖国『ベルフィーア連邦』のことは、ジユエルシード事件に関わったのは達ヒアースラのメンバーしか知らない。

「ヒーリー、その肩の猫は？」

「ん？…ああ、こいつは『アリス』だ。この前拾った。」

今、フィーアは肩に猫を乗っけている。その猫は尻尾が二つあり、金色のような毛並みを持っていた。

「それよりも…今後の訓練の参考までにアンケート的なモノをやつたんだが…。見てみる。」

苦い顔をしながら、そのアンケート用紙をクロノに見せる。対象はアースラの武装隊である。

「…………。これは……本当なの…か？」

「……一応、書いた本人達に訊いてみたが…マジだ。」

その結果を見たクロノは畳然とした。アンケートに書いてある内容は以下の通りである。

- - - 日頃の訓練内容について。

- - - 今まで経験した戦闘状況について。

- - - 各自の得意分野。

この3つの内容だけの結果ならば、全体的に別段おかしいことは何も無かった。しかし、一つ目の内容の結果にフィーアはある違和感を感じ、内容をひとつ追加して改めてアンケートを取つたのだが

「『今まで遭遇した質量兵器。』を訊いてみたんだが…。改めて問うが、お前ら管理局の田標のひとつは『質量兵器の根絶』だよな？」

「…その通りだ。」

「なのに武装隊の半分近くが『銃と刃物しか“知らない”』ってのはどういうことだ！？ “遭遇しない”じゃなくて“知らない”ってのはーー？」

そうなのだ…彼らの半数近くが“魔法関係の戦闘”しか経験しておらず、“質量兵器との戦闘”を経験した者がいないに等しかったのだ…。管理局全体が魔法主義なのは解つてゐるが、先日のように地球のような世界にだって行く時があるので。質量兵器と戦闘する可能性が無いわけ無い。

「つーわけで、リンディ提督にも許可貰つたからちょいと痛い目に遭つてもらう。なに、安心しろ。死なない程度でやつてやる。」

「…分かつた。彼らにもいい機会だ。是非やってくれ。」

「アホ。『リンディ提督に許可貰つた』って言つたら？今更、お前の許可を取りに来たわけねえだろ。お前も参加するんだよ。」

「…え？」

フイーア si de

（2時間前・とある無人世界）

「諸君、俺が臨時教導官のフイーア・レイガードだ。よろしく頼む。なるべく返事は『了解』で返せ。」

「「「「「了解！」」」」

訓練場所に選ばれた無人世界で、武装隊メンバーの返事が響く。肩に猫アリスを乗つけたフイーアの隣には、クロノが顔を青くしながら立つ

ていた。

(…フイーアは“アレ”を向けてくるんだらうか？確かに魔法弾も鉛弾も撃てると言つてたが……。)

“アレ”とは、フイーアが『時の庭園』で使用した【炎翼砲門】のことである。合計十五門のガトリング砲による一斉射を田の前で見たクロノは、自分があの時の傀儡兵のようにバラバラにされるところを想像してしまった。

「…だが、待っていた現実はそれどいつも無かった…。」

「と、言つわけだ…これから諸君らには質量兵器との戦闘訓練を行つてもうら。質問は？」

いつのまにか大雑把な説明が終わつたようである。若い局員が手を挙げ、フイーアに質問する。

「意味あるんですか？それ…。」

「質問かい？か、真っ向から否定してきた。その局員に対し、フイ

一アとクロノは溜息をつく。渋々ながらフイーアが口を開く。

「お前、名前は？」

「『ジム・ヘリオン』一等空士です。」

「やつが、ヘリオン空士か…。ナレハド言ひなは、お前には“特別な内容”を追加しとこてやる。」

「…？」

意味が解らす、ヘリオン空士は首をかしげる。それを無視するよつにフイーアは話を進めた。

「ま、『田間は一見にしがず』。経験すれば嫌でも解るだらうや…。ルールは至つて簡単…！今から一時間、俺の攻撃から生き延びる…！生き延びるためなら何をしても構わん…！魔法を使ひもよし…！俺を攻撃するもよし…！とにかく生き残れ…！以上…！」

《訓練開始まで、残り1分前。》

リコアによるその言葉と共に、アースラ武装隊のほととじがフイ

ーアから逃げた。一部の武等派だけがフイーアの田の前に立つたま
まだ、どうやら開始と同時にフイーアを攻撃するつもりのようだ。

『残り30秒。』

「ほう、ヤル気満々か…。」

フイーアを睨む同儕達。どうやら彼らはフイーアのことが気に食わ
ないらしい。

「何をしてもいいんだろ?」

「次元漂流者なんかに教えて貰つぼど、俺らはひ弱じやねえんだよ。」

「

その言葉にフイーアが困ったような表情を見せた。

『残り10秒。』

「…参つたな、これじゃあ訓練にならない……。」

フィーアがそう弦き、局員達がデバイスを彼に向けたのとほぼ同時に…。

『0。訓練開始！！』

「君達は追加訓練決定だ。」

-----ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

轟音と共に、彼らの足元に設置してあつた『地雷』が爆発した。

クロノ side

「な、なんだ…？」

開始と同時に響いた轟音に、思わず全員が視線を向けた。そして、オペレーターを任せられた『エイミィ』から通信が入る。

『訓練開始。同時に『ザク陸士』、『リーオー三尉』脱落。追加訓練決定だよ！』

「ちよつと待てエイミー……追加訓練ってのは何だ？僕は聞いてないんだが……。」

『開始と同時に失格になっちゃった人達は訓練にならないから、後で改めてやり直しだって。クロノ君や他のみんなも、あっさり失格になつたら同様だつてフィーア君が…。』

「なん……だと……。」

呆然とするクロノ。彼は直前にしたフィーアとの会話を思い出していた。

「……ちなみに、厳しすぎて訓練にならなかつたらどうするんだ？」

「俺が“一人ずつ”、“丁寧に攻撃しながら”指導してやる。」

(「冗談じゃない！…それは死ぬつ…！」)

『善は急げ』とばかりにクロノはそこから急速に離れた。彼につられて数人の局員達もその場から離れた。それとほぼ同時に…。

「…ドコオオオオオオオオン…！」

再び響く爆音。振り向くと、さつきまで彼らが居た場所が派手に吹き飛ばされていた。そんな中、局員の一人が空に指先を向けて声を上げる。

「おい…！…あれは何だ…？」

その先には、煙を引きながらこちらに向かってくる複数の何かだった。クロノと一部の局員はそれが何か気づく。

「ツー…？馬鹿、あれは迫撃砲だ…！…撃ち落せ…！」

「ええ…？あれも質量兵器…？」

その言葉と同時に放たれる複数の魔法弾。迫撃砲の弾は空中で迎撃され、ほとんどが爆散した。撃ちもられたモノは見当違ひの方へと

落ちていったようで、爆発音が響いた。

攻撃を防ぎきり、彼らは安堵する。

「…焦つちまつたが、狙いが雑だつたな。」

「まだこいつの場所が判つて無いんじやないのか？」

「……“判つて無かつた”の間違いじゃ…。」

「「「え?」」」

「…3人目の言ったことは正しかつた。嫌な予感がし、再び上を見上げると目に飛び込んで来たのは、彼らの位置を割り出したフィアの集中砲撃による砲弾で真っ黒な空だつた。

ヘリオン side

完全にこの訓練を舐めきついていたヘリオンは今、一人で瓦礫の廃墟

を走っていた。

(こつた い何なんだ! ?)

訓練開始からわずか30分たらずで、武装隊の3分の1が脱落となつてしまつた。その現状が信じられず、ヘリオンは半ばヤケクソになつてきた。

「畜生! ! 質量兵器つて魔法より劣るんじゃねえのかよ! !」

ヘリオンにそう吹き込んだ彼の先輩は、開始早々に脱落している。
「魔法に引けを取らないどこのか加減知りゆの分、性質悪いじゃねえか! !」

「よく解つてんじゃねえか。だが、それと戦つのがお前ら『時空管理局』じゃ無いのかよ。」

「ツー? 」

声がしたほうを見ると、涼しげな表情を見せるフィーアが立つていた。その姿に、ヘリオンは嫌な汗を流す。直接は見ていないが、フ

イーアが質量兵器を用いて自分達を攻撃しているのは理解している。

故に、どのよつに攻撃してくるのか判らず、ヘリオンは恐怖する。

「まったく…機会が無かつたとは言え、自分達が敵と認識してるものへりこちゃんと理解しておけ。」

『フィーア。彼もアンケートに『銃と刃物しか知らない』と書いた一人です。』

「…マジか。」

そうなのだ、ヘリオンも質量兵器をほとんど理解していない者達の一人だったのである。ここまで生き残れたのは途中までクロノについたからである。もつとも、途中で見失ってしまったが…。

「おこ、ヘリオン空士。」

「…はい、なんでしょう?」

「俺の言つた事は覚えてるか?」

「…自分で“特別な内容”を追加?」

そう言つた途端、フィーアがニヤリとした。そして…

- - - ドガッシャアアアアン!!

轟音と共に、何かが瓦礫を蹴散らしながらフィーアの背後に現れた。それは四角形が二段重なり、一段目には筒状のモノが正面に突き出しており、左右にキャタピラを装備していた。早い話…。

- - - 戦車である。

「第97管理外世界地球、日本の軍隊（自衛隊）の主力戦車、『90式』だ。」

「！」これも質量兵器…？』

90式の巨体に圧倒され、ヘリオンは後づさる。彼にとつて戦車は、怪獣のようにも見えたらしい。若干涙目のヘリオンにフィーアは容赦無く宣告する。

「撃て。」

『発射！－』

－－－ フィーラとリリアの声、そして戦車の咆哮を最後にヘリオンは意識を手放した。

フィーラ side

（訓練終了後（現在））

フィーラはその後も【黒羽】を用いて質量兵器を大量生産しながら局員達を恐怖のどん底に叩き落した。あるものは地雷に爆破され、あるものは迫撃砲で蹴散らされ、あるものは戦車砲で蹴散らされた。武装ヘルも使ってやろうかと思ったが、その頃にはクロノしか残つてなかつたから結局止めた。

「んで、終わつてみて感想は？クロノ。」

「…生きてるって素晴らしい。」

後半、クロノはとにかく回避することと逃避することに集中したようである。しかし、残り30分前にして生き残ったのが自分だけになり、フィーアの攻撃が全て自分に集中した時は…

「瓦礫の世界で“綺麗な花畠と川”が見えたよ…。」

「…すまん、やりすぎた……。」

念のために断つておくが、フィーアの魔道科学を用いて即席で造った非殺傷機能を使用したので、死者は一切出でないのであしからず。脱落者は全員アースラへ強制転移されている。今、アースラの医務室は全身打撲の武装隊メンバーで一杯だらう…。

「それにしても…君は戦車まで造れるのか…。」

「流石に執務官なら知っていたか、戦車。」

陸の質量兵器の王者、戦車。執務官ともなると、遭遇しなくてもその存在くらいは知っていたようである。

「今度の訓練内容に『戦車とタイマン』追加しとか?」

「できれば遠慮したいが……頼む、やってくれ。魔法だらうが質量兵器だらうが、戦いの訓練に変わりは無い。」

「了解。んじゃ、ちよつと休憩挿んだら訓練再開な。」

「了解した。」

その言葉と同時に、休息のためにアースラへと帰還するクロノ。転送ポートに入る直前、心なしか足元をふらつかせながらガッシュボズを決めてた気がするが、見なかつたことにした……。

「わひと……俺らも一回帰るか……。」

(ねえ、フイーア。)

誰も居ないはずのこの場所で頭に響く、自分のものでもリリアのものでもない声。しかし、彼は特に驚きもしないで返事をする。

「ん? どうしたか?」

(なんだこつもは戦車とか造らないの?)

「無駄に高性能な動く砲台（戦車）を一台造るより、魔法で浮かせる大砲を三台作ったほうが安上がりなんだよ…。今回の訓練は、質量兵器を使う世界の常識に合わせてみただけだ。」

「…魔法で空飛ぶ大砲なんて、自分の祖国ベルフィーアくらいだらうし…。」

（ふ～ん、そうなんだ…。）

「…なあ、いい加減フェイトたちに教えてもいいんじゃないかな?」

（…まだ無理よ。心の準備といつかなんといつか…とにかく無理…。）

「…分かったよ。まだ秘密にしてくぞ。でも、期待すんなよ?アリスも判つてると思つけど、俺の隠し事はすぐばれる…。」

（承知の上よ。それと、誰も居なこときは本名でいいわよ。）

「はいよ、『アリシア』。」

- - - そう言って、フィーアは自分の肩に乗った猫に…『アリシア・テスター・ロッサ』に返事をした。

第三話 起動（前書き）

ついにあの四人が…

第三話 起動

みらい side

～12月24日・PM18:00・八神家～

「やうか…、こいつには当分帰れそうにないか…。」

『ああ、じいじとばかりに口キ使われてる…。年越しもアースラで過ごすかもな…。』

現在みらいは、はやてとなのは、それとなのはが呼んだアリサとすずか達と共にクリスマスパーティーを楽しんでいる。女子達の会話が盛り上がってきたその合間に、ベランダで一人くつろぎながら彼はフィーラと思念通信で談笑していた。

『そりいえばリーゼ姉妹に会つたぞ?』

「元氣にしてたか?最近、二人とも仕事が忙しくて中々来ないんだ…。」

『その内』またちょっかいに出しておひらがな『ひらがな』で書かれてん

な（笑）』

「……」また、はやての世話を頬んでやる（揉まれてしまふ）。と云ふと云ふ。

特に『ロジテ』の方には散々悪戯された記憶がある。回転、はせてのセクハラを『アリア』以上に受けてたが……。

『ひじべ』『まつまつまつまつ』、『解。云ふと云ふ。さじや、せせとなのな』

「おひ。」

そこまで通話を終わらす一人。みらいは誰もこなーべランダから、はやて達のこるリビングへと戻つていった。

（アースラ艦内・フィーラ専用室）

「アースラの空気部屋を改造して完成したフィーラ専用室。それに“彼ら”はいた。

「あ～あ…楽しやつて羨ましい限りだよ……。」

『（こんな美女一人と一緒に過ごし）何を言いますか。』

「…………美女つて……。」

『……聞かなかつたことにしてくれださい。自分で言つて恥ずかしくなりました…。』

お互いドンコリとした空氣を漂わせていた。異世界出身故に、クリスマスなんてイベントは知らなかつたのだが、普通に楽しそうだったのでみらい達が羨ましかつた。

そんな一人に声が掛けられぬ。

「まつたく…。だからって、そんな雰囲気出さなくともいいじゃない…。」

「とは言つてもなあ…。つて!! 勝手に人型になるな!! 誰か来た
らどうすんだ!!」

「大丈夫よ、近くに人の気配は無いわ。」

顔を上げるとそこには、綺麗な金髪を伸ばし、赤い瞳を持った少女
がいた。服装は黒がベースのゴスロリ風のドレスを着ていた。その
少女の姿は、フィーア達のよく知る少女と瓜二つである。

「それにしても、改めてフェイトとそつくりだな…。いや、逆か…
フェイトがアリシアにそつくりなのか…。」

「当然でしょ。フェイトは私の分身として生まれたけど、それ以前
に大切な妹なんだから。」

「大切な兄弟が必ずしもそつくりになるとは限らねえぞ。」

「それは同じ“死に損ない”としての経験談?」

・・・そう、彼女はフィーアの猫『アリスト』こと『アリシア・テス
タロッサ』である。

例の事故で死んだ彼女は、プレシアのことが心配で『幽霊』と化してしまったのだ…。案の定、心配した通りにプレシアは廃人寸前になってしまい、尚更彼女のことが心配になつて成仏できなくなり、ずっとプレシアを見守り続けていたのだ。

ところが、プレシアが『プロジェクト・F・A・T・E』に手を出し始めた時に変化は起きた。当初アリシアは、プレシアが“自分の代わりとなる娘”を産み出そうとしているのかと思っていた…かつて生前に交わした約束を母が守ってくれたと…。だが、現実は違つた。プレシアが求めたのは“アリシア自身だつた”。それだけでも衝撃的だつたにも関わらず、その後も悲しみは続いた。

生まれ方はどうあれ、アリシアはフェイントを妹として見ていた。何故なら、あの約束がある限り、自分が死ななくとも彼女は生まれたかもしれないからだ。だから自分にとつては大切な妹であつた。にもかかわらず、その大切な妹は、大切な母親に傷つけられていつたのだ…。

- - - 全ては自分が死んだせい…。

いつしかそんな考えが頭を占め、彼女は深い悲しみに苛まれていつた…。やがて、限界を突破した負の感情により、『悪霊化』するはずだつたのだが…。彼女は深い眠りについただけであつた。彼女曰く、“温かい何か”に包まれた感覚だつたそつだが…。

「とにかく…、その“猫耳”と“尻尾”は隠せないのか？」

「無理よ。この耳と尻尾、あと世話好きの部分は『リニース』の名残なのよ…。」

書き忘れたが、今の彼女には猫耳と二つの尻尾が付いたままである。そして、今のお解かりになつたと思うが、アリシアの悪霊化を防いだのは同じくプレシアのことが心配で幽霊化したフェイトの教育係りであり、プレシアの使い魔の『リニース』である。彼女はアリシアの魂と自身の魂を融合させて彼女を助けたのだ。意識を完全にアリシアに譲つたため、今となつてはアリシアを助けた理由も含めて、彼女の真意は判らず終いである。

その後、『ジユエルシード事件』による『時の庭園』での戦闘により、おかしな空間が出来た。まず、『時の庭園』自体が“次元の狭間”に存在し、“ジユエルシードの暴走した魔力”、“時の庭園の動力炉”、“虚数空間”、“試作型AMF”、“異世界の超魔法”、“白い魔王とその仲間達の魔法”…今思えば、“混せるな危険!!”要素のオンパレードであった…そんな空間に居たせいか、眠つていたアリシアの魂に異変が発生し、気づいたらただの『幽霊』ではなくなり、そして…。

「俺も“普通に”亡霊化したら妖怪になつたのかな…？」

「知らないわよ。」

『て言つか何を持つて“普通”とするんですか?』

「彼女は幽霊から妖怪になっていた。『猫又』になったのはリースが“山猫”だったからなのではと推測されている…。

「そんなにいいもんじゃ無いわよ?常に自分がここに居るのか居ないのかハツキリした感覚なくてフワフワしてるし…。大体、母さんとフュイトに『私、妖怪になつたの』なんていきなり言えないし…。」

「あの一人とアルフは平氣だと思つんだがな…。最初はビックリするだらうけど…。」

いきなりこんな形で甦つてきても受け入れて貰えるか不安なので誰にも打ち明けておらず、アリシアの事は未だにフィーアとリリアしか知らない。

「いいの…とにかく今はまだ黙つとくの…。」

「はいはい…。とにかく、そろそろ夕飯食いに行かないか?」

「え……私が作りつと思つたの……。」

「今度でいいよ。ほら、乗つかれ。」

『こわ。』

そして、猫化したアリシアを肩に乗つけながらフィーアは部屋を後にして。途中、遭遇したエイミィがアリシアを思いつ切り抱きしめて引っ搔かれたのは割愛する。

はやて side

～pm23：57・八神家～

「あ～楽しかった～。来年もなのはなちゃん達、呼ぶべきやな……。」

自分の寝室で眠りにつこうとしながら、今日の楽しい時間を思い出していたはやて。なのは達は、アリサを迎えたリムジンに便乗させてもらひながら帰つていった。

みらこはコビングの片付が中々終わらず、悪戦苦闘している。

「……ただ、樂しそうたせいで全然眠くならへん……。」

もつ日だけが変わるとここの全く眠気がこなーのである。いくらく
休日続きと言つても、寝不足はお肌の天敵である。

「ナウタ時はみりこそこそに添い寝してもらひますわ……。」

はやては眠れない時、よくみらいに添い寝してもらっていた。みらい
にも別段断る理由も無く、すんなりとお願ひを聞いてくれる。添い
寝 + 子守唄、時々朗読による効果は抜群で、絶大な安心感と共に眠
りこつけるのである。

「早く戻つて来いへんかな～…ありや、25日になつてもうた……。」

「

ふと時計を見たら一度一日が終わったところだった。だが、それ以
上氣にする」とも無く「口っこと寝返りをうつた。ところが……。

『起動。』

「え…？」

声のした方を振り向くとそこには… よく瞬間移動するみらいの本ではなく、今までピクリとも動かなかつた“自分の本が怪しく光ながら宙に浮いていた”。思わず思考がフリーズするはやて。しかし、そんな彼女に構わず自体は進行する。

- - - カツー！

「おわっー！？」

突如光が強く輝き、はやての寝室が光で満たされた。やがて、光が収まるとそこには、四人の人影が存在していた。そしてそのうちの一人、ピンク色の髪をしたポニー・テールの女性が口を開いた。

「『闇の書』の起動、確認しました。」

続けてやや短めの金髪の女性が言葉を紡ぐ。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でござります。」

そして、白い髪で獣の耳と尻尾を付けた筋肉質の男と、赤い髪を三

つ編みにした少女が言葉を続けた。

「夜天の主の元に集いし雪。」

「ヴォルケンリッター。なんなりと御命令を…。」

そう閉めくくり、主であるはやての返事を跪きながら待つ四人…『ヴォルケンリッター』。だが、いつまでたっても無反応であるはやてを怪訝に思い、赤髪を三つ編みにした少女が顔を上げる。

すると、はやは気絶とまでは行かなかつたが、呆然としていた。田じうる、みらいやフィーラ達と過ごしたせいで耐性はついていたが、流石にこんな予想外な場所とタイミングでこんな状況になつたことには驚きを隠せなかつたようである。

「…おい、あんた大丈夫か？」

「え？…ああ、うん。大丈夫や…。」

「ヴィータ、主の御前だぞ。無礼な真似は許さん。」

三つ編みの少女…『ヴィータ』に始めるような口調で話しかけるポーテールの女性…『シグナム』。

「別に気にせんでもええよ？私ものこの状況がよく判らんし……詳しい話、聞かさせてくれへん？」

「王の望みとあらば。」

物事が割と穏やかに進み、ホツとするはやで。何度も命を狙われたことのある彼女にとって、彼女らに敵意が無い時点で充分なのだ。

「では、改めましてこの『闇の書』なのですが……。」

「…………ガチャッ

「おー、はやて。また勝手に魔方陣弄くつたのか……。」

流れる気まずい沈黙。片付けを終わらせた直後、何故かはやての部屋から魔法の反応を感じ、様子を見に来たみらいが寝室の扉を開けたのである。

「…………。」「…………。」

何を言えбаいいのか判らば、6人は沈黙を保つ。だが、その空氣をシグナムが叩き壊した。

「『シャマル』、『ザファイアーフ』主を守れ！…ヴィータ、やるぞ！」

- - 物事を物騒でややこしい方向へと…。しかし、海鳴市一度目の騒動は幕を開けたのである。

第三話 起動（後書き）

近日、アリシアを含めた数人のプロフィール書きます

プロフィールと補足（リリア追加）（前書き）

改めてオリキャラ一人の紹介と補足を…。

プロフィールと補足（リリア追加）

名前 ハ神みらい（本名ミランダル・ラインベルト）

年齢 26歳（年明けと共に27歳になる予定）

武器 銃剣オルギニス（ベルカ式）

出身 アルテミシア王国

備考・管理局も知らない世界から突如地球に現れた次元漂流者。偶然はやてを助け、そのまま居候していたら、いつのまにか家族と認め合うほどの仲になつていて。ジュエルシード事件を経てファーフィアやなのは達と交流を持ち、現在でも家族ぐるみで度々遊んでいる。ちなみに、元近衛隊の猛者ゆえ、実力は折り紙つき。大量の魔力光を引き連れて戦う姿から『銀河の守護霊』と呼ばれていた。

今回の『闇の書』による騒動は、彼の所持品と祖国の“とある物語”が関わってくる。

名前 フィーア・レイガード

年齢 20歳（来年の春頃に21歳になる）

武器 魔剣、ヴィルガロム（現在、少々おかしなことに…）

出身 ベルフィーア連邦

備考 みらいと同じく管理局が知らない世界から来た次元漂流者。アルテミア王国とベルフィーア連邦は同盟世界なため、二人は互いの噂程度なら知っていた。今では戦友といった間柄になっている。ジュエルシーード事件解決後、ほぼ成り行きで妖怪化したアリシアと行動を共にする。祖国では特務准将の座に就いており、自身の能力とどんな状況でも生き残ることから『黒鋼の不死鳥』の異名を持つ。もっとも、一度死んだことがある本人にとつては皮肉にしか聽こえていない。

彼らが度々使う『思念通信』や『非殺傷機能』などは、『思念電話』や『非殺傷設定』などと微妙に仕組みが違う。が、大体は一緒である。

名前 リリア（正式名称 先行試作型携帯式サポートAI・N-01
2・リリアンヌ）

年齢 造られてから13年経過、ついでに人格は女性。

備考 兵士をサポートするべく造られた試作A-Iの一機でフィーアの相棒。見た目は腕時計となんら変わらない。魔道科学の結晶であり、高性能な通信システムや索敵システムを搭載、さらに魔法も科学も理解できる上に使用もできる。試作型とはいえAMFを強制解除したこともある。本来なら数年の試験運用の後に回収される予定だったが、フィーアとリリアが渋ったために未だ現役を続行中。

フィーアと共に戦場を歩み続け、進化と成長を続けている。現時点では並みの魔導師より驚異的である。

名前 アリシア・テスタークサ

年齢 幽霊時に意識不明状態の期間があつたので不明（精神年齢は15歳前後）

出身 ミッドチルダ

備考 死後リースと魂が融合し、様々な力が集つた『時の庭園』を経て妖怪『猫又』化したプレシアの娘。魔力は無いに等しいが妖力を所持しており、使い魔と違つて完全に独立した存在。とりあえずプレシアとフェイトを救い、自分の亡骸を家族の元へと連れ帰つた

フィーアに恩を返すべく現れたが、いつのまにか一度目の生を謳歌することに夢中である。また、家族を含めた周囲の人間には、まだ自分の事を教えていない。

ある日、こつそりフィーアの魔剣に触れたら、自身の妖力に反応してヴィルガロムがおかしなことになつた。今は特に問題無いのでフィーアは怒つてない。

プロファイルと補足（リリア追加）（後書き）

シシ ハハハハの満載ですね…。

第四話 守護騎士と守護靈（前編）

あ…プロフィーに2人の通りぬとリリアの」と書き忘れた……。

第四話 守護騎士と守護靈

みらい side

（八神家・amo・03）

「待て待て待て待て待て！落着け落着けえ！！」

「問答無用！！」

今、はやての部屋はいつになく混沌としていた…。突如現れた守護騎士『ヴォルケンリッター』に敵と認識され、いきなりそのリーダー格に斬りかかれたみらい。彼は必死の形相で彼女の愛刀『レヴァンティン』を白刃取りで抑えていた。

（『はやてを守れ』と言ったな…。つまり敵では無い筈。そもそも…。）

（敵ならば…はやてに害なす者ならば、この家に設置した迎撃魔法が発動するはずなのだが…。）

「……私の斬撃を初見で見切るとはな。貴様、できるな……。」

こつちは頭の整理を含めて必死だとこつこの、田の前の女性は心底
楽しそうである。

「ＴＰＯを弁えていれば俺も似たようなことを思つたかもしけん。
だが、敵と認めてない者に向ける鬪志は持つとらん……。」

「それは私が相手にする価値もないといつことか！？」

「……おい、シグナム……。」

言葉の意味を勘違いし、激昂する田の前の彼女『シグナム』。だ
が、そんなシグナムに『ヴィータ』と呼ばれた少女が気まずそうに
声をかける。

「後にしろヴィータ！－騎士の誇りに賭けて私はこの男を……。」

「そいつ……主の家族だつて……。」

そんな音がシグナムから聴こえた。冷や汗をダラダラと流しながら、『ギギギ』とぎこちなく首を後ろに回すシグナム。すると田に入つたのは、顔を真っ青にした守護騎士達と、笑顔を保ちつつ額に青筋を浮かべた主……はやてが居た……。

はやて side

リビングにて

「申し訳ありませんでした……。」

「いや、気にしなくていい。」

八神家の住人2人と守護騎士の4人は、色々と詳しい説明をするためにリビングへと移動した。リビングに来た途端、シグナムがみらいに土下座をしていた。

「甘じで、ありこわん。」いつの時はもハビシジッヒせな…。」

「ならば、お前にももうひょい厳しく…。」

「前言撤回や。」

「…あれ以上厳しくされんのは嫌や…。え? 充分甘やかされてるやと? 細かいことは気にしたらあかんよ?」

「…何を考えてこる?」

「何でもあらへん。や、説明してもひつで?」

「承知しました。」

その言葉を機に、シグナムが『闇の書』の説明を始めた。曰く、この全部で666ページもある『闇の書』というのは、他者の魔力の源…『リンクター』を全ページ分集めると持ち主に絶大な力を授けるというものらしい。彼女ら『ウォルケンリッター』はその持ち主を守る護衛役なのだそうだ。

そして、彼女達が『ベルカ』に縁がある者達であることと、『時空管理局』とはなるべく会いたくないということも聞いた…。

「成る程なー。これって実はとんでもない本やつたんか…。」

「…ひつすらと魔力がにじみ出てたのは気のせいでは無かったのか…。」

「では、早速蒐集のほうを…。」

説明を終わらせて早々にシグナムが蒐集の開始を提言する。しかし…。

「却下や。」

「「「「…は?」「」」

これには守護騎士の4人も啞然とした。眼前の主は、強大な力を手に入れる機会を目の前に『却下』と言ったのだ…。そのことが信じられない様子の4人だったが、みらいは違った。

「やっぱ、そうなるか…。」

「当たり前や。んな人様に迷惑かけてまで力なんか欲しくないわ。そういうわけで蒐集は禁止。これは主としての命令や。」

はやは『闇の書』を完成させる気が全く無いようである。そうすると困るのは守護騎士達のほうである。最初に赤髪の少女・ヴィータが口を開いた。

「じゃあ、あたしらはどうしたらいいんだ…？」

自分たちの役目ひとつ、蒐集が禁止されたので何をすればいいのか分からず、戸惑つてしまふ4人。そこで、はやてが提案する。

「私たちの家族にならへんか?」

「「「え?」」」

まさかの提案に再び啞然とする守護騎士達。今日は思考がフリーズしてばかりである…プログラムの方にバグが発生しないか不安になつてきた…。

「確かに蒐集は禁止したけど、私が主なことに変わりは無いんやろ?だったら、みんなの面倒を見るのは主である私の責任。ただ、どうせなら家来とかじやなくて家族として面倒みたいんや…。」

「い、いいのか…？」

「ちよ、ヴィータちゃん！！」

まだ若干躊躇う4人。そんな彼女らをみらいが後押しする。

「お面葉に甘えておけ。俺も、お前らと似たようなもんだった…。」

-----ただの居候から、いつの間にか本当に大切な家族になつてい
た。

経験者みのりこにもそう言われて決心がついたらしく、守護騎士たちはつい
にはやての提案に首を縊に振った。それに対し、はやてはすゞぐ嬉
しそうである。

「よし、決まりやー！私は『ハ神はやて』。改めて、ようじく頼む
で～。」

主のそれに応じるために、守護騎士達も改めて名乗りだす。

「闇の書の守護騎士『ウォルケンリッター』、剣の騎士、烈火の将、『シグナム』でござります。」

「同じく、湖の騎士、風の癒し手、『シャマル』です。お世話になります。」

「鉄槌の騎士、『ヴィータ』だ…。」

「盾の守護獣、『ザフィーラ』。お気遣い、感謝する。」

各自、物々しくも礼儀正しく（1名、微妙）自己紹介をすませた、ウォルケンリッター。さらに将であるシグナムが全員を代表して締めくくる。

「我らウォルケンリッター一同、『厄介になります。』

「いえいえ、ようこそ八神家へ。…って、みらいさん？何、自分だけ難しい顔しながら黙つとるねん…。」

「…ん？ああ、すまん。ちょっと考え方を……。」

今まで沈黙を保っていたみらいが慌てて名乗る。

「俺は『八神みらい』。いわゆる次元漂流者で元居候だ……おい、はやて。何故にそんな目線を送つてくる?」

何故かはやてがジト目でみらいを見つめてきたのだ。困惑するみらいにはやはては口を開く。

「分かつてないなみらいさん…。みんなが折角かっこいい名乗りを上げたのに、自分だけそんなんでいいと愚つとるんか?」

「…つまり、俺に本名の方を名乗りれと?」

「せうせう。」

その言葉にため息を吐くみらい。しかし、シグナムを筆頭に全員名乗つてもひつた手前、自分だけそうしないわけもいかず、諦めた。

「それでは改めて…アルテニア王国、元王家直属近衛銃士隊一等武官、『ミランダル・ラインベルト』だ。この際だ、好きに呼んでくれ…。」

「因みに『銀河の守護靈』なんて通り名がついてたらしいぞ。」

いきなり黒歴史を暴露され、荒ぶるみたい。『20代で物語の英雄扱い』という、むしろ光栄に感じる理由なのだが、どういう訳か本人はひどく嫌がっている。

「ええやん。『盾の守護獣』がありなら『銀河の守護霊』くらい普通や。な?ザフィーラ。」

「我ですか?……自分としては立派な二つ名だと思いますが…。」

「……………」

――そんなに重たい話ではなく、むしろ笑い話の部類に入るのではなかつた。

はやてとみらい、二人のやり取りを見ながらも、シグナムはある事

シグナム side

を訊きたくてしょりがなかつた。ところが、先にその事に触れたのはみらいだつた。

「せういえば、訊きたいことがある。」

「なんどいじゅいましよつ……？」

「……」

みらいは“ある物”を取り出す。それを見た瞬間、守護騎士の表情が驚愕に染まる。

「……やはり見間違いではありませんでしたか……。」

「……」

「『闇の書』がもう一冊…？あんた、これどうしたんだ！？」

ヴィータ達を驚かせたのは、みらいの所持品である『謎の家宝』である。こちらは未だに鎖で縛られたままだが、やはり『闇の書』と瓜二つである。先ほどの「ゴタゴタ」の最中、視界にチラリと入ったので気になっていたのだ。

「うーん……その反応からして、やつぱりコノの正体は謎なのか……あと、もつひとつ驚くかもしねなことがあるんだが……」

そう言つて手を掲げるみらい。すると、彼の手に二角型の魔方陣が出現した。

「……わづ、なんと言えばいいのか分かりません……。」

ただでさえ信じられないこと続きだといふのに……自分達ベルカと全く縁の無い筈の世界出身の彼が何故……。

——ベルカ式の魔方陣を展開している?

唚然を通り越して、最早狼狽の域に達してきた守護騎士たち。彼らのその様子に、みらいも流石にこれ以上話しを続ける気が無くなつた。なにより、はやてがいい加減眠くなつてきたようで、ウトウトし始めている……。

「なんか話が長くなりそつだから続きをせ明田……いや、もつ田ひすい変わつてゐるのか……。朝にしよう。部屋はどいつもくか……。」

「一度いこ空き部屋があるから、布団出してシグナムとシャマルはそここじよ。ザフィーリはみらいさんと一緒にできえか…。」

「あの、あたしは…？」

一人余つたヴィータが尋ねる。それに對し、はやてはニシコロしながら答えた。

「私と一緒にや」

「あ、やう…。」

ヴィータは微妙な表情を見せたものの、翌朝に満足気な表情を見せながら起床してくることは、本人さえ知らない。

…この日、八神家に新しい家族が増えた。その光景を、“みらいの本”が心なしか嬉しそうに眺めていた…。

第四話 守護騎士と守護靈（後編）

ヴォルケンズの称号、特にシグナムのつてアレであつてましたつけ
?

第五話 平和で騒々しい日常（前書き）

今後、ちょっと展開が原作と季節がずれるかもしれません…。

第五話 平和で騒々しい日常

はやて side

（12月28日・八神家）

「みらい殿、また手合わせ願えないだろうか？」

「ん？ いや、今日はちょっと…。」

朝食を終え、新聞を読んでいたみらいに模擬戦を申し込むバトルマニア（シグナム）。それに対し、同じく戦闘好きである筈のみらいは珍しく泣る。そこへ、ヴィータとはやてが口を出す。

「ちょっと待て、シグナム。今日、みらいはあたし達と遊ぶんだ。」

「そうやで。だいたい、昨日一人が暴れたせいで庭がとんでもないことになつたばかりやないか…。」

先日、一人の戦闘狂により八神家の庭は悲惨なことになつた…。無論、原因である一人は責任を持って庭を修復した後、残りの家族全

員に説教を受けた。

「ぐつ……。」

「わつこうわけだ。それに、今日は先に一人と遊ぶ約束をしてたんだ。悪いがまた今度な？」

「……わかりました。ですが、年内にもう一度くり「今日の夕飯はシグナムだけシャマルの料理や。」…すいません、自重します……。」

「うよつとー？それびつひつ意味よー？」

自身の料理を罰ゲームのように扱われ、食器を洗いながら憤慨するシャマル。しかし、そのことに關しては誰も味方してくれなかつた……。

「言葉のままだ。あのザフィーラを見てもまだ言つか……。」

そう言つてベランダの方を指差す。するとそこには、蒼い毛並みの狼が丸くなつて蹲つていた。実は昨日の夜からずっとこの調子なのである。……原因は……言わずもがな……。

「違うもん!! 私、料理下手じゃないもん!! 昨日はたまたま失敗しただけだもん!!」

「失敗しても“マズイだけ”にしるーー。」

昨日ザフィーラが倒れたとき、シャマルは『ただ眠くなつただけよ』と言つてたが、みらいは目撃した。彼女がこっそりザフィーラに“治療”魔法を使用したのを……“治癒”ではなく“治療”だったことが余計に不安だった。

「まったく。頼むから、もう一人で料理すんのはやめてくれよ?」

「……はい。」

……『闇の書』の起動から二日、守護騎士たちはハ神家の生活に早くも慣れてきたようである。彼らを迎えた一人も、新たな日常を満喫している。特にはやはみんなの服を買いに行つた時にとてもイキイキとしていた。

「そんで遊ぶ約束はしたけど、何をするんだ? いつもみたいに釣りは無理だろ?」

「そうやな、ヴィータがああ……。」

先日、みらいの『ジニでもフィッシング魔方陣』で釣りを教えてみたのだが…ヴィータは開始3分で飽きてしまったのだ。彼女の性格上、ああいうのは無理らしい。

「あれの何がおもしろいんだよ…。」

「大人の遊びってもんが分かってないな…。そんなんだから見た目も…。」

「ああー!? (怒)」

「すまん、言こ過ぎた…。」

そんなわけで頭を悩ます3人。あんまり派手に体を動かすようなことは、車椅子のはやってがキツイので却下。室内系は、元気が有り余つてゐるヴィータが嫌がる…。

「…あー隠れんばでもするか?」

「え? 家でするん?」

「狭いんじゃねえか…？」

八神家は比較的に広い方に分類されるが、隠れんぼをするには流石に狭い。そんな二人の心配を余所に、みらいは不適な笑みを浮かべる。

「ふふふ…、抜かりは無いぞ？ちょっと待って。」

そう言つて早速魔方陣を開けるみらい。ベルカ式と独特的な技術が混ざったアルテミニアの特有魔法である。シグナムとシャマルがその光景を一日前の会話を思い出しながら眺めていた。

「…やはり、細かい部分は違えどベルカ式だな。」

「そうよねえ…。でも、アルテミニアなんて世界…私たちの時代にあつたかしら…？」

『闇の書』が起動した翌朝、みらいはシグナム達に自分の世界のことを語つた。特に、互いにその存在すら知らないにも関わらず、何故か同じ魔法技術を有していることには驚いた。名前が『ベルカ式』で彼女達の出身が『ベルカ王国』なら、やはりアルテミニアになんらかの形で技術が流れたということで一応片が付いた。

「…だが、実用性や出鱈田加減は向こうの方が上かもしけん……。」

「…体をそのまま縮めるつてどんな魔法よ……？」

二人の視線の先には、みらいの発動した魔法陣により人形サイズまで縮んだはやてとヴィータ、そしてみらいが居た。

「うおおおおー!なんだこりゃあああー!」

「わああ…、家具がめっちゃでかく見えるわ……。」

「ぬはははは。本当はコレ、潜入や隠密行動専用の魔法なんだけどな…。まあ、要是いようだ。これで思つ存分遊べるぞ……ん?お前も参加するのか…?」

よく見ると、3人に加えて“みらいの本”…最近はとりあえず『黒の書』と呼んでいる例の本が一緒に縮んでいた。こつちは“自力で”縮んだようである。

「なんか最近積極的やな…。もしかして、前から構つて欲しかったんか?」

「…あたしはあんまり『トイツ好きじゃないんだけど……。』

「どう考えたって、あの時はヴィータが悪いだろ?」

あの時とは、アルティニアとベルカの話を終わらせたあとのことである。ひとりでに移動することからただの本では無いことは確かなのだ。しかし、一応できる範囲で調べたのだが、結局『闇の書』とそつくりな理由も中身がなんのかも解らなかつた。鎖が取れないのでも中身を調べれないので。それに痺れを切らしたのがヴィータだったのだが…。

『ああもうメンドクセえ……どうしてるーー!』

『馬鹿……よせ……!』

『【ラ】ケーテン・ハン』ズビシッ……』ブベツ……』

---鎖を叩き壊すべく『グラーフ・アイゼン』を振り上げたヴィータの顔面に、『黒の書』がメリ込んだ…。

みらい日へ、自分も同じようなことを何度かしたらしいのだが、ヴィータと同じように反撃されるか瞬間移動で逃げられたのだそうだ

…。そのため、鎌を外す」と自体はとつての昔に諦めていた。

「ていうか、知つてたら止めろよ。」

「『トトロ』って書つたりが…。」

「まあまあ、とにかく始めよ?『黒の書』さんも混ざつてええよ。」

はやての言葉に喜ぶかの』とく『黒の書』は宙を舞つた。その様子に若干ヴィータがおもしろくなさそな表情を見せる。しかし…。

「んな顔して…。本当は自分が悪かったって分かってるくせに…。」

それを直接言つと怒るので黙つとくみらいであつた…。そして同時に、今後のことを真剣に考え始める。何を考えてるかといふと、自分たちの友人達のことである。

- - 先日、管理局員であることが発覚した猫姉妹。
- - 前回の事件を経て交流関係が続いている提督と執務官。
- - 管理局の民間協力者である戦友達。

そつ…彼の周囲には、守護騎士たちが接触を避けたいと言つた管理局員だけなのだ…。そのことを言つた時の4人の様子は、容易には語れないほどに落ち込んでいた。それに対し、みらいは『大丈夫だ』と言つたのだが…当然、簡単な話では無い。

(なのはやフイーアは話せば解るとして…問題はアースラか…。)

特にクロノだ…。あの真面目な性格上、説得には苦労しそうである。リンディは…考えるのはよそつ…絶望しそうだ…。

…ハラオウン親子と『闇の書』の因縁を知らないみらいは、それ以上のことを考えなかつた…。

「みらいさん?…どうしたん?」

「おつと、悪い悪い考え」としてた…。

せめて、今ぐらいそのことは忘れよつ…。そつ思いながら、みらいははやて達と遊び始めるのだった。

…この時、彼はまるで予想していなかつた…。“あの一人”が自分達に隠し事をしてることを…そして、それが辛くなつてきて

いたことを
.....。

第五話 平和で騒々しい日常（後書き）

次回は大晦日の話になります。

第六話 大晦日 年越し準備編（前書き）

作者は転生物が嫌いなわけではありません。むしろ、お気に入り登録してあるのがチラホラと…。

第六話 大晦日 年越し準備編

みらい s.i.d.e

（海鳴市・12月31日・15：37）

本日は大晦日。一年の終わりとあって、どこの家庭でも多少なり忙しそうである。ある者は終わらなかつた大掃除を、ある者は宴会の準備を、そして…

「【紫電一閃】！…」

「【三日月閃光波】！…」

「ドゴオオオオオオオオオン！…」

今年最後の模擬戦を楽しむ…のはこの一人ぐらいであろう…。レヴァンティンとオルギニスをぶつけ合いながら、二人の戦闘狂は次第に笑みを深くしていく。

「流石です、みらい殿！！」

「やつちもな……シグナム……」

二人は、はやてに頼まれた今晚の買い出しの帰り道である。思ったより早く済んだので、空き地で模擬戦と言つ名の道草に興じていた。当然、抜け目なく封鎖結界は展開済みである。

「それにしても……、別に敬語使わなくていいって、言つてゐだらう……！」

「ガキンッ！！

「私がそつしたいだけです……お気になさりや……」

振り下ろされた銃剣をレヴァンティンで防ぎながら返答するシグナム。この数日で、みらいとはやてに敬語を使つてているのはシグナムとザフィーラくらいだった。しかもザフィーラの場合、ただでさえ口数が少ないので微妙に判別がつかない……。

「なんかムズムズするんだよ……」

「慣れてください……！」

その後も2度3度と切り結び、戦いは激しさを増していく。ヒカルが、その二人の間に水を差すよつた音が響く。

- - - - -

「うとい、時間か…。」

「やのよひですね…。仕方あつませんか…。」

ほっとくと一生終わらないことは自覚してたので、アラームをセッティングしたのだ。これ以上続けると時間が遅くなり、道草食つてたことがばれる…。

「ザハイーラの「の舞は嫌だからな…？」

「承知しております…。」

「八神一家暗黙のルールその1。悪い子には『シャマル飯』。
『『みら』の『ト』』。」

「…みらい殿の『ト』『ロビン』も相当なモノでしたが……？」

「当たり前だ。今、はやての辞書に『血債』があるのは『ト』『ロビン』の御蔭だ。」

最近の犠牲者はヴィータである。勝手に『黒の書』の鎖を壊すことにはヤレンジし、それに対しても『黒の書』が激しく抵抗したせいで家が滅茶苦茶になってしまったのだ…。そして主の権限により、お仕置き内容が『みらいの『ト』『ロビン』』になつたのである。

「あの後、ヴィータはずつと呻きながら床を転がつてましたよ…。」

「ヴィータも流石にこれで懲りたる。さて、さつさと帰らないと俺らが同じくらい酷い目に遭うからな…怠ぐぞ?」

「はい。」

そうして一人は買い物袋を手に、帰路に着いた。しかし、悲しいかな…戦闘の余波で傷んだ食材があつたため、一人が寄り道して模擬戦をしていたことが発覚してしまい、一人ともシャマルの作ったお菓子を食べる羽目になった。その結果…。

「シグナムでめえーー！俺が先だあああああああああーー！」

「譲れませんーー！」ればかりはあああああーー！」

「二人とも……あんまりつるをこと、夕飯無しやで……？」

「……夕飯時までトイレの獲り合いが続いたそうだ……。

フイーア s.i.d.e

（次元航行艦アースラ・艦長室）

「本当にお疲れ様。」

「どうも。疲れの元凶さん……。」

アースラの艦長室で、二人の人物が向かい合っていた。1人はこのアースラの艦長『リンクディ・ハラオウン』提督。もう一人は『フィア・レイガード』臨時教導官である。今年の仕事が一段落し、ね

『あら、この言葉と報酬を受け取りに来たのである。

「あら、酷いわ。諸悪の根源みたいな言い方なんかして…。」

「実際そうでしょう？あなたの無茶なスケジューるのせいでの、今年最後の一力用武装隊とクロノの顔しか見た記憶がないんですから…。」

「

げんなりしながら言うフィーラだつたが、その言葉を聴いたらクロノ達は本気で怒るかもしれない…その鬱憤を晴らすための被害者は主に彼らだったのだから…。

「ま…給料も入つたし、それなりに楽しかったからそれ程悪くはなかつたんですけどね…。」

「それはよかつたわ。…因みに、この後は何か予定でもあるのかしら？」

「いや。家に帰つても俺しかいませんし、だからと言って各自の家族団欒を邪魔したくありませんから、もう一日御厄介になります。」

それを聴いてニッコリするリンクティ提督。いつもの嫌な予感がする笑顔とは微妙に違い、逆に不審に思つたが、その心配は無駄だった。

「アースラクルーで年越しパーティーをやるんだけど、来ない？」

「本当にですか？それは是非とも参加させてください。」

元々そういう宴会や祭り事は好きなので、内心すくべ喜んでいる。しかし、何を持つてこようかな…と、考えていたらある事を思い出した。

「…開始時間はいつですか？」

「午後6時だから…まだまだ時間には余裕があるわね。何か用事でも？？」

「はい。それまでは終わりうなので先に済ませときますね。それでは後ほど…。」

「ええ、待ってるわ。」

セツヒヤフイーアは艦長室を出て、そのまま真っ直ぐと向かっていった。血室ではなく、先日の訓練時に赴いた『瓦礫の世界』へと…。

? ? ? s.i.d.e

「とある管理外世界」

「クソッ…一体、何がどうなっているんだ……。」

「落ち着けよ、それを確かめるために呼んだんだろ?」

前回、フィーアとクロノ達が訓練で使用した瓦礫だらけの世界に一人の人の人影があった。二人ともフィーアが鍛えた武装隊の一員である。

「だがな、俺の記憶上あんな“奴ら”いなかつた筈だぞ?あいつらのせいで展開も大分変わっちまつたし……。」

愚痴をこぼし続ける金髪でオッドアイの少年。それに対し、相方らしき黒髪に赤い瞳の少年が答える。

「けど、どっちかつーと良い方向に変わったじゃないか。プレシアとフロイトも和解してたし……。」

「そ・れ・を、俺がやりたかったんだよーー！」

「…いい加減、前世のことは忘れないか？」

「馬鹿言えーー九死に一生よりレアな状況だぞーー？簡単に諦めれるかーー！」

金髪の少年の言葉に、黒髪の少年は深い溜息をついた。別に友人と言えるほどの仲では無いが、自分の周囲に居る“同類”は彼しかいないのだ。当初、“知識が無い”自分は世界を壊すかもしれない恐怖に襲われて下手に動けなかつた。そこで、背に腹は変えれないので彼と行動を共にしていたのだが……。

「俺は神に選ばれた存在だーーハーレムを作る権利くらいはある筈だーー！」

(…絶対に頼る相手を間違えた……。)

第一、こいつの言つ通りならすでに自分が恐れてた『世界の破壊』が起きたのだ。その影響は自分が思つたより全然しょぼく、むしろ悪くなかった。同時に、『展開』を半ば神聖視してた自分がアホらしく感じた。

(「Jの世界が前世のアニメ世界だからって、ちょっと自惚れたのか
かもしれない…。）

「…自分はもう、Jの世界の一人の人間であることを忘れていた
のかもしない…。」

そんなことを考えていたら金髪の少年が声を荒げ始めた。

「遅ええんだよ…！…いつまで待たせんだ…！」

「…提督への用事の方が一局員の呼び出しより重要な決まってるだ
ろ？」

気づいたら相方が呼び出した人物…『フイーア・レイガード』がい
た。心なしか彼は少々不機嫌そうである。当然と言えば当然だが…。

「で、なんの用だ？『閃夜光一』二尉。『レスター・D・シャーマ
ン』三尉。」

黒髪の少年…『レスター』は若干俯いたものの、金髪の少年…『光
一』は叫ぶ。

「とほけんな……てめえも『転生者』なんだろー!?」

なんの駆け引きも無く、いきなり核心を問いかけた光一。それに対しレスターは唖然とするが、フィーラはといつと…。

「違う。」

即答した。だが、レスターは不審に思った。転生者では無いと言つのなら、何故“転生者”と言つ言葉に疑問を持たない”?光一も同じらしく、立て続けに怒鳴り散らす。

「嘘つくな!! 知らないなら“転生者”って言葉に疑問を持つ筈だ!!」

「俺はお前の言つ『転生者』じゃ無い。が、『転生者』がなんなのかは知つている。」

「何…?」

「『』の世界は……、君達の言つと『』のアニメの世界なんだろ？…そして、君達は前世の記憶があり、さらに神を名乗る者から力を『』えられた……だろ？」

「「ツー？」」

二人の反応を見て、自分の予想が当たつてることを確信したフィー
アは言葉を続ける。氣のせいだろ？… フィーアの雰囲気が変わつ
て来た気がする……。

「やはりそつか…。この半年で、『転生者』を名乗る人間が何人も
僕のことを殺しにきたよ…。やれ『原作を守る』だの、やれ『俺の
嫁に手を出すな』だの、やれ『原作をぶつ壊す』だの……何様のつ
もりだい？」

「ひいつー？」

言葉と共に殺氣をぶつけられ、光一が悲鳴をこぼす。だが、フィー
アの言葉は終わらない。

「君達の前世ではどうだったか知らないわ…だけど、この世界の住
人は間違なく存在し、生きているんだ。みんなそれぞれの物語を
歩んでいるんだ…。にも関わらず、君たち転生者はみんなを“会話
できる登場人物”ぐらいにしか考えていない…！みんなの人生を“

物語の展開”ぐらにしか考えていない！！」

訓練の時とは比べ物にならない規模の怒氣と殺氣を溢れさせながら、
フィーアは激昂する。その気配に当たられ、一人は全身が震え始めた。
だが、震えながらも光一は抗う。

「ふ、ふざけんな！！勝手なことばかり抜かしやがって……黙らせてやる……」

「よせ！！確かに俺たちはこの世界の住人を“ひとりの人間として”見て無かった！！間違つてたのは俺たちだ……」

「すっ込んでろ腰抜け！！俺は神に選ばれた人間だ！！モブキャラゴトきに……！」

……フィーアにソレは禁句だった。それは今の彼にとって一番の禁句。

「……閃夜……。僕は言つた筈だ……この世界の住人はそれぞの物語を歩んでいると……。」

「黙れモブ！！“原作の主要メンバーが居れば後はどうでもいいんだよ”……」

- - - その瞬間、レスターの視界から閃夜光一が“消えた”。

第六話 大晦日 年越し準備編（後書き）

大晦日は三つに分割します

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編（前書き）

これで大丈夫かな……？反射対策……。とりあえず、光一が能力を原作キャラ程使いこなせてないのを前提でお願いします。

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編

レスター side

(う、嘘だろ……！？)

転生者…レスターは大変驚愕していた。さっきまでフィーラに向かって口上を述べていた光一が視界から消え、彼がいた筈の場所にはフィーラが立っていた。光一の腹部があつたであろう部分に蹴りを決めた体制のまま…。

しかし、それ以上に驚くべきことがあった。

(なんで『反射』が発動しなかった……！？)

光一は神を名乗る者に出会った時『SSS級の魔力』と、レアスキルとして『ベクトル操作能力』を所望したのである。その要求は通り、彼は“自分が考えうる限りで”無敵の存在になった…筈だった。ちなみにレスターは、自分の好きだったアニメの機体をデバイスに

光一は神を名乗る者に出会った時『SSS級の魔力』と、レアスキルとして『ベクトル操作能力』を所望したのである。その要求は通り、彼は“自分が考えうる限りで”無敵の存在になった…筈だった。ちなみにレスターは、自分の好きだったアニメの機体をデバイスに

してもう一つている。

(『木原真拳』でも使ったのか?)

無敵と謳われたその能力を、原作で破った数少ない方法を思い浮かべる。しかし、その割には威力がおかしいような…。

「…ねえ。」

「はいー!?

いきなり声をかけられ、思わず両手を挙げて上擦った声を出してしまった。今更だが、フィーアの雰囲気が日頃のモノと違いすぎてメチャクチャ怖い…。

「君も僕と戦いたい?」

「滅相もありません!..」

そもそも光一が勝手にやっていることであって、レスター自身はフィーアと戦う気などなかった。それ以前に勝てる気がしない…。

「そり…、だつたら早く“訓練通り”にした方がいいよ?」

「え?」

「【羽ばたけ・黒羽】。」

そう言つてフイーアは翼を生やし、さつさと飛んでいつてしまつた。
一人残されたレスターは、フイーアの言葉の意味を考える。そして
…。

「ジー…やつべ、そりこいつとか!/?『ガテラーザ』セットアップ
!…」

『AiAisir』

慌てて自身のデバイスを開け、その場を飛び去るレスター。

…それとほぼ同時に、レスターの居た場所が光の奔流に飲み込まれた。

「すまないなレスター…お前のことは忘れない。だが安心しろ、物語は主人公が生きてれば問題ないからな！！あつはつはつはつは… そうとも、この世界は全部、主人公である俺のものだ……！！あああははははははははははははははははははははははははははははは…！」

剣型デバイスによる砲撃魔法を放ち、高笑いをあげる光一。彼は非殺傷設定を切った今の攻撃で二人を葬つたと信じて疑わなかつた。

だが、光一を蹴り飛ばしたフィーラは翼を生やして空を舞い、とつくに彼の後方へと回りこんでいた。相手を倒したことを確認するまで動きを止めないのは戦闘の基本である。…訓練で散々教えたにも関わらず、光一は相手が居るかどうかも判らない場所に攻撃を撃ち込み、根拠も無い勝利を確信していた。しかも彼の口振りから察するに、レスター『ごと葬るつもりだつたらしい…』

(…素人が…。)

さつきまでの『怒り』に匹敵する感情が芽生えた。『呆れ』である。だが、フィーラは目の前の存在から“全てを奪う”ことを止めるつもりは無い…。

「…ヒコノシ…・・・・・ヒノキおおつ…！」

「ウソおおおおお…一？てめえ…なんで生きてやがる…！？
てか、なんでわざから『反射』が発動しねええ…！？」

「企業秘密だ。」

風を切る音と鈍い打撃音が響く。空中から一気に加速し、思いつき
り光一を踏みつけた。実はさつきから『反射』は“発動している”
のである。さつきからフィーアはある程度手加減した蹴りを放ち、
その威力に比例した出力の『反射』による力を感じた瞬間、全力の
蹴りを放ちながら“『反射』の力をぶち抜いている”のである。

ただ…この方法はやたら神経を使い、『反射』に逆らって蹴り抜く
ので足が痛い上にかなり威力が減るのである。しかも、相手が『反
射』の出力を最大にしたらこの手は使えなくなる。

「…クソッタレ…じきやがれ…！」

「おひど。」

ベクトル操作により力を増幅させ、勢いよく起き上がりながらフィ
ーアを退ける光一。フィーアは特に焦ることもなく立ち退き、そ
まま彼は瓦礫の山に走り込んだ。

「逃げる気か！？ふざけんな腰抜け！！【ジエノサイド・インパクト】……」

彼の『デバイス『エクスカリバー』により放たれた魔砲が周辺を薙ぎ払う。だが、何発放とうともフイーアにはかすりもしない。その時、急にフイーアが動きを止めて光一に話しかけてきた。

「なあ、閃夜光一一尉……。君は、この世界を何だと思っている…？」

「ああ……？ そんなの決まっているだろ……！ アニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界だ……！」

「……その物語には出ないが、確かに存在している人々は君にとって何だ？」

「ハンツ……モブキャラなんてただの“目障りな背景”だ。いつそ皆殺しにしてや……。」

光一はそれ以上言葉を続けることができなかつた。何故なら……。

「……それを聞いて安心したよ……これで躊躇せずに……。」

- - - 口 口 セ ル ネ !!

『ベクトル操作能力』の『反射』は常に何でもかんでも反射してゐるわけでは無い。この世の全てを反射するということは、『重力』も『光』も『音』も『酸素』すら拒絶するということだ。某学園都市の最強は音を遮断したこともあるが、自分に話しかけてきた人物が何を言つているのか判らず、結局話を聞くために音の反射を切つた。

つまり、日常生活に支障が出るものは“基本的に反射しない”ということである。戦闘のプロならば状況に合わせて最適な反射を選択しだらう……だが、光一は素人同然のクズ。

- - - カツ !!

故に、唐突に目の前で『スタングレネード』を炸裂させられれば、
目を焼き切られるのは当然。フィーアの『黒羽』製、手加減無しの
閃光弾は一瞬にして光一から“光を奪つた”。

――バアアアアアアアアアアアアアアアアン――

「シ」――――――――――

ネタとかテンプレ抜きで苦しむ光一に容赦無く追い討ちを仕掛ける
フィーア。今度は“音を奪うべく”、“炸裂音を増強”させたグレ
ネードを造りだし、炸裂させた。鼓膜を破り、さらに激しい苦しみ
を伴う光一はもはや立っていることもできず、地面をのた打ち回つ
ていた。

真っ暗で無音の世界に叩き落され、激痛に苦しむ光一はさらに自分に迫る脅威に気づくことはできなかつた。いつのまにか彼の周囲

を怪しげな煙が取り囲んでいたのだ。フィーアはいつのまにかガスマスクを造りだして装着している。やがて…。

「『Jボッ…』？」

“酸素結合型の毒ガス”により吐血し始めた光一。様々な激痛に襲われながらも、本能的に彼は『ベクトル操作能力』により体内の毒素を排出しようとした。だが酸素と結合しているために、いつも以上に操作が難しく、毒素の排出に“ベクトル操作を集中”せねばならなくなつた。

この瞬間、『光』と『音』と『体の自由』を奪われた光一は、『反射』さえ奪われた。

『体の自由』を奪われた故に、逃げれない。

『音』を奪われた故に、彼の足音が聽こえない。

『光』を奪われた故に、彼が右手に握る黒い物が見えない。

『反射』を奪われた故に、その銃弾を跳ね返すことは叶わない。

「さよなら、閃夜光——等空尉。」

- - - フィーアの言葉と銃声が瓦礫の世界に響いた。

フィーア side

「こんなもんか…。」

彼の足元には半端無い激痛の果てに、脳天に『ヴィルガロム・魔法銃形態』による“呪い弾”を撃ち込まれて沈黙した光一が転がっていた。死ぬ一步手前だが生きている。短期間とはいえ腐つても教え子の一人、しかも宴会の直前に殺人沙汰を起こすつもりは無かつた。もっとも、“呪い弾”を撃ち込む直前までは殺す気満々だったが…。

『これからどうなさるんで?』

「呪い弾で『ベクトル操作能力』は使えなくしといた。あとはアースラに連れて帰る。こんだけ酷い目にあつたんだ…流石に、この世界が物語なんかじゃない本物の現実つて自覚したる。」

『彼からしたら背景にボツコボコにされたってことですかね。そんな主人公願い下げです。』

「もつとも、これで懲りないよつなら…。」

- - - 今度は即効で殺す。

「さてと…シャーマン三尉…降りて来い…！」

「はい…！」

不意に上を見上げながら声を出すフィーア。すると上空には、一部始終を見ていたもう一人の転生者『レスター・D・シャーマン』が居た。悪魔のような戦闘を行つた男に唐突に声をかけられ、恐怖しながらも素直に従つ。

体をガクガクと震わせながら降りてきたレスターを睨みながらフィアは問う。

「俺が閃夜一尉を蹴り飛ばす直前に、貴官が言つたことに嘘偽りはないか？」

「え？……あ…。」

「確かに俺たちはこの世界の住人を一人の人間として見てなかつた。間違つてたのは俺たちだ！！」

それは正真正銘自分の本音であるため、体の震えを抑えながら真つ直ぐな視線で答える。

「はい。それは俺の本音です…。」

転生者として、知りもしない原作の展開を気にして全ての行動を躊躇い続け、最終的に光一みたいな馬鹿にくつつくしかなかった。今思えば、自分もその馬鹿の同類だったかもしだれないが…。

「…ふむ、自覚してるだけコノ馬鹿（光一）よりマシか……。いい

だれか、誰も無む事じだったみたいだよ。ここにいる。

「？」

「なんだ?」「イツと同じ田に遭いたいのか?」

レスターはフイーアの最初の言動から考えて、何人かの転生者と遭遇した挙句に転生者にあまりいい感情を持つているようには感じなかつたのである。

「……實際、この半年で俺を襲つてきた何人かは憎くてしょうがないさ……。封鎖結界も張らずに襲い掛かつてきただ拳句、一般人を何人も巻き込みやがつた……。その上こう言った奴がいた……。」

こいつらが死んだつて原作に影響は無い。

その言葉に唖然とするレスター。転生者としてではなく一人の人間

として、その言葉を吐いた転生者が信じられなかつた。改めてこの世界の一住人であることを認識した今は尚更である。

「流石にそいつを含めた何人かは殺した…。この馬鹿も同じ臭いがするが…まだやつて無いようだから今回は見逃してやる。“一般人に向かつて攻撃したら死ぬ呪い”もかけといたと、そいつが目を覚ましたら伝えておけ。」

「…了解。ですが……。」

「ん?」

自分の同類たちの行いに意氣消沈するレスター。それでも、彼はフィーラに訊かざるを得なかつた。

「あなたは一体何者なんですか?」

現在自分が存在するこの世界が広いことと、原作なんてものが通用しないことを理解している。それにしたって、『転生者』が平均して異質な存在であることには変わりは無い。

- - - そんな存在をあつさり仕留めた彼は何者なのだ?

そつ思つのは当然である。そんなレスターの疑問にフィーラは自嘲氣味な笑みを浮かべながら答えた。

「ただの“死に損ない”さ…、詳しいことは後で色々と教えてやる。ほら、さつさとアースラに帰るぞ。年越しパーティーが始まつちまう…。」

「は、はい。」

沈黙中の光一を抱えながら、二人はアースラへと帰つていった。

（オマケ）

「しかし、“アリス（アリシア）を預けたエイミィは”無事だらうか…？”

光一の呼び出しにきな臭いもの感じたので、念のためアリシアはエ

イミィに預けといったのである。

《普通、“ハイミィさん”に預けたアリスを“心配しません?”》

「本気で言つてるのか？」

（アリス？ああ、あの猫か…。）

二人の会話を聞いていたレスターは思い出す。最近、何度も執務官補佐が金色の猫に抱きついては引っ搔かれるところを…。

（うん、危ないのは補佐官の方だ…。）

諦めることなくアリスに抱きついては切り傷を増やす補佐官の姿を想像するのは簡単だった。

-----案の定、アースラに帰つて来て出迎えてくれた彼女は絆創膏だらけだったそな…。

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編（後書き）

レスターの方は今後ちょいちょい出します。

第八話 大晦日 年越し編（前書き）

みらいとリーゼ姉妹の出会いはその内書こうかな…。

第八話 大晦日 年越し編

レスター side

♪アースラ艦内・食堂・12月31日・pm20:56♪

「ようネーチャン一緒に飲ま（バキイー！）…。」

「アリス（猫）に絡むな酔っ払い…。」

「フィーラさん！…艦長がクロノにも飲まそつとしてます…！」

「全力で止める野郎共…！」

「…………了解…！」

現在、アースラの食堂は混沌としていた…。年越しパーティが開始されてしまらく経ち、いわゆる一次会状態になつたのだが、武装隊と艦長含む一部の大人組が暴走し始めていた…。

「大丈夫ですか執務官！？」

「すまない、助かつた…。」

「リンクティ提督は一体何本飲んだ…？」

「…。（空き瓶の山を指差す）」

「ひい、ふう、みい、よ……七本！…？」

乗組員に未成年も少なからず存在するアースラ。しかし、どうせなら年が変わるまでは起きていたいので、結局この戦場染みた宴会場にいるしかないのだ…。それ故、未成年と良識ある大人達が全力で鎮圧を続けていた。

その様子を遠くから、レスターは炭酸飲料をチビチビ飲みながら見ていた。自分は仲間達とちやっかり安全地帯に居たりする。

「改めてみると…、フィーラ教官つてすっかりアースラで馴染んでるよな。」

そう言つたのは、武装隊で比較的仲のいい『ドートレス・リーオー三尉』。それに同調するよつこ、『ジム・ヘリオン空士』が頷く。

「俺も最初は認知外世界出身って言うから、どんなヘッポコかと思つてたよ…。今思えば、すごい失礼な考え方だよな…これ……。」

いつだかの訓練で質量兵器の恐ろしさと、しばらく共に過ごすうち
にファイアの人格を知った彼は、管理外世界に対する偏見を無くし
ていた。

「ところでレスター、あの馬鹿の様子は？」

「ん？ああ、あいつか…。今は視力も聽力も回復してるよ。ただ、
レアスキルと心が…。」

ファイアに喧嘩を吹っかけた拳句、逆上して非殺傷設定を切りながら
レスラーごと攻撃した光一は、今は魔道科学による治療を受け、
医務室で呻きながら眠っている。本来なら懲罰物：下手したら殺人
未遂だが、ファイアが訴えなかつたことと、光一の惨状を見たリン
ディ提督たちが『もう充分罰を受けた』と判断したので不問となつ
た。

「そもそも、ぶつちやけ光一は女性局員と武装隊全員に嫌われ
ていたので誰も嘆かなかつた。

「まあ、奴にはいい薬になつたろうぜ…。」

「だいたい…なんでいつもレスターはあのアホと一緒にいるんだよ？」

「こっちにも色々事情があつたんだよ…。でも、もつその必要はなくなつたさ…。」

フィーアと自分の素性を話しあつのは光一のこともあり、また今度と「こう」となつた。だが、確かに今のこの状況での手の話をしたくないのは確かだ。それに…。

…もつ原作のことば忘れて、自分らしく、ここにひとと一緒に馬鹿やつながら過ごうやつ…。

そう決意を改めたレスターは、もう転生した自身のことを気にするのを辞めていた。そこへ、3人にフィーアの声が掛けられる。

「シャーマン！！リーオー！！ヘルオン！！手伝ええええええええ…!!イミィがああああああああああ…！」

「げ…？」

「執務官補佐つて確か……。」

「隠れ酒乱じや……。」

年越しまであと二時間……彼らの夜は長い……。

みらい side

→八神家・21・45→

ところ変わつてハ神家。みらいはベランダで人型になつたザファーラと酒を飲み交わしていた。女性陣はリビングで『ガつか』を見ながら爆笑している。いや……シグナムだけ必死に耐えていたな……。

「……普通に楽しみやいいのに……。」

「我々の中では一層プライドが高いので仕方ありません……。」

「……お前も敬語なのな……。」

「どちらの代の貴様に見えませんが故に。」

微妙にニヤリとしながら言いやがつたザフィーラに若干腹をたてながらも、御猪口で酒を煽るみらい。正直に言つと最近リーゼ姉妹とフィーラが来ないので、いわゆる飲み友がいなくて寂しかった。なので、今酒を共に飲む相手が居て結構嬉しかつたりする。

「それにしても……、来年からマジでどうじょう……。

「……申し訳ありません。」

「いや、お前らのせこじやなこた。反省するな。」

困つてこるのは、みらいの周囲に居る管理局関係者のことである。年末故に、家族で過ぐすのを優先しているため、高町家とテスタロッサ家には今のところ会っていない。リーゼ姉妹やアースラメンバー、そしてフィーラは忙しくて直接は会っていない。

だが、それも年明けに色々とひと段落したら話は別である。

「どうあえず、なのはとフィーラ……あと、フライアはまだ平気だな……。考えるのは、あいつらを呼んでからにするか。」

「リーゼ姉妹と言つ方々は？」

「あの二人は呼ばなくとも来るけど、呼んでも来ない。まあ、ジユエルシードほつたらかしにしてたぐらいだから平氣だろ。何より、悪い奴じやないから大丈夫だ。」

「信頼してるようですね。」

「…それに対し、みらいは一ヶ口コしながら答える。

「ああ、はやてやお前らと同じくらいい大切な奴らぞ…。」

外が本格的に寒くなつてきたので、二人はその会話を最後に家の中央に戻つていつた。丁度、我慢できずに爆笑しているシグナムという珍しいものが見れたのドラッキーだった。

やや遠く離れた場所から、ハ神家を監視する一人の人影があつた。先程みらいの会話にも出ていたリーゼ姉妹である。二人は寒い夜空の下、ずっと刑事の張込み染みたことを続けていた。

「…ねえ、アリア…。」

「……言わないでよロッテ…私だつて今まで心が挫けそうよ…。」

監視しながら盗み聞きもしているリーゼ姉妹。その最中、みらいがザフティー・ラに言つた言葉が一人に突き刺さつた。

「…（リーゼ姉妹は）はやてやお前ら（家族）と同じくらい大切な奴らさ。」

自分達を、彼が大切にしている家族と同じくらい大切な存在と言つてくれたのはとても嬉しかつた。しかし、同時に悲しくもあつた何故なら……。

「…自分達は彼から、その大切な家族を奪おうとしているのだから…。」

そもそも、『闇の書』の主であるハ神はやての元に襲撃者と次元漂流者が現れたのがことの始まりだつた。襲撃者が現れた当初、二人は慌てて阻止しようとしたのだが、次元漂流者が代わりに撃退してしまい、彼はそのまま居候の身に落ち着いてしまったのである。

無論、計画の障害になることを恐れて謎の襲撃者を撃退しながらみらいを排除しようとしたのだが…。逆に返り討ちに遭つてしまつた。その後、弱つっていたところを襲撃者組に襲われてしまい死にかけた。そこを、何の因果か知らないがみらいに助けられてしまい、それを機に交流が始まってしまったのだ。

「気づいたら私だつてミランのことよりもはやてのことも好きよ…。でも、しあうがないじゃない…！」

「アリア…。」

最初は、自然と接触しやすくなつて好都合と思つていた…。しかし、自分達が封印せねばならない『闇の書』の主、はやてやみらいと共に過ごすうちに迷いが生じ始めた。そして、いつしかみらいとはやてを計画遂行のための対象ではなく、彼と同じく大切な存在として見ていたのだ…。

「それでも…父様の目的のためなら、私は…。」

- - - 心を鬼にする--!

本人は気づいて無いかもしぬないが、リーゼアリアは泣きそうな顔でそう言つた。それに対して、リーゼロッテはもう何かを言つのを諦めた。

- - - 様々な信念と思惑が交差する大晦日。その日、ある者は自分らしさを、ある者は家族を守ると改めて誓つた。彼らは…彼らはその硬い決意を胸に、新たな年を迎えるのであつた。

? ? ? side

♪謎の空間♪

「ほう…中々、おもしろい世界に飛ばされたよつじやないか……。

」

そこは真っ白で何もない謎の空間。否、人が3人居た。一人はただ平凡な見た目の少年、一人はシンプルな格好でありながら神々しさを感じる老人、そして最後の一人は、船乗りが被るような三角帽子に青いコートを身に着け、金髪で青い目をした青年であった。

平凡な少年は目の前の光景に啞然としていた。つこさつき自分は事故で死に、気づいたらこの空間に居て、神を名乗る者から転生の話を持ちかけられたのだが…。

- - - 金髪の青年が突如現れ、神を瞬殺したのである。

今、神を名乗った老人は青年に踏みつけられていた。そのまま青年はおもむろに空間にヒビを入れ、何かを映し出した。そこには、謎の一団とズンチャン騒ぎ状態の“赤みのかかった茶髪の青年”が映っていた。

「我が孫ながら元氣そうでなによりだ。すぐに連れ帰るのはやめとくかな…。」

「…あ、ああ…貴様、神である」のワシに手を出しつただで済むと
……。」

「どうやら老人はまだ死んでなかつたようである。だが、青年は特に
気にした様子は無い。」

「別にお前が死んだつて世界は壊れないだろ？神は世界の仕組みを
“創つただけ”で“管理なんか微塵もしてない”んだから。」

「ツー？ 貴様はいつたい！？」

「……“ベルファイア”で通じるか？」

その瞬間、老人の顔がみるみる内に青くなつた。やがて、かすれる
ような声で言葉を絞り出した。

「……ち……ちつ……“殺神鬼”……だ……と……？」

「そういうこと……。ではでは偉大なる異世界の創造神様？あなたの
力の源である“信仰”は、俺が司る“神に対する怨念”に勝てるか
な？」

「……その瞬間、真っ白だった空間が真っ黒に染まつた。

「あいら残念、惨敗のよつで…。」

同時に、黒くなつた世界に一層黒い何かが蠢いた…。

「ふ…ふせ…」

「サヨナラ…【喰らえ・黒靈】。」

「うわああああああああああああッ-----」

瞬間、老人は黒い何かに飲み込まれた…。少年はその光景を啞然としながら眺めているしかなかつた…。神を名乗る謎の老人をあつさり消し去つたこの男はいつたい…。

- - - 急にその男が少年に話しかけてきた。

「おつと、ほつたらかしにして悪かつた。まだ間に合はずだから、魂を肉体に帰してやる。」

「え…あの、いつたい何が起きてるんです…？」

「とりあえず、お前は暇潰しのために殺されて別世界に飛ばされる

といひだつた。俺は、ちょっと孫を探しに来ただけさ……。」

何故か少年は神を殺したこの男から恐怖を感じるとは無かつた。むしろ、安心感を感じる。思わず問い合わせてしまった。

「あなたは本物の神様なんですか……？」

「……すると、男は自嘲気味な笑みで答えた。

「いや……ただの親馬鹿で爺馬鹿さ……。」

「……3千年以上続いた戦乱の時代に、終止符を打つたベルフイー
ア連邦の創始者は答えた。

第八話 大晦日 年越し編（後書き）

フィーラの爺さんは正真正銘チートを予定していますので、当分本編に絡めません。代わりに転生者がこれ以上送り込まれなくなりました。

プロフィール2（前書き）

転生者二人とじーちゃん。あと神について

プロフィール2

名前 レスター・D・シャーマン（D=デカルト）読みは『ディー』でいいです。

年齢 18歳

出身 転生後はミッドチルダの一般家庭

階級 三等空尉

武器 『ガデラーザ』（ガンダム00参照）縮小した本機を右腕に装着。GNファング使用可能

備考 転生者その一。前世ではメカ好きの高校生だったが、神の暇潰しのために（本人は知らず）殺されてリリカルの世界に半ば強制的に転生させられた。能力の希望を訊かれた時、レスターが所望したのは自身が最も好きなMA『ガデラーザ』をデバイスにすることだった。意外とすんなり要求は通った模様。しかし、いまのところGNファング使用数は十個前後が限界であり、現在も数を増やすために特訓中。

原作知識を待つてなかつたので、展開を壊すことが怖くて転生後の自分の在り方に迷いを持っていた。しかし、フィーアと光一の「コタゴタを経て原作とか関係なしに自分らしく生きることを決めた。

名前 閃夜光一

年齢 18歳

出身 謎（光一日く、その方が主人公らしいとのこと…）

階級 二等空尉

武器 ワークスカリバー』特に能力なし。

備考 転生者その二。前世でもイケメンだったが、転生の際に調子に乗つて金髪オッドアイにしてもらつた。自己中な性格は元々で、それが原因で彼女はできなかつた…。それを自覚することなく転生、神に願いを叶えてもらつたことをいいことに、自身を『神に選ばれた存在』を自称。神に貰つた『SSS級魔力』と『ベクトル操作能力』を駆使して好き勝手やつてきたので、関わつた人間のほとんどが彼を嫌つている。アースラに乗り込んだ時は自重していたが、原作介入が目的だつただけである。

フィーラの逆鱗に触れ、生死の境を彷徨つた上に能力を奪われた現在ではただの移動砲台である。しかも、SSS級の魔力をうまく収束できず、『AA級の魔法しか撃てない』ことが発覚。その内に戦力外通告をくらつ予定…。

名前 ヴィリアント・リーガ・ベルフィア

年齢 63歳なのが精神年齢は…（見た目は20代）

出身 ベルフィア連邦

備考 フィーアのじーさん。見た目は金髪にしたフィーアそのもの。魔法主義と科学主義による戦乱の時代をもの10年弱で終止符を打った大英雄。今ではかつての部下や弟子に連邦を任せて隠居していたのだが、孫であるフィーアが行方不明になり、娘であるベルノアにお願い（脅）されて文字通り無限の彼方からやって来た。義理の息子や部下にさえチート呼ばわりされるその力は半端なく、異世界の神をいとも容易く殺す。もつとも、その力に触れる事件に巻き込まれている間にフィーアとリーマス、そしてエミリアの悲劇が起きてしまったのだが…。

フィーアを発見したものの、思ったより楽しそうにやっているので、もう少ししほっとくことにした。ついでに、自分もこの世界をちょっと満喫する気のようである…。

名前 創造神

年齢 不明

備考 死者に転生を持ちかける怪しげな老人。しかし、正真正銘ち

やんとした神様。暇を潰すために世界を創造し、ずっとその世界を眺めていた。が、結局それにも飽きて適当に死人を別の世界に送つてみることにした。そうやってしばらくふざけていたのだが、『殺神鬼』であるヴィリアントに殺害される。

彼ら神々の力の源は人々の『信仰心』である。なので、人間に感謝されたり祈られたりすると神は力が増えるのである。よって、少しでも力を手に入れるために転生者には能力を受け取らせ、感謝させようとしていた。結局、ヴィリアントの力の源である『神に対する怨念』には微塵も及ばなかつたが…。

プロフィール2（後書き）

レスターの友人たちはMSの名前をネタにしていますが、転生者ではありません。

あと、どうでもいいんですけど『ベル（ノア）フィーア』なんですね…。

第九話 明けましてO H A N A S H I だ（前書き）

さて、本格的に狂ってきた…

第九話 明けましてOHANASHIだ

みらい side

／八神家・0：00～

「…………あけまして、おめでとうございます。」「…………

除夜の鐘が鳴り響く中、はやてとみらいに倣い、守護騎士の4人も見よう見まねで同じように新年恒例の挨拶を交わす。

日にちが変わり、同時に年が変わった。波乱に満ちた一年が終わり、また新しい日々が始まるのである。もつとも、今年も静かに過ごせなさそうだが……。

「さて、寝るか。」

「さうやね、私もそろそろ限界や……。」

「え？ もう寝るのかよ？」

「元気が有り余つてしようがない、ヴィータがごねる。しかし、朝になつたら色々やることがあるので眠つておきたい……。

「朝になつたら初詣に行くんだから、今のうち寝とけ。」

「でもよし……。」

「ヴィータ……、あまり主達を困らせるな……。」

「…………わかつたよ、寝るよ。」

シグナムにまで言われてしょんぼりするヴィータ。若干哀愁漂う彼女をはやてが寝室に連れて行つた。一人が寝室に向かつていつた二人をみらいは苦笑いで見送つた。そして、慌てて止める。

「おこな、ヴィータ。お前だけ歯磨きしていないだろ?」

「ええ~めんべくせよ~~。」

「…………三連休でスマッシュ。」

「幽游仙せどりだなー。」

「今年もこんな調子かよ……」と思いつつ、彼の表情は楽しそうである。

レストランside

～アースラ・宴会場（食堂）・000～

「3...」「」

「2...」「」

「1...」「」

「0...ハッシュ...」「...」「」

時計が0時を回り、新年を迎えることができた。さつきまで充分騒がしかつたアースラの食堂はさらなる熱気に包まれた。酔い潰れたり潰された人も今では全員起きて一緒に騒ぎ直していた。

しかし、その騒ぎから抜け出して医務室に向かつた者たちが居た。一人は転生者であるレスター、もう一人は次元漂流者であるフィーアだ。

「…しつかしまあ、大分離れたつてのにここまで馬鹿騒ぎの音が聴こえるとは……。」

「…じうじう仕事で出世するとな、自然とああいう風に騒ぐ暇無いんだよ。だから余計に羽田を外したくなるつてもんなのさ…。」

二人は医務室で伸びてる光一を含めて、互いに知つてることを話し合つことにしていた。お祭りモードに拍車がかかり、食堂に人が集まつた今なら話をしやすいと思つたのである。

そして、ついに医務室に着いたのだが…。

「…何で執務官が居るんですか？」

どういうわけか先にクロノが医務室に居た。今から大っぴらに話せないような話し合いをすると言つのに何故いらつしゃる?

レスターが困惑する中、フイーアはいたつて冷静だった。そんな彼に、レスターと同じように困惑しながらクロノが話しかける。

「…フイーア、なんでシャーマン二尉まで連れて来た?」

「こいつも闇夜と同じなんだよ…。」

それを聞いた途端、クロノの目が驚きで見開かれる。そして彼の口からよどみなく出た言葉は、今度はレスターを驚愕させた。

「なー? 彼も『転生者』なのかー?」

「ツー?」

「…なんでクロノが『転生者』という言葉を知っている…?」

互いに警戒の色を出すが、フイーアがそれを霧散させた。

「落ち着けクロノ…。『リッドで何回も襲撃された』のは分かつて

るが」「イツは大丈夫だ。」

「……君がそう言つなら信じよつ。確かに、彼は今までの奴らとは違うみたいだ……。」

今会話から察するに、クロノも転生者に難癖つけられて襲われた身のようである。しかも、フィーアと同じく何度も……。

「つまり、クロノ執務官も関係者といふことですか？」

「そうだ。さつきフィーアに念話で呼ばれたんだ。さて、色々説明してもうひづ？」

「……ズドムツ……」

いきなり鈍い音が響いたと思つたら、フィーアが眠っている光一に溝打ちを決めていた。その容赦無い光景に、どんな状況になつてもフィーアを敵に回さないようにしようと誓つ一人であつた……。

「ツー？ うえつほー！ げほッ！ ！」

「起きろボンクラ。」

……こいつで半ば強引に話し合いは始まった。

（会議進行中）

「なるほど、神様か……って、信じると思つてゐるのかー？ 真面目に話せ……」

「やつ言われましても……。」

想像以上にぶつ飛んだ話の内容にクロノがキレタ。そりや、眞面目な話をしにきたのに『神様』だの『輪廻転生』だの言われた挙句に、自分達の世界を『アニメの世界』と言われば怒る……。

「フイーアー！ 君からも言ひてくれ……！ フイーア？」

……クロノが話をフイーアに振つたのだが、彼は想像以上に難しい顔をしていた。

「…どうしたんだ?」

「いや、あとで話す…。ところで閃夜。」

「はひい!?

すっかりフィーラのことがトラウマになつたようだ、光一から上ずつた返事が返ってきた…。

『『』の世界』は『お前の知つてゐる世界』とのくらべ違つ?』

「…居るはずの人間は全員居るけど、居ないはずの人間が何人か居たつすよ……。」

- - - 居るはずの人間は全員居るけど、居ないはずの人間が何人か居たつすよ……。
- - - 二人の次元漂流者。
- - - 謎の暗躍組織。
- - - 死ぬはずだったプレシア。
- - - 転生者たち。

「それだけじゃ無い……まるで物語が進まなくなつたよつに静かすぎ
る……。」

「どうこう」とだ?

彼の言葉が引つかかり、クロノが尋ねる。すると、光一はクロノを見ながら口を開いた。

「実は今年中にもう一つ、大きな事件が起きた筈だったのさ……。ア
ーメ通りなら、あんたと因縁深い『闇の書』による事件がな……。」

「なんだと……。どうこう」とだそれはーー?」

「落ち着け、後にしろクロノ。」

自分の父親が死んだ原因である、『闇の書』という言葉にいきり立
つクロノをファイアが制した。そして光一に続きを促す。

「俺の記憶が正しければ今年の……いや、もう去年か。12月前後に
は、局員や高町なのはが守護騎士に襲われて事件が始まる筈だった
んだ……けどこの通り、みんな無事に正月を迎えたまつた。」

(（（…その格好で言われてもなあ……。）））

その事件に関係無くわざわざ自業自得とは言え、明らかに満身創痍の状態で言われると微妙な気分になる。どうにか空氣を拭し、クロノが改めて問いただす。

「…それで、『闇の書』の主は判つているのか？」

ロストロギア『闇の書』は主無しでは何もできない…否、主になるべき人間の元にしか現れない。そして、書のページを埋めきるまで主の体を蝕んでいき、最終的に主を殺す。もつとも、書を完成させても暴走して世界を滅ぼすのだが…。

そんな危険なモノを放置できないし、場合によつては主に選ばれた人間を助けなければならぬ……のだが…。

「ジユエルシード事件の民間協力者、『ハ神みらい』の身内である『ハ神はやて』だ。ついでに彼女が車椅子生活を余儀なくしてる原因は『闇の書』の侵食なんだよ…。」

「…何？」

みらい経由で親しくなった妹分の名前が出て怪訝な表情を見せるフイーア。しかし、彼が不審に思った理由は別にある。

「なあ、クロノ……。」

「どうした?」

「その本は持ち主を侵食し続けるんだよな? とこいつは、はやくの奴は体を悪くする一方の筆だよな?」

「この後『閃夜光』は、自分が存在するこの世界がアニメでもなく、原作の展開なんて運命染みた物が無い現実の世界であるとようやく認識する。

「そのはずだが……何かおかしいことでも……?」

「……『闇の書』が狂ったのか、はやてがすじこのか知らんが……あいつ……。」

上へ上がるへりこないう出來るよひこなつてたゞか。

第十話 守護騎士と魔王（前書き）

連続投稿。でも中々進まない！！

第十話 守護騎士と魔王

フィーア side

「アースラ・輸送ポート前・1月1日・am7:30~

「それでは、しばしお別れをさせていただきます。」

「向こうに帰つても元氣でね。教導の方、またその内お願ひするわ
ね?」

「その点に関しては保留とさせていただ...。」

現在、フィーアはアースラの面々に見送られながら地球に帰つとしていた。武装隊にいたつては全員敬礼までしてくれている...かなり嬉しかった....。

「おつとやう言えば、クロノ、レスターーーー!」

「ん?」

「なんですか？」

「…無茶するなよ？」

転生者の言葉を借りるなら『原作が滅茶苦茶になつた』今、光一の知識は役に立たないかもしないものの、この事件に『ギル・グレアム』提督が関わっているとなると放置できないので、ミッドチルドや本局ではクロノとレスターが、地球ではファイアが捜査することになった。

捜査の根拠が『一般局員（転生者）の前世の記憶』なんて言えないでリンクディにすら教えてない。なので基本的に3人はいつも通りの仕事と生活をしながら、じつそり調べることになったが…。

「心配には及ばない。そっちこそ、気をつけてくれよ？」

「分かつてゐる。……おい、アリス…いい加減に抜け出して來い。」

『みやあ。』

「ああー?アリスちゃんー!」

フィーアと一緒にアースラから去つてしまふ事を惜しんで、エイミイがアリスを抱きしめていたのだが、彼の呼びかけに答えたアリスはあっさりとエイミイの腕から逃れて、フィーアの肩に乗つかった。

「それでは皆さん、御機嫌よろしく。」

「…その言葉を最後に、フィーアはアースラを去つていった。

なのは side

（海鳴市・とある神社・am8:45）

「はやてちゃん、明けましておめでとう…！」

「明けましておめでとうな、なのはちゃん…！」

初詣に来た高町家と八神家。丁度神社の入り口あたりでバッタリ出くわし、新年の挨拶をしていた。みらい達大人組は挨拶もそこそこに世間話を始めている。因みに、ザフィーラは狼形態である。

「ヒーリード、はやてちあん…その人たちは？」

「私たちの新しい家族や。……少し理由が複雑やから、後で詳しく教えるわ。」

「…もしかして魔法関係なの？」

「うふ…。」

不意に守護騎士達の方に視線をやるなのは。すると、赤髪を三編みにした少女と目が合つた。その後、じりじりわけかジーッと見つめてきた… ていうか睨んでる？

「えつと… そんなに、睨まないで？」

「睨んでねーです。」うつこいつつきなんです。」

「ヴィータ、嘘はあかん。なんや悪い子はいひやで。」

そつまつてはやでがポケットから取り出したモノを見て、ヴィータは顔を真っ青にした。

「ちょっ、はやてー? なんでシャマルのオセチ(生ガリ)の余りなんか持つてるんだよー?」

「ふつふつふつ…、決まってるやないか…これを何なのか教えずになのはちゃんに食べさせ…。」

「はやてちゃん…少し、頭冷やそうか…?」

- - - アツ - - -
- - !?

「私、なのは。高麗なのはつて言つただ。」

「ヴィータだ、よろしくな。みらいから話は聞いてるだ。」

皿にも止まらぬ速さで折檻を喰らつたはやてを余所に、一人は改めて自己紹介をした。丁度、大人組も話を終えたようである。

「お~い、あなた行くやつ……って、今度は何したんだはやで……。

」

「これ……。」

そう言つてシャマルのオセチ（毒物）の残りをヴィータが見せる。
それとなのはを見て、大体のことを察したみら。

「…全く、正月早々シャマルの料理（産業廃棄物）なんか持ち歩き
やがつて……。」

「ねえ、ちょっとー…さつきから変な称号付いてない！？…ていうか
段々酷くなつてるー…？」

悲しみに暮れるが、この一週間でシャマルの料理の腕は上達するどころか墮ちる所まで墮ちた。故に、料理に関してシャマルを弁護してくれる者は居ない。

「ヴィータちゃん、シャマルさんの料理（殺人兵器）つてどのへり
い酷いの？」

「…聞きたいか？」

「……まつぱりいいの…。」

ヴィータがあまりに虚ろな表情を見せたために訊くのが怖くなつたのはあつた。

みらい s.ride

何をしたのかは不明だが、一瞬でなのはがKYOしたはやてを車椅子で連れてくみらい。そのうち神社の本堂に辿り着いた。

「みらい殿、これはどうすればよいので?」

初詣どころか神社すら知らない守護騎士たちを代表してシグナムが尋ねる。時間が掛かりそうなので高町家の面々には先に済ませてもらつた。

「とつあえず、ほひ。」

チャリンッと、彼らの手に小銭を渡す。

「！」の小銭をあの賽銭箱に入れて、今年全体を通しての田標や願いが叶つようにお祈りするんだよ。」

「成るほど、では早速行ってまいります。」

「さつや否や早速お賽銭箱に直進する3人と一匹。やじでいい加減ダウン中のはやてを起こすことにしたみらい。」

「お~い、起きな~。」

「ハツ……！」はびく？私は美少女？」

「はいはい、アホやつてなこでわざわざ来ません。まれ、小銭。」

「ふう。ノリが悪いでござれど……。よしにしようと……。」

……やつはひしませんが、弱々しくも車椅子から立ち上がった。

みらいがやって来てからというもの、掛かり付け医である石田先生でさえ理由はわからなかつたが、はやての足が徐々に回復してきたのである。本当に微々たる回復量だったが、3年近く経つた今は立ち上がるだけなら出来るようになったのでだ。もっとも、移動の方は当分車椅子のお世話になりそうであるが…。

「今年は何を祈るんだ？」

「そうやね…家族も増えたし、友達も出来たし、足の病気は治りそ
うやし……どうしよう？」

「…氣づけば自分の求めたモノのほとんどが手に入つていた。

「だったら、『今年もこの幸せが続きますよ』ってのはどうだ
?」

「うん、それがええね。」

ちょうど守護騎士メンバーが終わらせたらしく、二人は並んで御賽
銭箱に小銭を入れて両手を合わせた。その様子を見た参拝客達は、
全員微笑ましい光景を見るような視線を送つたといつ…。

「…………みらいさん…。」

「ん？」

「これからもよろしく…！」

「…」

二人の後ろ姿は、仲の良い本物の親子に見えたそうだ。

第十一話 懐かしの…（前書き）

わざと出せたよ、この3人…。

あ、今更ですけど…ファーレとみらいは描[画]が無い限り、戦闘中も常に私服です。

第十一話 懐かしの…

フィーア side

（海鳴市・前回のマンション・1月1日～

「…やつと帰つてこれた……。」

『たまりにたまつた埃がすゞしつ…』

「それは無い。夜叉鴉に留守番頼んどいたから。」

例によつてアリシア（猫形態）を肩に乗つけながら、フィーアは海鳴市にあるかつての拠点のマンションに帰つてきた。ジュエルシード事件の時は、田中ほどんどフェイト達と過ごしていたので自身の部屋はただの寝床になつていたが、事件が解決してフェイト達がミッドチルダに帰つた今は、本格的にフィーアの自宅になつた。アリシアもフィーアと行動を共にするようになつてからは、アースラに出向くまではそこで一緒に暮らしていた。

『それでも、掃除はしまじょつよ？気分的に。』

「まあ、それもいいか。おつと、じじだじだ……。」

気づいたら自分の部屋の前に着いた。ところが、扉の前でフイーアが動きを止める。

「……。」

『びひしたの……。』

「……誰か居やがる……。」

『えー?』

言ひや否やフイーアは右手に“黒い煙”を纏わせる。実はコレ、フイーアの魔剣である『ヴィルガロム』なのである。手入れをしている最中にアリシアが勝手に触り、妖力に反応して異常をきたしてしまい、原型を留めなくなつた上にプログラムと分離できなくなつてしまつたのだ。だが、煙状態なのは未使用の時のみで普通に使う分には支障が無かつた。むしろ、煙状態の方が携帯に便利なので結果オーライである。

「留守番させた夜叉鴉が無反応となると……かなりの手練か……。」

夜叉鴉は並みの戦士なら秒殺できるくらいの戦闘力がある。そんな鴉達がたむろしているこの部屋に居座るとなると、相当の実力者に違いない…。フィーアは警戒心を一層強くする。

「部屋の中が吹き飛ぶかもしだねえが…【ショット】。アリシア、お前は離れてる。」

『分かつた。』

フィーアはアリシアを肩から降ろし、ヴィルガロムを室内戦でもつとも恐ろしい威力を發揮すると言われる散弾銃に変化させ、ドアノブに手をかける。そして…。

- - - キイイツ…

ほとんど音を出さずにドアを開いて中に進入する。玄関には誰もないことを確認し、すぐ近くの部屋に入つた。その部屋の安全を確認し、全神経を集中させてマンションの部屋全体の気配を探る。そして、侵入者の気配を感じた…。

(リビングか…。)

気配を消し、侵入者が居るであろうリビングに向かうフィーア。そして、彼はその姿を捉えた。侵入者は三人…のんきにお茶を飲みながら仲良くテレビで正月番組を見ていた。

「…その姿を見た瞬間、フィーアは緊張の糸をぶつた切った…。

侵入者が相当の実力者というフィーアの予想は見事に的中していた。並みの戦士ではこの三人にはまるで歯が立たないのは間違いない。金髪で赤目の中年女性はAAA級の魔力を持つてゐるし、年に不相応な実力がある。それに比例して、彼女の使い魔である犬耳と尻尾を生やしたオレンジの髪の女性も強い。そして、その二人の保護者である黒髪の女性はオーバーS級の魔力を持つた大魔導師である。

「…だが、夜叉鴉が無反応だったのはそんな理由では無い。

「あ、フィーア…！明けましておめでとう…！」

「遅かつたじゃないかい。」

「今更だけど、お邪魔してるわ。お久しぶりね。」

「…………といあえず、新年おめでとう…フェイト、アルフ、そんでフ

レシアさん…。」「

……ジコホールシード事件の中で共に過いりし、共に戦った仲間である『フェイド・テスタークッサ』と『アルフ』。そして、『プレシア・テスタークッサ』がそこにいた。

フェイド・シード

「あれ? なんていきなり○△のポーズになつたのかな? 疲れてるのかな? 」

「どうしたの、フィーラ?」

「変なもの食べて腹でも下したんじゃないかい?」

最近『転生者』のこととで神経質になつてたので、その分脱力感の反動が半端無いことをまるで察してくれないフェイドとアルフに若干涙目のフィーラである。だが、そんな理由で彼女たちに文句など言えないで忘れることした。

「いや、なんでもない…。それより、なんで俺の部屋に?」

「え? リンディ提督から話聞いてないの?」

「んあ…?」

「私が説明するわ。」

そう言つたのはプレシア。彼女曰く、最近テスラロッサ親子に纏わり着く不審者が増えたそうだ。当初は前回の暗躍組織の残党が復讐でもしにきたのではと思ったのだが違うようで、どちらかと言うとストーカーの類だったらしい。だが、気味の悪さと数の多さが半端無いのだった。

…なにが不気味って、フェイトに纏わり着く奴等の数が一番多い上に、そのほとんどが無駄に大人染みた9歳児だったらしい…。

(…『転生者』じゃね?)

「それで、リンディ提督に相談したのよ。そしたら、『管理外世界に行けばマシにならないかしら?』って言つたのよ。」

…まあ、確かに管理局員でも無い限り管理外世界にまで追つてくることは不可能だろう。しかし、何故に俺の部屋？なんて思つてたら、それを察したよつてフェイドが口を開く。

「あ、私たちの部屋はほんとに帰る時に解約しちゃつたんだ…。それを言つたら、リンクティ提督がフィーアの部屋ならまだ平氣だつて言つから…。」

「…因みに、その話はいつしたんだ？」

「えつとね、大晦日の一週間前くらいかな？新年はこじで迎えちやつた。」

「……あの性悪め…。」

「…最近、何か企んでるような顔してると思つたら二つなること予想してたな…？ふふふ…いつか覚えてろよ…次回、教導の仕事頼んできたら絶対に引き受けたやる…訓練にあなたも参加する条件でな…！」

「フィーア、あんた顔が怖いことになつてるよ…？」

「気にするなアルフ、今年の抱負が決まつただけだ…。おつと、そ

「うごえば…。」

アルフに軽く返事をし、おもむろに外へ出たフィーラ。そして…。

『ふぎや あああああああ…』

「あだだだだだだ…！ 暴れんな…！ 諦めろ…！」

何かの悲鳴と共に、フィーラが何かを持ってきた。よく見るとそれは、金色の毛並みと一本の尻尾を持つた猫だった。

「ほー、プレシアさん。」

『ツー…』 もあああああああああ…』

「え、私? ……す」 い嫌がつてるわよ…?』

「氣にするな、ただのシンデレラだ。」

『フッシャアアアアアア…』

激しく抵抗するその猫を問答無用でプレシアに手渡すフィーア。すると、プレシアの腕に収まつた途端に急激におとなしくなつた。

「…………？」

『……。（ベクビク）』

しばらくその猫、アリスを…自身の娘アリシアを腕に抱き抱えるプレシア。おもむろにアリシアの顔をジーッと見つめる。それに対し、まだ自分のことは黙つていたいアリシアは内心ドキドキしていたが、同時に懐かしい母のぬくもりに安らぎを感じていた…。

「何故かしら…。この子を抱いてると、とても懐かしい感じが…。」

「…つて、母さんー？泣いてるよー…。」

「え…？」

フィートに言われて氣づくと、プレシアは自然と涙を流していた。ただ、流した涙に悲しみは一切感じられず、むしろ嬉しさや喜びさえ感じた…。アリシアも同様のようで、猫の状態にも関わらずプレシアと同じような表情を浮かべてるように見えた。

「……やつね、お葉巻に呉えてやつてもうつわ。」

「…………やつね、お葉巻に呉えてやつてもうつわ。」

プレシア本人が自覚していないことはいえ、かつての念願だった親子の再会を果たしたのだ……。もうちょい堪能せてもバチはあたるまい。

「さてと……。フロイト達は今日、予定あるのか？」

「ううん、無によ。とつあえずフイーアと合流してからと申つてたんだ。」

「丁度ここ。このあとハ神家に行こうと思つたついで、一緒に行こう。」

「うそ……。」

『失礼、フイーア殿。』

突如、フェイトの『テバイス』であるバルティッシュが話しかけてきた。

「おお、久しぶりバルティッシュ。」

『御無沙汰しております。ところで、リリア殿は?』

「そういうえば…、いつもより静かだと思ったらリリアが居ないじゃないかい…。」

「そうなのである。今日、フィーアはリリアを身に着けてない…というか連れてきてない。」

「ちょっと訳ありでな…、アースラの武装隊の一人に預けてきた。」

転生者の一人である『レスター』のことである。彼にはクロノと共にミッドチルダの方で頑張つて貢うことになっている。しかし、『闇の書』に関わる者たちの規模と『転生者』特有の異能の力は未知数であり、場合によつては一人には荷が重すぎる可能性があつた。

なので、そんじょそじらの魔導師よりよつぽど強いリリアを一人に預けてきたのだ。元々、フィーアに同行せられてたのは、フィーアの補助やサポートでは無くて実戦経験を記憶し、成長させるためであつた。その経験とデータをフィーア以外の誰かのため生かすことこそ、リリア本来の役目なのである。

『残念です。また一緒に話がしたかったのですが…。』

「そういえば、バルティッシュっていつもリリアと通信繋いでたね
…。」

「マジで…？あいつ何も言ってなかつたけど…？」

「…言つ必要ありました？」

ナチュラルにリリアの声が聴こえた気がしたフィーアだつたが、気を取り直して八神家に遊びに行く準備を始めた。フェイトとアルフも同様である。すると…。

「… ブルルルルル！」

「ん？電話か…。どうせまた変な勧誘か詐欺だらう…。」

自分の身内は基本的にリリアを通した『思念通信』か、フェイト達がよく使う『思念通話』で連絡を寄越して来る。なので、家の電話

を利用していく者は基本的に口クでもない奴ばかりだった。

「でも、フイーア……今、そのリリアが居ないんじゃなかつたのかい？」

「あ、そつだつた……」

アルフに言われて思い出すフイーア。よく考えると、みらいとは特に思念通信を多用しまくつてたので、下手すると彼かもしれない……。そつ思い、受話器を取ると……。

『おこいしいしいしい……リリアを誰かに預けるなら先に教えるおおおおおおお……』

「うおおおシーヘザーパリカ……とつあえず、新年おめでとう。」

『おひ、明けましておめでとう……じゃ、ねえよ……しおり大切な相談事があるってのに向してんだお前はああああああああ……』

「……相談事?……『闇の書』のことか……?」

『なんだ、もう知ってるんだ……まあいい、とにかく来てくれ……。』

「分かった。フェイト達も連れてつて平氣か？」

『お、3人共居るのか？丁度いいや、むしろ連れてきてくれ。』

「はいよ。そんじや今から行くわ。」

『おう。待ってる。』

そこで通話は終了した。受話器を置いたフィーアは考える。光一から聞けるだけ聞いた話によれば、『闇の書』の侵食によりはやてが命の危機に瀕してしまうらしい。しかし、そうだったら今の電話でその事を真っ先にみらいが口にするはず。

「まあ、行けば分かるか……。」

「どうしたの？」

「歩きながら話す。とにかく、早く行こう。」

・・・転生者の話により、ある程度の事情を知っていたフィーアで
さえ、八神家で待つてた“モノ”には驚かざるを得なかつた……何
故なら……。

「おう、待つてただ。」

「久しづり！－！フェイトちゃん、アルフさん、フィーアさん！－！
あ、フレシアさんもお久しづりです！－！」

「明けましておめでとうや、フィーア兄！－！そんで、初めましてフ
ェイトちゃん！－！」

・・・戦友達と、鎖が解かれた一冊の黒い本を持った車椅子の少女
。

「ふむ……。この者達が、みらい殿の言つてた……。」

「あら、フィーア君つて結構かっこいいじゃない？」

「なんか、個性的な奴ばかりだな……。」

「我らが言えたことでは無いと思つぞ、ヴィータ……。」

「彼らの新しい家族たち……そして……。」

「初めまして……で、いいのだろうか？我が主の友よ。」

鎖が解かれた“もう一冊の黒い本”を手に持った、銀髪の女性がそう言った。

第十一話 懐かしの…（後書き）

因みに、まだ防衛プログラムは健在です。何が起きたのかは次回に
…。

第十一話 女神の書

みらい side

「数日前、八神家にて」

「『まづは～その幻想を～ぶち殺す～』。」

「バシッ！」

「はいーーー！」

「ああ、クソッ！—取られた！—」

「次、『俺が～俺たちが～ガ ダムだ～』。」

「バンッ！！

「ふつ…。遅いなヴィータ。」

「私服から騎士甲冑に替えてまでマジになんじやねーよー!?」

「せめてレヴァンティンはしまつとき、シグナム…。」

初詣を済ませた八神家一行は、そのまま遊びに来たなのはを加えて家でカルタ遊びをしている。なのはの家族は先に家に帰った。

因みに、なのはに『闇の書』と『ヴォルケンリッター』の説明はした。彼女らが周囲に迷惑を掛ける気が無いというので、特に気にすることは無かつた。ただ、『闇の書』がロストロギアであることは流石に無視できなかつたが…。しかし、蒐集によつてページを埋めながら完成させなければ危険は無いという説明もあり、悩んだあげく普通に接することにしたのだった。

「まあ、管理局にはもう少し黙つてくれ。その内、全部丸く治める手段考えるから…。」

「…分かつたな。それに、みんな良い人みたいだし…。なにより、はやてちやんとみらいさんの家族だもんね。」

「…そんな訳で、今は友人の新しい家族達と改めて仲良く遊んでいるわけである。」

「はい次、『抱きしめて～銀河の～果てまで～』。」

「「ハイツ！！」

- - - ボクシング！！

「痛あああああッ！！」

なのはとヴィータが札を取ろうとして頭をぶつけたようである。ふたりは額を抑えながら呻いていた。

「痛つてええ……。何してんだよ“にやのは”！」「

「“なのは”だよ！・な・の・は！・！」

痛くて呂律が回らなかつたよつである。テロの痛みと、噛んだ恥ずかしさで顔が真つ赤になるヴィータ。おもむろに、『グラーフ・アイゼン』を取り出す。

「ラケー・テン・ハン...】。

「「ヴィータ」、どうがいい？」

-----“シャマル飯”を持ったはやてと、“テՂപンを構えた”み
らいが居た。

「すいませんでした…！」

「全く…、照れ隠しでアイゼンを振り回すのやめろって何回言わせ
る氣だ？」

「そのたんびに私たちが片付けしてんやで？」

速攻で土下座ポーズを決めたヴィータに愚痴る二人。そして、自分
の料理を御仕置き道具にされることを完全に受け入れた（諦めた）
シャマルが部屋の隅でいじけていた…。その光景に苦笑いを浮かべ
るのは…。

「さて、気を取り直して次いくで～。」

-----はやてが次の読み札を取り出し、カルタの続きを始めようと
したその時…。

「『ムルニシニ』なりば『起動。』だ。……あれ？」

「ん？『戦争』じゃなくてっ。」

「へーつか……途中、せやしけやこの血じやけが混わってなかつた？」

「シーヘ! もやし、みうこ殿……」

シグナムの瞳に反応して視線を移すと、『黒の書』が畠に浮かんでいた。別にそれだけなら、こつものひとつである。しかし……。

「ハ、これって……『闇の書』の毒と回りじゃ……」

……畠に浮いたまま妖しく光輝いていたのだ。

「何ー? また誰か出でてくるのかー?」

「ま、まさか…本当に我らの『闇の書』と同じなのか……？」

呆然とするシグナム達を無視するより、事態は進行する…。この時、はやて以外は気づかなかつたが『闇の書』の時と違い、『黒の書』は自身を縛る鎖にギチギチと悲鳴を上げさせ始めたのである。まるで、中から“何かが強引に出来よつとしてる”かの様に…。やがて…。

――パリ――――ン――！――

本を縛る鎖が砕け散つた…といつも、『黒の書』が無理矢理開いて鎖の拘束を解いた…。だが、出てきたのは守護騎士のような者達では無かつた。それは“林檎くらいの大きさ”で、温もりさえ感じる綺麗な光を発する丸い何かだった。それはさながら、小さな太陽のようだ…。

「…え?…ええ!?-嘘でしょおおおおおー!?-何アレええ!-?」

最初に声を発したのは意外なことにシャマルだった。どういふわけか彼女は、他の人々より一層驚いているのだが…。みんなを代表してはやてが尋ねる。

「どうしたんやシャマル?そりや、『黒の書』さんが今日は一段と意味不明なのは解るけど…。」

「『黒の書』って言つよつ、アレよせやしてやん……」

そつと光の球体を指差す。それにつられて全員は視線を移す。はやてやみらい、なのははよく知らないかったのだが、守護騎士達はソレが何なのか理解したようである。残りの3人も顔を青くし始めた。

「ま、まさか……。」

「でかわざじやねえか……？」

「しかし、この反応は間違いなく……。」

「……やつぱり『リンクカー』よね……？」

- - - なん……だと……？

魔導師の魔力の源であり、『闇の書』のページを埋めるための蒐集対象『リンクカー』ア』……何故にこの『黒の書』から出てきた?しかし、話によれば『リンクカー』ア』って確か“ピンポン玉”くらいの

大きさがあるか無いか位じや…?

「…田の前のソレは、明らかに倍以上の大きさがあるのだが…。」

「……ビリあるよ、ソレ…。」

「ビリあるて…、言われてもなあ…ビリある?なのはちやん…?」

「ええ、私に振るの!…ビリあるの、みらいちゃん…?」

「おひと、一周してきたか…。んじゃ、ビリあるよシグナ…。」

「みらい殿、現実逃避はそこまで!…。」

ふざけている間に事態はさらに進行した…。なんと、『黒の書』が特大リンクカーボアを“発射した”。放たれたりンカーボアは真っ直ぐに、そばに置いてあった…。

「ツー? 狹いは『闇の書』!…」

……『闇の書』へと飛んでいき、そのままリンカーノアは『闇の書』へと蒐集されてしまった。

事態についていけず、呆然とするしかない一同。守護騎士や主を無視するように、『闇の書』は蒐集を自動的に行つたのである。否、『蒐集行為を『黒の書』が行つた』のである。恐る恐るシャマルが『闇の書』を開いてページを確かめる……。すると、いきなり彼女は叫んだ……。

「ページが半分も埋まってる……」

「…………嘘おおーー?」

あのサイズは伊達では無かつたようである……。いつたい何故『黒の書』がリンカーノアを?しかも何故この魔力量?何故この時期に?なんのために?彼らの疑問が忍ざることは無い……。

この状況を打破するべく、ザフィーラが何かを思いついたかのように口を開く。

「……そうだ、シャマル!――ページが半分埋まつたといつことば“彼

女”を呼べるのでは！？」「

「ツ！—そうね、今なら『管制人格』の彼女を呼べる！—」

「……そんな訳で、本来なら当分現れることの無いはずだった彼女『闇の書の管制人格』が呼び出されたのである。

フィニア side

現在に戻る。

「『リンクフォース』って名前、かつていよねフェイトちゃん？」

「うん。『祝福の風』かあ…流石、はやて。センスあるね。」

「そりやう? なのはちゃんに、フエイトちゃん。ほれみい、リイン
フォース。やつぱり可笑しくないやないかい。」

「いえ、確かに嬉しいのですが……。私には立派すぎで……。」

「遠慮することは無い。正直な話、お前のことを『管制人格』と呼び続けるのは嫌だつたからな…。」

「将…。」

何が起きたのかを説明してもらい、はやてが管制人格に『リインフォース』という名前を付けたことを聞いたフィーア達。お子様組が和気藹々としてるなか、魔法に一段と詳しいフィーアとフレシアは二冊の本を観察していた。

結局、『闇の書』の管制人格である彼女さえ、詳しいことは知らなかつたようである。当の本人もこの状況に困惑しながら出現した次第である。

「ユーノも呼んだほうがいいんじゃないかな?」

「先約があるそうだ。確か、クロノに頼まれたとか…。」

「ああ、それなら多分大丈夫だ。」

転生者の存在と、そいつから聞いた話をみらいに話す。おそらく、クロノ達がミッドで『闇の書』を調べる際に呼んだのだろう…。因みに、テスター・サ親子とアルフにもそのことは話した。最初こそ

信じられなかつたものの、心当たりがいくつかあつたので半分くらいは信じた。そして、例の転生者が話した状況とかなり同じこの場に来て、ようやく信じるよつこしたようである。

「そりいえば、『はやては俺の嫁だああああ！』とか言いながら襲つてきた奴が何人か居たよつな…。最近は『なんで第一二期が始まらないんだ！？』って言う奴を最後にメシキリ来なくなつたが…。」

「そいつらだ…。神様だかなんだか知らないが、迷惑極まりないつたらありやしない…。」

「つちも被害をこうむり掛けたわ…。見ず知らずの輩に『なんで生きてる！？』って言われた時は流石に傷ついたわ…。」

「…もつとも、そのほとんどが能力以外ヘッポコで一人残らず撃退できただが…。」

「しかしまあ、そんな神様なんて本当にいるのか？」一応、宗教国家である『アルテニア』出身の俺が言つのもなんだが…。」

「少なくとも、私は信じてないわよ？科学者としても個人としても、そんなのに頼れないわ。」

「『ベルフィア』も同じく。つーか、戦乱の時代のせいで誰も神を信じなくなつたよ…。」

そう言つて彼は思い出す。自身の世界の歴史を。

…三千年続いた『魔法主義』と『科学主義』の戦争。互いに世界にひとつしか無い大陸の両端に存在した両陣営は、中間にある国々や人々を無視するように戦争をした。やがて世界にはその一大国家以外存在せず、大陸の半分はその一力国が有し、残りの半分である中央部分はただの空白地帯となつた。その空白地帯は、もっぱら二大國家の戦場として扱われた……そこにまだ、人間が住んでるにも関わらず…。さらに、『魔法主義』も『科学主義』も互いに自身の神の教えを忠実に信じていた。特に…

- - - 『異教徒（己の国民以外）は人にはあらず。皆殺しにせよ。』
という部分は…。

そのせいで、二大国家の人間は空白地帯の人間をただの獣程度にしか見てなかつた…。そんな時代が續けば、そんな教えを創つた神を怨むのは当然である。最終的にフィアの祖父『ヴィリアント』の手により暗黒の時代は終わりを告げたが…。

調査してこらへば、どうにづわけか『闇の書』が主を侵食するためのパスだけがこの『黒の書』に繋がっていたのが解った。ご丁寧にはやでがしつかり主の権限が発動できる程度の繋がりを残していく。しかも、その侵食作用をリンクーコアに変換する機能までついていたのだ。どうやら例の特大リンクーコアは、『闇の書』の侵食作用3年分の結晶だつたらしい…。

「ところで、これなんて読むんだ？」

ベルカ関係が全く持つて解らないフィーラが、ほんのタイトルらしき部分を指差して尋ねる。

「『女神の書』だ。……なんか聞いたことあるような…。」

「あなたの家宝なんでしょう？」

「開けなかつたから中身はわざと隠してます。」

おもむろにページを捲つたみらい。すると…。

「……んー?」

「え? した?」

「…………」」、筆談してきた…。」

「「……はあ?」」

思わずプレシアと一緒に間抜けな声を出しちしまつたが、よく見ると確かに彼の血のとおつ本の空白に見えないペンで書かれるよう文字が浮き出でていた。

『嗚呼、遂に辿り着いた!! 巡り合えた!!』の口をどれだけ待ちわびたことか!! よくやつてくれた!! 我が子孫達よ!! これで僕の願いは叶つ……』の世の未練を断ち切れる!!』

「……なんか、やけにハイテンションだな……。」

「……お~い、みんな!」ひら来い。」

「どうしたん、みらいさん？…」つおつ『女神の書』さんが…

『おお、君が新たなる『夜天の主』…。ずっと見ていたが、君はとても優しくて温かい、素晴らしい人間だ！！君になら彼女達を任せられる。どうか、かつて僕の家族だった“夜天の女神様”達を救うのを手伝ってくれないだろうか？』

筆談にも関わらず、やたら高いテンションのせいで本人の声が聴こえてきそうな勢いである…。そんな『女神の書』に対し、一人だけ違う反応を見せた者が居た…。リインフォースである…。彼女は驚きに目を見開き、体を震わせた。やがて、ゆっくりと口を開く。

「その呼び方…、まさ…か…まさか、あなたなのですか…！？」

「知っているのか、リインフォース！？」

『本当に久しぶりだね、女神様…いや、今はリインフォースか。シグナムと守護騎士のみんなは…覚えてないよね…記憶はこっちに移してあるし…。』

どちら、一人は互いのことを知っているようである。しかも、かつて深い関係を築き上げてきたような『ぶりだ…』。意外な展開に思わず呆けてしまう一同だったが、いち早く正気に戻つたはやてが問いただす。

「ラインフォース、『女神の書』さんはいつたい…？」

「……彼の名前は『ミトナ』。我々の歴代主の一人です…。よもや、また会える日が来るとは…。」

「『ミトナ』…？」

リインフォースが目に涙を溜めながら呟いたその名前に、フィーアとみらいが反応した。

『皆様、申し遅れました。『マリウス・ミトナ・ギルジット』と言います。まあ、初めてましての方はそちらの3人だけですが…。』

今日、初めて八神家にやつて来たテスター・サ親子とアルフの方に、浮遊しながら視線（ページ部分）を向ける『女神の書』改め『ミトナ』。その名前を聞いた瞬間、固まつた者が約一ダース。フィーアとみらいである。

『ではでは皆様方、事情の説明を兼ねまして“とある物語”を語らせてもらいましょう。はやてちゃん、『男の子と本の女神様』の話はご存知かな?』

「え?ああ、はい。みらこさんが話してくれましたけど…。」

『それはよかつた。今から話すのはそれの語られなかつた部分と裏事情なのさ。質問は、全部話終わつてから受け付けるから待つてね?…それじゃあ、話をはじめようか?』

「…世界で一番不幸だった男の子が、どうやって世界で一番幸せな男の子になつたのかを…。」

第十一話 女神の書（後書き）

な……長ええ……。次回、『男の子』と『闇の書』の過去が……。

男の子と本の女神 起動編（前書き）

『闇の書』と『ミトナ』と『アルテニア』と『女神の書』と…。

? ? ? s.i.d e

「遙か昔、アルテミア王国のある山岳地帯へ

「……朝だ。」

新たな一日の始まりの証である朝日を感じながら、濁つた銀髪で緑色の瞳をした少年は田を覚ます。年は10歳になるかもしれないかである。

「……もとも、年なんて意識する前に親に捨てられたから、自分の年齢なんて判らない。」

「……おはよう、『黒い本』さん。」

自分を化物呼ぼわりして捨てた両親がくれたのは『ミトナ』と言う名前と、物心ついた時から持つてたこの鎖で縛られた“黒い本”だけである。この本は直接話しかけてくれるわけでも、自分の世話をしてくれるわけでもないが、なぜか持つてると安心できるのである。

「……今日も、こつも通りこなつやけいのかな……？」

- - - 生きるために食料を取りに。

- - - 生きるために魔法の練習を。

- - - 生きるために寝床の確保を。

- - - 生きるために、生きるために、生きるために、生きるために、生きるために、生きるために、生きるために、生きるために、殺されないために、殺されないために、殺されないために、殺されないために、殺されないために、殺されないために、殺されないために、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない。

- - - 何で、みんな僕を殺そうとするの……？

「何で……。」

「僕はただ、魔法が好きだけだったのに……」。

「何で僕は……。」

「僕はただ、みんなの言つ通りに魔法の練習をしただけなのに……！」

「何で僕はいつも……。」

「僕はただ、みんなと一緒に居たかっただけなのに……！」

「何で僕はいつも一人ぼっちなんだ……！」

行き過ぎた才能を持つてしまった少年は、一人で泣き叫んだ。生まれた瞬間に認められたその才能に目を付けた大人達は、彼を即座に鍛え上げることにした。当初は予想以上の成果に喜んだ大人達だったが、やがて手のひらを返すように態度を変えた……。

ミトナの才能が自分達の予想を遥かに超えていたのである。そのことに気づいた彼らは、ミトナが自分達に力の矛先を向けることに恐怖した。

「…その瞬間、世界の全てはミトナの敵になつた…」

彼は世界中の人間に命を狙われ始めた。村人、軍、賞金稼ぎ、王族、魔導師…あらゆる人間が彼の命を狙つて襲つてきた…。幼い彼は、自分が何故みんなに命を狙われるのか理解できず、ただひたすら生き延びることに必死だつた。

「…自分を守ってくれる者が一人も居ない…、そんな生活を“5年間”も送つていた…。」

「もう寂しいのは嫌だ!!」

ミトナは叫ぶ、居るかどうか分からぬ誰かに向かつて…。幼かつたがために、彼が今まで感じたのは、自身の命を狙うものに対する“恐怖感”でも“憎悪”でもなく、一人ぼっち故の“孤独感”。それこそが、彼を最も苦しめる感情のひとつ…。だからこそ彼は叫ぶ…願う…。

「誰か僕と一緒に居て……」

「この孤独を終わらせてと、願い泣き叫ぶ。やがて、願いは聞き入れられた……。

『封印を解除します。』

「え？」

『起動。』

「……ずっと自分と共に居続けた、光輝く『闇の書』によつて……。

気がつくと、ミトナの目の前には4人の人物が跪いていた。ピンクのポニーtailの女性、やや短めの金髪の女性、赤い髪を三つ編みにした少女、白髪で筋肉質の男がミトナの前に現れたのだった。やがて、4人が口を開く。

「『闇の書』の起動、確認しました。」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でござります。」

「夜天の主の元に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。なんなりと御命令を…。」

ミトナは『闇の書』から突如現れた4人の言葉をほとんど聴いていなかつた。一人目の言った言葉が頭に残つたのだ……『主を護る』と…それは、つまり…。

「…ねえ、『夜天の主』って僕のこと?」

「はい、その通りです。」

「みんなは、僕のことを見守ってくれるの…? „僕とずっと一緒に居てくれる”の…?」

「主が望むのであれば…って、主…?どうしたのですか!…?」

ミトナが涙を流し始めたのである。いきなり主が泣き出したため守護騎士達は戸惑い、慌て始める。彼女らのさつきまでの威厳は、

欠片も無くなってしまった…。

「どうか痛いのですか主！？シャマル、とりあえず治癒魔法を…。」

「「ん」めん、そんなのじゃなによ…。ただ、嬉しくて…。」

「…やつと、僕と一緒に居てくれる人と出会えて…。」

この日、一人ぼっちだった男の子は彼女らと出会い、物語は始まつたのである。結末を、彼が死んで“六百年経つた”今も迎えることのない、長い長い物語が…。

男の子と本の女神 起動編（後書き）

この時のミトナは、まだ管制人格の存在を知りません。ただ、
の書『本体から誰かの温もりと愛情を感じています。

『
闇

男の子と本の女神 日常編（前書き）

すんません三分割は無理そうですね……。

あ、それとヴァルケンズの口調は若干固めにします。

ミトナ side

（『闇の書』起動から1ヶ月）

アルテミア王国のある森、そこで彼らは野宿をしていた。人数は3人、金髪の女性と赤髪の少女、そして銀髪の少年である。女性二人はとつぐに起床していたが、少年は『闇の書』を抱きかかえたまま眠り続けている。だが、そろそろ時間なので金髪の女性・『シャマル』が声をかける。

「主、朝でござりますよ。」

「…ん~。おはよ、シャマル。」

孤独が終わりを告げたあの日、ミトナの世界は変わった。常に一人で静かに目覚める筈だった毎日は、今では必ず誰かの呼び声で始まるようになった。

「あ、シャマルが起こしに来たって事は…。また僕がビリか…。」

「ふふつ、主はお寝坊さんですね。」

「遅いですよ主。そんなんだから、いつもフラフラのモヤシなんですよ。」

「ひどいよ、ヴィータ…。」

毎日が“生きるだけ”の日々…。聞こえだけは普通だが、本当にそれだけの日々だった…。生きるための攝取（食事）、生きるために訓練（練習）、生きるための移動（引越し）…。常に一人で死なないための行い。そこに“喜”も無ければ“樂”も無い。かといって“怒”も無かつた。

…あつたのは孤独感が生み出し続けた“哀”だけ…。

「あれ? シグナムとザフィーラは…?」

「え~と、二人は…。」

「…また、来たんだね?」

「……まい。」

「……だが、今は違う。今のミトナには“喜”も“樂”だつてある。そして……。

「だったら僕も行くよ。」

「んなつ！？主は、体が弱いんですからお控えに……！」

「主が行くつて言つてんだから、いいじやんかシャマル。」

「ヴィータちゃん！？私がシグナムに『主を戦場に来させるな。』って言われてたの知つてるでしょ！？」

「また、シグナムだったのか……。」

4人の中で一番過保護なのは烈火の将だつたりする……。本人曰く、ミトナが今までの主で一番弱々しく見えるそうだ……。確かにモヤシなのは否定しない。だが……。

「その分、僕にはコレがあるもん。」

・・・そう言って、僅か“一日”でモノにしたベルカ式の魔方陣を手に浮かべて見せる。

「…確かに、魔法だけでしたら私より上ですけど……。」

「主は本当に魔法馬鹿だから大丈夫だろ…。ぶっちゃけ非常識すぎだけど…。」

実力は湖の騎士の折り紙つきである。出会った初日に見せてもらったベルカ式の魔法を、いきなりマスターしたミトナに対して、ヴォルケンリッターは全員驚いた。彼は、全く持つて根本が違うアルテニアに古来から伝わる魔法と、ベルカ式の“両方”を完全に理解したのである。しかも一日で…。

「でしょ?…それに、もしもシグナムとザフィーラが僕の命を狙つてくる奴らに傷つけられたら、僕はそいつらを一生…。」

「…今の彼には“喜”がある。“哀”もある。“樂”だつてある。当然…。」

「ユルサナイヨ？」

- - - “怒”だって存在するのだ。

そう言いながら彼は、かつて自身の命を狙つてきた魔導師から奪つた服とローブを纏う。彼女らも、同じようにして手に入れた衣服を纏つている。

「さて、行こうか？」

「「御意。」」

- - - 彼は向かう、大切な者たちと共に、大切な者たちの元へと…。

シグナム side

（ちょっと離れた荒野）

「クソッ！－－悪魔の子の下僕どもが！－！」

「おとなしく神の裁きを受けよ！－！」

そう言つて武器を向ける王国軍の騎士たち10人前後。それに相対するはピンクのポニー・テールの女性、烈火の将、剣の騎士『シグナム』。そして青い毛並の狼、盾の守護獣、『ザフィーラ』。二人はこの状況に眉一つ動かさず立っていた。シグナムにいたつては、レバンティンを地面に突き刺し、柄の部分に両手を添えて堂々と構えている。

「御託はそれまでか？」

「我らは守護騎士ヴォルケンリッター。主に害なすならば、たとえ神とて容赦はせん！－！」

騎士団は一人が放つ気迫に一瞬怯む。しかし、すぐに気を取り直して剣を抜く。やがて隊長格らしき男が声を上げる。

「ええい！－－例の小僧が我々に復讐の刃を向ける前に殺すしかないのだ！－－かかる！－！」

「　「　「　ハツ　！　！」

同時に半分が抜刀、残り半分が魔方陣を展開した、それに対し、シグナムは即座に愛刀レヴァンティンを抜き、ザフィーラは魔力を体から送らせた。

「レヴァンティン、カートリッジ・ロード…」

『jabow!-!』

「【紫電一閃】…」

…豪つ…！

「ぬあああああああああああつ…？」

「おのれ…！怯むな…！」

炎を纏つた刃による一閃は、斬りかかつてきた5人中2人を戦闘不能にし、3人にダメージを与えた。魔法陣を展開していた援護組は、その様子を見た瞬間即座にシグナムに狙いを集中させ、魔法を放つ。しかし、それも…。

「盾の守護獣、ザフィーラ。攻撃などさせん！！！」

- - - その全てを障壁で防がれてしまつた。

「何！？」

「我々の魔法が……！？」

「くそつー！こうなつたら、大規模攻撃魔法だー！剣士隊、魔法隊を援護しろー！」

「隊長！？」「やつたら周囲に被害が！？」

「構わん！…やれ！…奴らをこう――――――。」

- - - ズドオオオオオオオオオオン！！

「…………隊長おぬくおぬくおぬくおぬくおぬくおぬくおぬくー。」

隊長は言葉を続けることができなかつた。降つて来た何かによる轟音と衝撃と共に、吹っ飛ばされて氣絶してしまつたようである。よく見るとそれは、魔法で強化された“鉄球玉”だつた。

「……ガイータか。」

「遅せーよシグナム。主が起きあつたじやねーか。」

空を見上げると、同じ守護騎士であるヴィータが漂つていた。だが、今彼女の口から聞き捨てならない言葉が聴こえた。

「なに……へとこいつとはまさかーへ。」

「お待たせ～シグナム～。」

「主ー?」

心配だから置こてきた主がそこへ居た。戦闘に参加する気なのは一目瞭然である。

「でたな……悪魔の子めつ……」

「喰らえ……【我らは神の使途、神の加護を持つて、悪を討たん。】滅せよ……」

魔法隊の一人がミトナに向かつて魔法を放つ。それを見た瞬間、シグナムは慌ててミトナを守ろうとするが距離が遠くて間に合わない。放たれた白い光が彼に迫る……。

「詠唱が違うよ？【我らは神の使途なり、神の加護を受けし我らに討てぬ惡は無し、白銀の光を持って邪を討たん。】滅せよ……」

ミトナの手から騎士の魔法より大きく、神々しい光を放つ銀色の光が放たれた。放たれた魔法は騎士の魔法を飲み込み、そのまま騎士の元へと突き進む。

「…………これが……悪魔の魔法の光だと……言ひ……のか……？」の美しさは
……。

- - - 神のようではないか…。

咳きを誰にも聞かれることなく、男は神々しいまでに美しい光に包まれて意識を失った。

ミトナ s.yu e

その後も騎士団は多少なり抵抗したものの、ミトナと守護騎士たちの手により全員撃破された。とは言つても殺してはいけない。殺してしまつたら蒐集ができなくなるからである…。現在、さつきまで後方支援に回つてたシャマルが、倒した騎士達からリンクカーゴアを一人残らず抜き取つていった。

「よし、これで全員ね。」

「終わった?」

「ならば盾は無用。主、敵の増援が来る前に去りまじょひ。」

「さうだねシグナム。じゃ、ヴィータ。行くよ～。」

「お～う。」

蒐集の終わった騎士達から身包みを剥いでたミトナはその手を止め、同じように金田のものを漁つてたヴィータを呼ぶ。そのヴィータの返事の仕方にシグナムが眉を顰めた。

「ヴィータ…。主に対してもんて返事をしているのだ。」

「え? だつて、ミトナ”が…。」

「おまえ! ? 今、主を呼び捨てにしたか! ?」

田頃から口が悪いのは分かつてるが、ここまで酷いのは始めてである。理由は違えど、ミトナは歴代の主のようつに『闇の書』の完成を望んだ。しかし、彼は今までの主と何かが違つた…勿論いい意味で。なので、シグナムには敬愛する主にヴィータが暴言を吐いたように聽こえてしまつたのである。

「ちよつ、待てつ…。ミトナがそう呼べって言つたんだって! ! だからレヴァンティンしまえ! !」

「……君、それは真ですか？」

「うふ、本当によ？ 堅苦しいの嫌なんだもん……。シャマルにも同じこと言ったから無闇に怒らないでね？」

「承知しました。すまなかつたな、ヴィータ……。」

「いや、いいって……。あたしだって最初びっくりしたし。いきなり『呼び捨てにして敬語もいらない』なんて……。」

「……一層、ミトナが歴代主と何かが違つと感じた守護騎士たちだつた。だいたい……。」

「……ううん、シグナムとザフライアもまださばけられてないでほしいんだナゾ……。」

「なんですか……？」

「それは、少々無理が……。いや、君の『命令』があるが……。」

「あ、嫌ならいこや。」

「「…（ガクッ。）」

「…基本的に“お願い”ばかりで“命令”はしない主は初めてである。

その時、おもむろにシャマルが声をかけてきた。何かいいことがあつたようだ、若干テンションが高い。

「みんな～！～ページが半分超えたわよ～！～

「本当～？」

「よかつたですね主。」

「これで管制人格に会えるぞ、//トナ。」

「うん…。」

//トナが『闇の書』の完成を望んでからとての、蒐集に苦労

することはなかつた。ほぼ定期的にミトナの命を狙う者たちがやつて來たので、そいつらを倒しながらリンカーノアを奪つていつたらアレヨアレヨと集まつていつたのである。

「それじゃあ、ごたいめ～ん。」

「カツー！」

その瞬間、『闇の書』が強く光輝く。その眩しさにミトナは思わず目を閉じてしまつが、すぐに目を開けた。するとそこには、黒い衣服を纏つた銀髪で赤目女性が居た。

「…その美しい姿に、ミトナは思わず呟いた。

「女神様…？」

「我が主…、この姿でお会いするのは初めてですね。私が『闇の書』の管制人格』です。」

「初めまして、ミトナです。なんでかな、初めて会った筈なのに…
そんな気がしない…。」

不思議な気分を感じていたら、唐突に管制人格が口を開いた。

「無礼を承知で少しよろしいでしょうか?」

「何を?」

「失礼します。」

「…ギュッ。」

「…ツ…?」

その場に居た全員が驚いた。守護騎士なんて全員、目が点になつてゐる。何故なら、彼女がいきなりミトナを抱きしめたのである。突然の行動に慌てるミトナだったが、あることに気づく。

「…ア…レ…」の…感じ…は?」

「『闇の書』から感じたぬくもり？」

「…………ずっと、じつしてあげたかった……今まで、一人の時から
ずっと……！」

「ツー？…………もしかして、ずっと見守っていてくれてたの……？」

「…………本の中からずっと、一人ぼっちの僕のことを見守っていてく
れたの？」

「はい……。会うのがこんなに遅くなつて申し訳ありませんでした……。

」

「あ……ああ……ありが……と……う……。」

彼は彼女に抱きつかれたまま、涙を流し始めた。最初から自分は
一人じゃなかつたことを知つて喜び、そのことに今まで気づけなか
つたことを悲しみ、今こうして彼女に感謝できることを喜んだ……。

・・・ずっと寂しかった、辛かった、悲しかった。それでも、守護騎士の皆さんに会うまで生きる気力をくれたのは…『闇の書』から感じたぬくもりだけだったのだから…。

その後しばらく抱擁は続いたが、管制人格（ミトナ）によつ『本の女神様』に決定）が大切な話があるらしく、終了した。どうやら『闇の書』と『主』であるミトナに関係するらしいが…。

「それで、管制人格改め『女神』よ…。話とは？」

「将、それにお前達は『闇の書』が完成した主たちがどうなつたか覚えてるか？」

そう言つた彼女はミトナの方を見て暗い顔をする。まるでミトナの未来に絶望をしているかのようだ。

「何…？そんなの覚えてるに決まつて…。」

「あれ…？思い出せねえ…。」

「馬鹿な…。そんな筈は…。」

「これから話すことはそのことについてだ。主…、あなたは私のことを“女神”と呼んでくれた…。しかし…、私は…私は…。」

「…今にも泣きそうな、とても悲しそうな顔をしながら、彼女は言葉の続きを紡いだ。

「私は、あなたの命を奪いかねない存在…あなたにとつての“死神”に他ならないのです……。」

「…その言葉を聞いた瞬間、少年の心に炎が灯った。されど、その炎は自らの死の元凶を名乗る彼女に対する“恐怖”でも“怒り”でもない。

「…話を、聞かせて。」

- - - 深い悲しみに染まっていく彼女を救う“決意”だった。

男の子と本の女神 日常編（後書き）

あと『運命に抗う編』と『別れの日編』になりそう…。

男の子の本の女神 抵抗編（前書き）

前回の話、ちょいちょい修正しました。微妙すぎるナビ…。

男の子と本の女神 抵抗編

ミトナ s.t.u.e

～とある屋敷にて・夜～

アルテニア王国に存在するとある街の小さな屋敷に、彼らは居た。その屋敷の一室で、ミトナは自分の計画にムラが無いか、もしくは他に楽な方法は無いかと『闇の書』改め『夜天の書』を調べていた。

「…そして、あること気づいてしまい、彼は怒り任せに机を叩いた。

「……なんてことだ…。これじゃあ…、この方法じゃあ彼女達は助からないじゃないかー…。」

「どうしたんだ、ミトナ？……本当にどうしたんだ、そんな顔して？」

物音に気づいてヴィータが部屋に入ってきた。入った瞬間に彼の尋常じやない表情を見て一瞬怯んでしまった。そんな彼女の様子に気づいて、ミトナは壁に掛けてある鏡を見る。

- - - 怒りと悲しみで染まりきった酷い顔だった…。

「…」めん、ヴィータ。でも、大事な話があるんだ…女神さんと守護騎士のみんなを呼んでくれないかい?」

「“ガキンちよ共”は?」

「寝かしたままでいいよ。『夜天の書』についての話だから。」

「分かつた。」

ここしばらく、旅を続いているうちに野盗に襲われたり、地方の領主による厳しい徴税で苦しんでいる村を通りかかるたんびに、ミトナ達は家族を亡くした子供達を引き取り続けていた。一人ぼっちになつた子供達をミトナはかつての自分と重ねてしまい、ほっとけなかつたのだ…。

- - - いつの間にか10人位にまで増えてしまったが…。

「しかしまあ…、人は見かけによらねーな。そのナリで10人の子供達の親代わりなんてな。」

「その姿で3百歳超えてる人に言われたくないよ。」

「どういう意味だそりゃー？…たくつ、とにかく大事な話なんだな
？今、呼んでくる。」

そう言つて、ヴィータは部屋を出て全員を呼びに行つた。その後ろ
姿を見送りながら、ミトナはポツリと呟いた。

「こんな大切なことを“5年間”も黙つてたのは、流石にちょっとと
怒るよ？…みんな。」

「…『夜天の書』が起動してから5年。彼は杖デバイスで体を支えながら
立ち上がつた。

夜天の女神（管制人格）side

（屋敷の別室）

急遽夜中に関わらず主に呼び出された守護騎士たちと夜天の女神。部屋に来ると、椅子に座ったミトナが、5年間の旅で身に着けた気迫を持つて彼女らを迎えた。その無言の重圧は主に女神とシグナムに向かはれている……。

「あ、主…？」

「ビ、ビ! なされたのですか…？」

「……。」

沈黙を保ちながらプレッシャーを放ち続けるミトナ。そのプレッシャーは歴戦の猛者である烈火の将さえビビらせた……。それ以前に、彼がここまで怒るのはとても珍しいので全員慣れていないのである。

やがて、ミトナが口を開いた。

「女神さん、あとシグナムあたりかな…？ “例の計画” に関して黙つてたことあるでしょ？」

「「「ツー?」」

予想外な言葉の上に凶星だったの激しく動搖してしまった…しかもザフィーラまで…。その様子は一瞬でヴィータに気づかれてしまい、立て続けに問いただされた…。

「なー?お前らいつたい、ミトナに…あたし達に何を隠していやがつた!…まさか、あの“計画”じゃミトナが救えないとか言わねーだろうな!…」

彼らの計画とは、『夜天の書』の呪縛を解くための手段のことである。『夜天の書』による浸食作用も暴走の原因も元を辿ればかつての持ち主により改悪された『防衛プログラム』が元凶である。しかし、それと戦うには『夜天の書』を完成させなければならない。その上、戦つたところで勝てるかどうかも分からぬし、負けたら世界が滅ぶのだ…。

なので、『防衛プログラム』の強さをある程度理解している女神(管制人格)が“G.O.サイン”を出せるほどの力を身に付けるために、旅を続けながらミトナは実力を磨き続けていたのだ。その成果のひとつが、ミトナが創ることに成功した『反侵食魔法』である。その名の通り『夜天の書』の侵食に抵抗するための魔法であり、その効果のおかげで5年経つた今も侵食は杖一本で事足りる程度に済んでいる。

……もつとも、魔法が高度すぎてミトナにしか使い続けることが出来なかつたが…。

「いや、一応僕はその方法で助かるみたいだよ?…“僕は”ね。」

「……ばれてしましましたか…。」

「こつたい、ビリコツいことなの?..」

思わずシャマルが口を挟む…、どうやら彼女とヴィータは知らなかつたようである。それに答えるためにミトナは言葉を続けた。

「さつき『夜天の書』を調べ直してて気づいたんだ…。すべての元凶である『防衛プログラム』を僕達は破壊するために努力してきた。でも、女神さん…あなたと守護騎士のみんなは…。」

「防衛プログラムとほとんど一体化してますね?破壊すると一緒に消えるくらいに…。」

その真実に女神とシグナム、そしてザフィーラは俯いた。話を聞

かされていなかつたヴィータとシャマルは驚きに目を見開いて固まつてゐる。しばらく沈黙が続いたが、女神がミトナの問いに答えた。

「…はい。その通りです。」

「…今まで黙つて申し訳ありませんでした…。しかし…」

「我らはあなたを守るための存在!! 故に主が生き延びることがで
きるのであれば、この命惜しくはありませんね…!」

本当のことを知らなかつたヴィータとシャマルの二人はその状況について行けず困惑していた。やがて、我に返つたヴィータが女神に掴み掛かつた。

「なんで…なんで、あたしとシャマルには黙つてた…? …いや、お
前のことだからどうせ口クでもない理由だろ…!」

目に涙を浮かべた彼女の問いに、女神は視線をそらしながら答え
る。

「…管制人格の権限で、どうにか守護騎士プログラムを“1人分”
切り離せそなんだ…。そして、人格と意識だけなら主のデバイ

スにもう一人分送ることができる……。」

「それがなんであたしらなんだ！？お前たちは！？」

「お前達一人が一番、主の平穏な日々に相応しいと思つたからだ……。私や将では戦い続けることはできても、安らぎは『えれない』。だから、主のことはお前達に託すと決めたんだ！！私たちは『防衛プログラム』と運命を共にする……。」

「勝手なこと言つてん（ドゴホおン……）」「勝手に決めるなつ……！……」「ミトナ……？」

「あ……主……？」

振り向くと、ミトナが自身の支えにしていた杖で床をぶち抜いていた……。怒つて杖を思いつきりたきつけたらしく、今までにないくらいの怒氣を纏つっていたミトナに、全員後ずさる……。

「女神さん、僕は前にも言つたよね？『夜天の書』のぬくもりがあなたの愛情が僕を生かし続けたと……。」

「……はー。」

「シグナムだつて厳しい時もあるけど、とても優しくて温かい人だ…。ザフィーラも基本無口だけど、よく僕の悩みを聞いてくれるし、いつも一緒に居てくれた…。」

「主…。」

「…そんな君達を僕がただの下僕として見てたと本氣で思つてゐるの！？僕にとつて君たちはもう、世界を敵にしてでも…世界を滅ぼしかけてでも守りたい家族なんだよ…！」

「ミトナ…。」

「ミトナ君…。」

彼は泣き叫ぶように言葉を紡ぐ。その彼の吐露に、女神とシグナム達は自分の考えが甘かったことを自覚する。彼の望んだ世界は、自身を死の脅威が襲わない世界では無い…。

- - - 孤独とは無縁の…大切な誰かと共に在り続けることができる世界…。それが命を狙われ続け、孤独であり続けた一人ぼっちの少年が望んだ世界…。

「だから、女神さん…。勝手にそんなこと決めないでよ…。あなたは、自分の事を“誰かの道具”としか思ってない時があるみたいだけど…僕はそのあなたに、ただの人間よりたくさんの方の愛情と温もりを貰つたんだから…。」

「……主…。」

そう言つて彼は彼女を抱きしめた…。初めて会つた時に、彼女が自分を抱きしめてくれたように優しく抱きしめた…。そして、その時と同じように抱きしめられた方は涙を流す…。

「守護騎士のみんなもだよ？みんな僕にとつて大切な人達なんだから…。だから、幸せになるならみんな一緒にだよ…？」

その言葉にシグナムが目に涙をためながら答えた。泣きそうになつているのを必死に堪えてるためか若干声が震えている。

「はい、我が主…。そして、本当に…本当にありがとうございます…。」

「うん。」

- - - その日、ミトナは改めて決意する。家族全員を…誰も犠牲にせず全員を救つてみせると……。

男の子と本の女神 抵抗編（後書き）

次回で回想終了予定。……こつか「」をメインに書きなおそうかな
⋮?

幕間 ちょい休憩の八神家（前書き）

回想は次回で終了。

幕間 ちょい休憩の八神家

はやて side

八神家・現在にて

(私も、みらいさんと会わなかつたらどうなつてたんやう…?)

『女神の書』改め、『マリウス・ミトナ・ギルジット』による話を聞きながら、はやはかつて自分を思い出していた。多少差があるものの、はやはとミトナには似た部分がある。

- - 魔法の本に出会つたといつこと。

- - 孤独であつたこと。

- - 大切な家族に救われたといつこと。

しかも、みらいを除いたら彼の家族と自分の家族は同じである。ここまで同じ境遇の人間(?)に出会つたことに対しても、彼女は不

思議な気分になつていた。

(「……か……、昔みらこれんこいの物語聞かせてもらつた時に『辽の男の子、私と回じやね。』とか言つてたっけ?」)

ミトナは『闇の晝』改め『夜天の晝』に出来て、守護騎士のみんなに会つまで生きてこれた。自分はみらこと出来て、守護騎士のみんなに会つまで元氣でいた。そう考へるとなんとも言へない気分になるのだ……。

「なあ、みらこれん。みらこれん……?」

少しみらこと話すとして声を掛けたのだが、返事が無い。不思議に思い、視線を横に移すと……。

「ちよつーへみらこれん……?」

「『辽のかしましたか……つて、みらい殿……?』

「……みらいが白田を剥いて顔を青くしながら、泡を吹いて氣絶していた……。

「ふえええええ！？ ビリしたの！？」

「わからへん！…シャマル、治療治療！…」

「はい！…」

リビングは一気にカオスな空間に陥った。そんな状況の中、一人いたつて冷静になつている奴が居た。フイーアである。それに気づいたフェイトとアルフが声を掛ける。

「ねえ、フイーア。みらいはなんであんな風になつちやつたの…？」

「ん？…アルテニア王国にはな、“三大偉人”つてのがいたんだよ。三人は各自称号を…ていうか肩書きみたいのを持つてたんだ。」

「どんなの？」

「親を亡くして路頭に迷う子供達を救い、導き続けた『大神父』。悪事を働く者達を更に強大な悪を持つて葬り続けた『惡魔の子』。数世紀経つた今でも追いつけない技術を編み出し続けた『学神』。ほとんど昔話みたいになつてるが、この三人は素性こそ分からぬものの確かに居たって言われてる伝説の人物だつたらしい。『学神』の論文にいたつては連邦でも有名なんだよ。」

「へえ～…。でも、それとみらいが倒れたのどじう関係してんの？」

「あまり関係ないんじゃないかい？」

改めてみらいを見るフロイト。シャマルの治癒魔法を受けるものの、効果はいまひとつのように顔が青いままである…。

「…その3人の素性は不明だけど…いや、不明“だつた”だな…。名前は判明していたんだ。」

こんな時に全く持つて関係なさそうな話をするフイーアに、その場に居る全員が意識を向け始めた。それでも尚、フイーアは動じない。

「ちよっとフイーア兄、なんの話してんねん？」

「まあ、はやても聞け。その3人の名前は…。」

- - 道徳を司りし、大神父“マリウス”

- - 暴力を司りし、悪魔の子“ミトナ”

- - 文化を司りし、学神“ギルジット”

「　「　「　「　「　……。 (シーンシ…。) 」　」　」　」　」

「さて、質問だ。物語になつたり、教科書に載るほど有名な偉人達が3人とも同一人物で、尚且つ自分の先祖と名乗つてきたら…？」

「……。(死ーんッ…。)」

答え・思考がフリーーズして氣絶。

「私らつてものす」い人と暮らしてたんや…。」

「でも…、あたしら全然覚えてないんだけど…。その、ミトナとのこと…。」

これまでの話を聞きながら、ヴォルケンリッターの4人は疑問に思っていた。話の通りなら、彼らがミトナのことを忘れるはずがないのだ…。どうでもいい、むしろ最悪だった元主のことだって何人か覚えている。

なのに、何故彼のことを思い出せない? リインフォースが嘘をつくとは思えないのに、彼女が覚えると言つのなら本当なのだろうが…。

『ああ…。そのことなんだけどね…。』

ミトナが言いにくそうに(喋つてないけど…)会話に乱入してきた。どうやら、彼が直接関係しているようである。

『さつきまでの話で分かったと思うけど、みんなを助けるためには5人とも『夜天の書』から切り離せるようにしなきやいけなかつたんだ。だから、『夜天の書』にそれが可能にできるだけの『ログラム』をねじ込むことにしたんだけど…。』

「 「 「 「 なで…？」」

『ごめん…。その時造れた物は容量が大きすぎて入りきらなかつた
んだ…。そこで、容量を増やすために『夜天の書』から引き抜いた
んだ…。君達4人の記憶を…。』

「なつ…！」？

「そんなことが本当でできたの…！？」

「いや、それよりもその時あたしらの記憶は…？」

「…彼との思い出はまだ…」に行つた？

『この中だよ。』

「え？」

『ヴィータの思い出も、シグナムのもシャマルのもザフィーラのも
全部、君達の記憶はこの『女神の書』の中ひとつとてあるよ。』

彼曰く長い年月を掛けて作り上げた『プログラム』が完成し、それを早速使おうとしたのだが…先程言ったように容量が足りないと、いう問題にぶち当たった…。そこで彼女の記憶をいつたん預かり、全てが片付いたらすぐ返すつもりだつたらしい。

『だけど、また新しい問題が…。』

「今度は何だよ…。」

本人はあまり自覚していないようだが、今ミトナに一番積極的に話しかけてるのはヴィータだつたりする…。彼の生前も、一番会話の量が多かったのは彼女だった気がする…。

『女神さんの…ラインフォースのシステムプログラムが君達と全く違つたから、別のプログラムを造らないといけなかつたんだ……。』

「……申し訳あつません…。」

『ラインフォースが謝る必要は無いですよ…。とにかく時間も充分にあつたから、同じ容量でさつと造るつもりだつたんだ……けれど…。』

- - - 元凶を叩きのめすだけの力は身につけた。

- - - 守護騎士たちを呪縛から解き放つ準備はできた。

- - - あとは女神を救うための手筈を整えるだけだった。

- - - しかし…。

『どこかで『夜天の書』の力を聞きつけた王国軍が僕達の元に現れたんだ。その時の指揮官が…。』

- - - アルテミシア王国軍、魔導騎士隊千人隊長、ミルトナン・ギル
アーク。

- - - 僕の生みの親の片割れだったのさ……。

男の本の女神　迎えぬいとみなを結末（前書き）

過去話は今回で最後です。つーかいつもよつぱくなりますがだ…。

男の子と本の女神　迎えることなき結末

? ? ? s . i d e

「アルテニア王国・ウェイグ城」

アルテニアに存在するひとつの中城、『ウェイグ城』。その一室で、領主である『ミルトナン・ギルアーク』は先日捕らえた人物のことを考えていた。

「ふん……、よもや生きていたとはな……。」

国王に命じられ、『夜天の書』なるものを持つ者を捕らえに大軍を率いて向かつた彼は、思いもよらない人間に出会つた……再会と言つてもいい……。

「ミトナ……、あの疫病神が……。」

「……彼の実の息子、『ミトナ・ギルアーク』だったのだ。」

この世に生を受けた瞬間に発覚した魔法の才能……。それに目を付

けた王宮の人間は、ミトナの才能を昇華させるために引き取りたいと言つて來た。無論、報酬として『十人隊長から百人隊長への昇格』、『領地の拡大』、その上『天才魔導師の系譜』という名譽までついて來るのなら文句はなかつた。妻も特に反対せず、むしろ賛成した。

——結局彼らは、あつさりと自分の息子を國に売つた。

しかし、ミトナの大きすぎた才能により『天才魔導師の系譜』の称号は『悪魔を生んだ一族』に成り下がつてしまつたが……。そのせいで色々と苦労したが、今では自力で千人隊長の座に就いた。

「結局、奴が居なくとも私は出世できたということだ……。むしろ、奴さえ居なければ『悪魔を生んだ一族』などという不名誉な呼ばれ方をしなかつた……。そう思わんかね？『夜天の書』の『管制人格』とやら……。」

「……グッ……。」

彼の足元には、ボロボロの状態で『夜天の女神』が横たわつていた……。相当痛めつけられたようで、ミトナの実の父親とはとても思えないこの男の言動に、怒りをぶつけてやりたくてしそうがないが動けず、呻くことしかできなかつた……。

「だが、あの小僧は最後にいいものを持って帰つてくれた…。この本の力さえあれば、アルテミシア王国を…いや、世界を手に入れることができる…！」

そして、おもむろに彼女の髪を掴み上げてグイッと持ち上げる。そのまま覗き込むように見つめながら彼は言葉を紡ぐ。

「…確かに、お前は『夜天の書』は主にしか使えないと言つたな…。だが書に唯一命令できる主に対し、私が命令できればいいのだろう？」

「…な…何を…？」

「簡単なことだ。あの小僧が拾つてきた餓鬼共を人質にすればいい。

「ツー？…あなたは…、本当に人間なのか…！？」

「プログラムである貴様らよりはな。話は終わりだ…、衛兵…！…こいつと牢獄にいる奴らを例の場所に連れて来い…！儀式を始める…！」

「ハツ…！」

物語は狂い始める。

ミルトナン side

儀式上

「女神さん！！」

「おこー！…しつかりしふー！」

「ツー！貴様らああああああああああああああーー！」

衛兵に連れてこられた彼らが最初に見たのは、痛めつけられてボロボロにされた夜天の女神だつた。今すぐにでも駆け寄り、治癒してやりたかったが拘束されているため動けなかつた。

「あなたは…、なんであなたは「J-君」を…？」

自分の父親に向かつて問いかけるも、帰ってきたのは侮蔑の眼差しと嘲笑だった。

「子が親に尽くすのは当たり前であろう……。貴様は死ぬまで私の役に立つてもらう。まずは最初に、この『夜天の書』を使いこなして貰おうか？」

「駄目だ、それは完成させても暴走するだけだ！！使いこなすなんて無理なんだ！！」

「貴様の意見など訊いていない。使いこなせなければ、餓鬼共の命は無いぞ？…そもそも、私は貴様のその才能だけは買ってやっているのだ……。お前の悪魔の力でどうにかできぬ事もあるまい。」

「ツー？」

そう言われ、彼らとともに連れてこられた子供たちのことを思い出す。子供たちは未だに牢獄に囚われたままであり、実質人質状態である。

「貴様の所持品は全て持つてきていやつた。さつさと始めろ……。」

ミルトナンの言葉に応じるように、衛兵の一人がミトナのデバイスと試作型魔導書を持つてきた。この試作型の魔導書には、守護騎士たち4人の記憶が納められている。『夜天の書』とパスを繋いでいるため、実質彼女らの記憶は本人達が持つたままと同じだが……。

「……分かりました……、やります……。」

「「主!?」」

「駄目だミトナ!……そんな奴らの言つ事聞いちまつたら……。」

「大丈夫だよ、みんな……。なんとかしてみせる。」

「……君たちと一緒に居られるなら、僕は……。」

「まずは『夜天の書』を完成させなければいけません……。準備が必要なので少し待ってください。」

蒐集もしそうだが、まずは夜天の女神を書から切り離す術式の完成が先だ。そうしないと、防衛プログラムを制しても彼女が消えてし

まつ…。こぐら//トナでも、防衛プログラムと戦いながらではその術式を組むことは不可能だ。

そして、決意を胸に//トナは父親ミルトナと向き合つた。

「…だが、彼は//トナのことを最初から見てなかつた…。

「安心しろ、最後の蒐集により書はすぐに完成する。」

「……え…？」

「…彼が見ていたものは最初からただひとつ…。

「…奪え。」

「…ハッ…」

「つー…まさか、よせつ…」

――この世にあるモノは彼の欲望を満たすための存在だけ……。

「…」

「ウグッ……へやるやうやう……ああ……じ……」

「ぐわああああああああーー！」

――それが彼の…ミルトナンにとっての世界の在り方……。

「ああ、これでページは埋まつたぞ……？」

ミルトナン達は守護騎士の4人に對して躊躇うことなく蒐集を行
使した。魔力で構成された彼らからリンカー「ア」魔力の源を
奪うこと、それはすなわち…。

――彼女達の消滅を意味する。

「あ……ああ、ああああ……。」

4人がさつきまで居た場所には、もう何もなかつた。彼の大切
な家族は、呆氣なく消滅してしまつたのだ。

――悲しみにくれる彼に構わず、ミルトナンは全てを続ける。自
身の欲望のために…。

「プログラム」ときに涙するとは…。人外同士、仲良くやつてきた
ようだな…。さて、余韻に漫るのはそこまでだ。さつと…。」

――そんな彼だからこそ、この結末を迎えたのは必然だったのか
もしれない…。

「あ……ああああああ……ああああああああああああああああ

『閣の書の完成を確認…。直ちに起動し―――。』

轟音と共に放たれた魔法は『夜天の書』に命中し、そのまま書を沈黙させた。彼は今の魔法で『夜天の書』の暴走を一時的にはいえ“強制停止”させたのだ。

彼の周囲に巨大な魔方陣が展開されていく。その数は1つではなく、1種類でもない。アルテニアとベルカ、そして彼のオリジナルを混ぜた百近い数種類の魔方陣が儀式場を埋め尽くした。

「なー!?詠唱も無しにこの規模だとー?」

「ああああああああああああああああああああああああああああああー!」

「ゴオオオオオオオオオウー!!

放たれた魔法の数々は儀式場を吹き飛ばした…。同時に魔方陣のいくつかが別種の輝きを放ち、どこかへと飛んでいく。

「呪えええええー!【スロタリウス・アーダスト】ー!」

「な、なんだー?……うぐつー?」

「馬鹿なー?これは…つー?」

何の前触れもなく衛兵達が次々と倒れていく。まるで糸を切られ

た操り人形のように力なく倒れていく

。気絶したわけでは無い、“絶命”しているのだ…。

- - - その魔法は禁断の呪詛…、この世の理を無視しながら相手の命だけを刈り取る封じられし魔法…。

「禁呪『死召詩』…！？まずい、逃げ…！」

もはや手遅れ…。彼の怒りは『夜天の書』の防衛プログラムさえも凌駕していた…。周囲を破壊し、死の呪いを屋敷中にかけ、自身の家族を奪つた者達を次々と殺していく。

彼の憤怒と暴走が創り出したのは地獄絵図。被害は儀式場だけにとどまらず、城中の人がミトナの逆鱗に触れて命を落としていく。

- - - やがて、彼は全ての元凶へと歩を進める…。

「ひつ…？…つあつ…？」

さつきまでの雰囲気は微塵も無く、蹲りながらミルトンが情けない悲鳴をあげた。そんな彼をミトナは魔法で強引に引き寄せ、首を掴みあげながら睨みつける。

- - - ミトナの緑色だった瞳は、怒りで赤く染まっていた…。

100

「よ、よせーー！私が悪かったーーだから許してくれーー。」

「…………【**我**は復讐者】…………。」

「つー？ その詠唱は…！？」

「【私は断罪者、私は破壊者、憎悪と怨嗟の赴くがままに…】……」

「剃り殺せ・魚感精靈」

-----放たれた魔法は、殺すためのモノでも拷問のためのモノでもない……“惨殺”のための魔法……。

「アグ×津 s だ 1 期里 k s d h ゆくじや b な j s f d s j v n j n
あん v j k d a a . v a 1 k a v k . p k f u a k ゆかああああああああ
あああああああああつ ! ? 」

-----ミルトンの体が少しずつ、少しづつ、体の内部からぬりへりと“すり潰されて”いった。

見えない力により、徐々に己の体を潰されていくミルトナン。骨が砕け、内臓をバラバラにされ、肉が溶かされ、激痛に苛まれながら狂った悲鳴を上げ続ける。だが、それも長くは続かなかつた。

「………… も、へ、 声も聽きたくない」。

「ナニハコロ」

-----その瞬間、ミルトナンは血飛沫を撒き散らしながら残つた体を派手に破裂させた…。

三十九

先ほどの儀式場はおろか城そのものがほとんど消滅し、どんよりとした夜空を見上げながらミトナは呆けていた。…

「……なんで。」

自身が創り出した惨状の中心で、彼はポツリと呟いた。

そして、悲しみに満ちた慟哭を上げた…。彼の腕には、先ほどまで横たわっていた『夜天の女神』が抱えられていた。彼女だけはどのようにか無事のようで、今は気を失っているだけのようだ。人質として連れてこられた子供たちも、ミトナはあるの惨状の中にありながら確実に巻き込まないようしたので同様である。

- - - だが、それでも…。大切な4人が消えたことへの悲しみが消えることは無い…。

しばらく泣き叫んでいたミトナだが、その叫びが突如止まる。彼は怒りに任せ、ミルトン達を殺すために全ての魔力を攻撃にまわしたのである。命を削る禁呪まで用いて…。

- - - 彼はその腕に抱いた彼女と重なるように倒れ、意識を失った
.....。

しかし次に目を覚ますと、視界に入ってきたのは先ほどの廃墟では無く、ましてや天国でも地獄でも無かつた。あたり一面、真っ黒な世界だ。ミトナはその状況を不思議に思いながらも、特にできることもなさそうだったので何かすることを諦めた。

「あの世ついでのは、こんなにつまらない所だったのか…。」

「まだ、死んでもせんよ。我が主…。」

「つー？…女神さん…！」

声のした方を振り向くと、夜天の女神が居た。

「まだ死んでないって、どうこう」と…つー…といえば、『夜天の書』が…！」

一時的に止めたとはいえ、完成させてしまったので暴走することには変わりない…。本来なら、管制人格である女神と守護騎士の4人を切り離した後に書を完成させ、防衛プログラムを倒すつもりだつた。だが、女神を救うための術式を完成させる暇も無く『夜天の書』は完成してしまい、唯一切り離し可能だつた守護騎士たちは蒐集により『夜天の書』と…“女神と一体化”してしまったのだ…。

……つまり防衛プログラムを壊したら彼女たちも完全に消える……。
そして書が完成した今、暴走と戦わなければ世界は滅ぶ……。

「女神さん、僕はいつたいどうすれば……！」

「世界を救えれば家族が消え、家族を救えば世界が消える……。

「落ち着いてください、我が主……。書は“暴走してません”……。」

「え……？」

「あなたが『夜天の書』に向かつて怒り任せに放つた魔法が書の項を削つたのです。そのせいでギリギリでしたが、書は“未完成状態”なのです。」

「……は……ははは……それはまた……。」

彼が放つた魔法は『夜天の書』を壊しかねない威力だつたため、自動的に項を減らしながら防御魔法が起動したらしいのだ。なので、目が覚めれば先程の光景がそのまま残ってるらしい。

「ああ……、よかつた……。だつたら守護騎士のみんなを復活させることもできるし、女神さんを切り離すための術式を造る時間もあるつてことか……。本当によかつた……。」

ミトナは思わず脱力してそのままへたり込んだ。自分の大切な人たちは誰も消えてないことに安堵したのだ。しかし、彼は気づいた。女神の表情がとても暗いことに……。

「女神さん……？」

「……主……。私は、お別れを言いに来たのです……。」

「な……！？」

「我が主……。あなたは確かに死んではおりません。ですが、あなたは仮死状態なのです……『夜天の書』があなたを“死んだと判断する”くらい、深い眠りについておられるのです。」

「そんな……！？それじゃあもしかして……！？」

持ち主が書を完成させる前に死んだ場合、『夜天の書』は異世界へと転移する。

「そんなの駄目だ！！守護騎士のみんなはともかく、あなたはまだ書と分離できていんだ……」のままじやあなたはずつと防衛プログラムと……！」

「それでも、我々は行かなければなりません…。」

「そんな…。お願いだ、行かないで！！僕を一人にしないで…！」

「この空間のミトナは意識だけの存在にすぎない。故に、今の彼には何もできない。彼女の別れの言葉を素直に受け取るしかできない……。

「主…いえ、ミトナ…。私たちは、あなたに出会えて本当に幸せでした…。」

「女神さん…。」

「ただの魔導書のプログラムにすぎない私たちを人として扱い、家族にしてくれた…。私たちのために笑ってくれた、泣いてくれた、怒ってくれた、喜んでくれた…。それを幸福と言わずなんと言つのですか…？」

彼女は今までのことを思い出しながら目に涙をため始めた。ミトナも着々とせまる別れの時を感じて涙を流し始める。

「それでも……、それでも一人になるのは嫌なんだ……！」

「もう、あなたは一人ではありません。あなたが救い続けた子供たちは、みんなあなたのことを慕つてついて来たのですから……。」

「…………あ…………あ…………。」

「…………そうだ……。今の自分には愛すべき人達と、愛してくれる人達が…………。」

「だから、ミトナ……。どうか笑つてください……幸せになつてください……。」

「…………そいつで彼女は抱きしめる。自分達を幸せにしてくれた彼を……ずっと孤独だった男の子を……。」

- - - そして彼は抱きしめる。自分を幸せにしてくれた彼女を… 終わらない悲しみを背負う女神を…。

悲しみと喜び…、様々な感情がこもった涙を流す2人。だが、ついに別れの時はやつてきた…。女神の体とミトナの体が消滅していくのだ…。

「……時間のようです。ミトナ、改めて言います。あなたは1人ではありません、幸せになつてください。」

「…………ありがとう。」

「れよつなり、我がナント。私達の血縁のアリ」。

「さようなら、夜天の女神、守護騎士のみんな……。僕の最高の……。」

- - - 「「家族よ…。」」

その言葉と同時に、ミトナの意識は再び闇に落ちた…。

（廃墟（ウニイグ城））

「……。」

意識を取り戻したミトナ。彼の腕に彼女の姿は無く、『夜天の書』も消えていた。その場に存在しているのは瓦礫と死体の山、そして自分の所持品のみだった…。

しかし、今の彼の表情に迷いと戸惑いは無かつた。やるべき」とは決まっている。

「行かなきやな、子供達のところへ。」

「彼女達を救つたために造り続けた魔導書を手に、彼は向かう。自身が愛すべき者達と、自身を愛してくれる者達の元へと。」

「……女神さん、みんな……。本当にありがとうございます……でも……、幸せになる時は一緒にだからね……？」

「……男の子は歩み始めた……、彼の望んだ幸せな世界のため……。」

第十一話 やつこへば、まだ戻れへり 口宣.. (記書也)

やつこ歸つておたノ日本編に... .

みらい
pione

八神家・夕方

『いや、子供たちを引き取り始めた時の話とか初恋の話とか、結構省いたんだけど長くなつてごめんね。懐かしいからついついつまらなかつたよ。あははははははは…。』

ミトナによる昔話を聞いた面々は、その内容にただただ呆然としていた…。特にヴォルケンリッターの4人は、かつて自分達にとって大切な家族が居たという事実に衝撃を受けていた。

「…………トナ殿。」

『何かな、シグナム？』

「…我々の当時の記憶は、あなたが持つておられるのですね？」

『うん、やつだよ。でも、元へ戻るには戻れないや』

「つー? 何故ですか! ?」

「セウヤドミトナさん! …何でみんなの大切な思い出が返せないつ
ちゅうひなん! …」

「…主。」

おそれらく、今のヴォルケンリッター全員の気持ちを代弁したシグ
ナム。だが、本題を言つ前にミトナが先読みして無理と宣言した。
そのことに納得いかず、現主のはやてが異を唱える。

『とにかく最後まで聞いて…。君達が旅立つたあと、リインフォー
スとの約束通り僕は幸せになるために生きてきた。子供達を導いた
り、魔法を極めたり、恋をしたり…。』

「…捨て子を取り繕い続け、百人の子供の父親になつた…。

「…野盗や悪徳領主をケチョンケチョンにしたことあった…。

「…ベルカ式の魔法を少しアレンジして國中に広めてみた…。

「おこいしいいい！？今、やうつとんでも無こい」と言わなかつたああああああああああ！？」

「おわっ！――みらいさん、復活したんか！？」

自分の御先祖様がとんでもない人物であつたことと、ミトナと自分達の家族の関係を聴いて泡噴いてたみらいだつたが、今度は自分がずっと疑問に思つてたこと…アルテミアとベルカの技術が同種という謎をさらりと答えられてしまつた…。

「いや…、話の途中で予想できたり?」

「私もなんとなくは……。」

「やつよねえ……。」

じりやらぬづかなかつたのは脳がショートしてたみらいだけだつたようである…。最近、丸くなつたせいで勘の鋭さも減つたらしい（ハイア・談）

「…………… しあがないだろ…………。最初のカミングアウトに驚いたせいで、
頭が真っ白なんだよ…………。」

『続けていいかな？…確かに、みんなと出会つ前と比べたら僕の世界（人生）は眩しいくらい明るい物になつた。僕を愛してくれる人達と、僕が愛すべき人達に囲まれて毎日が幸せだつた…。でもね、やつぱり心残りがあつたんだ…。君達を呪縛から解き放てなかつたことさ…。』

「ミトナ…。あなた、まさか…。」

彼の人柄と性格をよく理解しているリインフォースは、なんとか予想がついたらし。他の面々も、彼が『女神の書』を造つたということを踏まえ、おぼろげに想像がついた…。

『僕は君達が去つたあとも、例の試作型魔導書を改良し続けたのさ。『夜天の書』が転移しちゃつたからリンクが切れたせいで、守護騎士のみんなの記憶も切り離されちゃつたけど、消滅はしなかつた。』

だつたら尚更、何故返してくれない！？と、シグナムが再び問い合わせようとしたがみらいとはやで、が落ち着かせる。一人は、きっとミトナはみんなが納得するだけの理由を話してくれると、この短いよつな長いよつなやり取りで確信していた…。そして、彼に続きを促す…。

『とにかく完成させよつて魔導書の改良を続けたよ…。でも君達が目の前から消えた当時では、ただリインフォースを解放する

プログラムだけじゃあ足りなかつた。』

- - - 課題その1。異世界に転移した『夜天の書』がどこにあるか
判らないといけない。

- - - 課題その2。場所が判つたところで、そこに行けなければな
らない。

『しかも、完成するころには僕は御爺さんになつてそつだつたから、
元気なうちに『夜天の書』探しの旅をするのは無理そつたんだ
よね…。』

- - - 課題その3。自分が死んでも起動し続けなければならない。
- - - 課題その4。みつけた時の彼らの主も助けなければならな
い。

- - - 課題その5。逆もしかり。最悪な主から彼らを助けること
ができなければならぬ。

『これらの課題をクリアするためにありとあらゆる術式を組み込ん
だ…。そしたら、その…。』

途端にまた言いにくそうにするヒトナ。この場で一番気が短いヴィ
ータが痺れを切らす…。

「だーーーめんどくせーなーー早く言えーーー！」

『…また、容量が足りなくなっちゃったんだ…。』

「つおいつー？」

『でも、さつきの課題っていうか条件を最低限に削つても足らなかつたんだよ…防衛プログラムを破壊した後、形態維持と再生機能の力を失つたりインフォースをこの『女神の書』に移すためのスペースが…。そこで思いついたんだけど…。』

…『女神の書』に保存しといた君たち4人の記憶部分を媒体に
しようかなと…。

その考えに全員言葉が出てこなかつた…。確かにミトナによるオリジナルの術式よりも『夜天の書』の一部とも言えるヴォルケンリッターの記憶は、管制人格であるインフォースにうつてつけだつたかもしれない。

『だから、全部終わつてインフォースが『女神の書』に宿つたら、みんなの記憶は彼女を経由して戻つてくるからしばらく待つてね？』

そんな彼の言葉（筆談）に守護騎士たちは一瞬だけ沈黙したもの、すぐに気を取り直して肯定の意を示す。

「…分かった。けど、必ず思い出せてくれ……。」

「ラインフォースが涙を流したのだ…。よもや、嘘とこいつとともにあ
るまい…。」

「そして何より…。」

「記憶は確かに無いんだけど…、懐かしい感じは確かににあるのよね
…。」

ヴォルケンリッターの4人は彼のことを信じることにしてきたようだ
ある。

『ありがとう、みんな。…あと、はやしちゃん。』

「え?…あ、はい。」

突如ミトナがはやてに話を振った。いきなり自分に話しかけてきたので少し呆けてしまつたが、すぐに話を聞く体制に入る。

『君に、選択肢は2つある。』

「…」

「…一つ。このまま平和な日々を過ごします。」

「…二つ。『夜天の書』の防衛プログラムと戦う。」

ミトナの提示した言葉の意味を、はやは8歳とは思えない表情で考えはじめる。やがて、逆に訊き返してみる。

「…一つはどちらか？」

『最近のことを考えれば分かると思ひけど、『女神の書』がこの世界に存在する限り、はやはちゃんは『夜天の書』に侵食されることは無い。つまり、君は天寿を真っ当できる。』

「…みんなは、どうなるんや?」

『はやてちゃんが死んだら、『夜天の書』だとまた転移してどこかに行っちゃうと思つよ?その時は僕もついて行けるから別にいいけど…。』

「……なあ、みんな…。みんなはビビりたいんや…?」

はやはては自分の家族に問い合わせてみる…。自分の家族のことなのだから、本人たちの気持ちを聞かない事には始まらない…。

「あたしたちは…。」

「……主、私たちは彼女を…リインフォースを苦しめ続けた闇を破壊したいです…!!」

「確かに『女神の書』さえあれば、問題は起こりません…。しかし…。」

「それだけでは、何の解決にはならないのです…。」

「お前たち……。」

守護騎士たちはリインフォースを救う気満々のようである。家族の満場一致なら躊躇つことは無いと言わんばかりに、はやてがいい表情でミトナに向き直る。

「もう言つわけや、ミトナさん。選択肢はその2でよろしく頼むわーーー！」

『……ありがとう…。ヒカル＝ランダル君、さつきから喋つてないけど大丈夫かい？』

じついつわけか、みらいはずっと沈黙を続いている。別にさつきの氣絶の後遺症というわけでもなさそうでボケ面は晒しておらず、むしろ鋭い刃物の様な雰囲気が戻っていた。

「……ああ、ミトナのじーさん……。やっぱり“長生きは大変”だつたのか？」

『……ああ、すげー“大変だつてことが分かった”よ…。だからこそ、ね？』

「みらいさん……？」

意味深な会話をする一人に、はやてやなのは、そしてフロイト達は首を傾げた。この一人の会話の意味を察したのは、同じ“長生き”と“死の経験者”達だけだったろう。

「何でもない、ちょっと改めて決心しただけだ……。」

「そうか……、どうかにじる反対はしないんやな?」

「当たり前だろ?が、家族の望みを叶えずして何が家族か。」

硬く拳を握り、力説するみらい。すると、八神家以外の面々もそれに参加してきた。

「俺も手伝わせてもらおうか?」

「私も手伝うの……せつかく仲良くなつたばかりなんだし……」

「私たちも、はやての家族のためなら……。」

フィーアとなのは、続いてフェイトが加わった。当然アルフとプレシアも手伝う気である。特に家族を失うことの辛さを知ってる分、フィーアとプレシアは人一倍気合が入つてたりする……。『絶対に自分たちと同じ気持ちにはさせない』と……。

「みんな……。ありがとうございます……。」

「そんじゃあ、今年やることが決まって一段落したことだし……。夕飯でも作るか。お前ら、食つてくれ?」

「……お言葉に甘えます(なの)。」「……

……新年早々、大きな波乱が始まつた……。しかし、当事者達の表情に暗いものは一切無い……。

第十二話 そつこへば、まだ正月迎えて一皿…（後書き）

なのに口クに進まねええーー！

プロフィール③（前書き）

無論、彼のです。

プロフィール3

名前 マリウス・ミトナ・ギルジット

年齢 享年76歳（本に意識を移してから600年経過）

出身 アルテミア王国

備考 歴代『夜天の主』の一人。リインフォースとヴォルケンリッターの5人を防衛プログラムの呪縛から解き放つために、救済プログラム満載の『女神の書』に自分の意識を宿していた。

その正体はみらいの御先祖様で、アルテミア王国の“三大偉人”である。3人の内の一人ではなく、3人ともミトナのことであつたことに対してみらいは衝撃を受けた。『信長と秀吉と家康は同一人物であなたの先祖』と本人に言われたようなものである…。

『大神父』の異名の通り慈愛に満ちた性格をしており、同時に『悪魔の子』と『学神』の通り名に恥じない実力の持ち主。現代のアルテミアの魔法の基礎を造ったのは、『夜天の書』を参考にしたのであり、そのためベルカ式と類似点が多い。しかし、凡庸性と滅茶苦茶加減では彼の魔法が一枚上手。

今はハ神家を筆頭に『リインフォース救済作戦』の準備を始める

つもりである。

名前 女神の書

備考 夜天の書にそっくりな、リインフォースを救うために丹精込めて造られた魔導書。ミトナが生涯を費やして作り上げたため、基本的に害は無いが性能はロストロギア並である。鎖が取れるまでミトナの意識が完全に覚醒することは無かつたので、当初の行動の数々は彼の潜在意識によるもの…。

機能一覧

転移能力…『夜天の書』がある程度近くにあった場合、即座に転移できるようになっている。ある程度近くと言つても、地球とアルテニアはとんでもなく遠く離れていたりするのだが…。移動のために瞬間移動する時もコレを使ってた。

自衛機能…自分で浮遊したり冗談で済む程度に反撃してくる。主な被害者はみらいドヴィータ。

浄化機能…『夜天の書』の侵食を抑え、尚且つそれをリンクアコアに変化させる機能。これが最も容量を奪つて大変だったと彼は語る。

抹殺機能…えらく物騒な名前だが、書のページを半分埋める魔力が溜まつたらリンカー・コアを自動的に発射するシステム。ただし、その時の『夜天の主』が最低の人間だった場合は『夜天の書』に蒐集させず、そのまま主を撃ち抜いて殺すようになつていた…。無論、はやてにその心配は一切必要なかつたのでご安心を…。

救済機能…ヴォルケンリッターの思い出をベースにしたリンクフォースの媒体部分。防衛プログラムを破壊した後はここに引っ越ししてもらひ予定。

戦闘機能…自衛機能では耐えれない状況の時にのみ使うつもりだが、その効果は…。

使用魔法について

【死召詩】…アルテミアの禁呪。刺された、斬られた、撃たれた等の過程をすつ飛ばして“死という結果”を大規模に問答無用で突きつける禁忌。扱いが難しそうなのでミトナしか使いこなせなかつた。

【負感情蟲】…アルテミアの魔法。最大の苦しみをもつて相手を殺す惨殺魔法。主に見せしめ専用だつたらしい。

余談だが、フィーアはアルテミアの魔法を参考にしたことがあるた

め、似たよつな詠唱を唱える。

第十四話 元日に詰め込みましたよ…

リンクフォース side

～ハ神家・pm18:03～

「……負けたわ…。」

「何、初っ端から凹んでるんですか…。」

「子供とは言え女の子にならまだしも…、あなた達にまで負けるなんて…！」

「…いや、やう言われても…。家事を口口口にやらなかつたからでしょ…。」

現在、みらいのお言葉に甘えてフィーアとテスタークサ家、そしてなのははハ神家の食卓にお邪魔していた。ただ夕飯をご馳走になるだけなのもアレなので、フィーアは食事を作るのを手伝つたのだが、どうやら完成した夕飯はプレシアの女のプライドを粉々にしたよのである…。

「プレシアさん、あなたの気持ちよくわかります。仲間ですね
……。」

「シャマル……。」

「残念だがシャマル、プレシアさんの場合は俺より腕が低いだけで不味くは無い。ていうか、ちやんとした食べれる物だ。」

「……はやて=みらい>ファイア>>プレシア>>初心者>>越えられない壁>>シャマル。」

「酷つ……？」

シャマルには悪いけど、当分このネタは使い続けますwww（作

者・談）

「しかしまあ……、連邦随一の調理兵（笑）の腕前とはこの程度か……。

「

「てめつ……俺の場合は低レベルの食材でも美味しいもの作れるのが面倒なんだよ……。」

「ふんっ！…だつたら今度、勝負だ。お題は、お菓子でどつだ？」

「乗つた！！しかし、採点項目に『費用の安さ』も入れることを所望する。」

「許可する。」

「みらいさん、フィーア兄。その勝負、私も参加するで。」

日頃の倍の人数がいるためか、八神家の食卓はいつもより賑やかである。その様子を眺めながら、穏やかな表情を浮かべてる人物が居た。

『…懐かしいかい？』

「ええ、とても…。」

リインフォースは、ミトナと過ごしたかつての日々を思い出していた。自分とミトナ、守護騎士の4人、そしてミトナが救い続けた子供達…。あの時は、この場の雰囲気に勝るとも劣らない賑やかさを誇っていた…。

『どうせならプログラムを壊すのはやめて、侵食作用を抑えるだけにしてずっと旅を続けるかい?』

「実質、不老不死になれるのだ」。防衛プログラムが消えれば暴走の心配は無くなり、主が幸せに死ぬまで寄り添い続け、主が死んだらまた新しい主の元へと旅に出る……。

「ミトナ、本気で思つてないことは言わない方が良いですよ。600年の時を生きた今のあなたなら、私達の気持ちが分かるのでしょ?」

『あははっ……。やっぱり、思い込みつてわけでは無かつたみたいだね。独り善がりじゃなくてよかったですよ。……リンフォース、"自分達だけ"長生きをするといつのは本当に……。』

「辛いものだね……。

「わあ……、アリスちゃんすいーーい。」

『//ヤア。』

「どうしたの、なのは?……わ、すいーー。アルフもできる?」

「いや、肉球じゃ無理だから……。」

猫アリス（アリシア）が器用に両手でフォークを一本持ちながら食事をしていたのである。やや小柄な体躯には不釣合いでシユールな光景だが、ほぼ不自由無く食事を続けていた。因みにアリシアが食べてるのめ、全員と同じではやて達の手料理である。みらいが猫缶を出そとしたのをフィーアが全力で止めたのである。

（アリシアにペッターフードなんて食わせたらアリシアさんご殺され
る……）

プレシアは、まだアリス（猫）の正体がアリシア（娘）であると気づいてないものの、今までの経験からしていざれバレるのは明白なので、発覚した時のために色々必死になつていた…。

(主に『犬食い禁止』とか、『トイレ』とか……。)

「どうしたのフイー」ア……？

「いや何でもない、何でもないぞフュイト……。」

「……一部の者は穏やかに、一部の者は賑やかに、そしてヒヤヒヤしながら楽しいひと時を過いだ。」

みらこ・s.p.d.e

（18・52）

「さてと……議長、準備整いました……！」

「よろしく……」これより、第28回『ハ神ファミリー家族会議』を行つて……。

「…………色々とおひがひと待て。」「…………」

食事も終わり、出されたお茶を飲みながら一息入れていたら、みらいとはやてが急にこんなことを言い出したのである。しかも、いつのまにかはやはては車椅子から豪華な装飾がされた王座のような物に座っていた…。彼女らの家族であるヴォルケンリッターは、どうやら一週間のうちに何度も経験したようで、慣れた動作で議長と向き合つた。

『まだ残つてたんだその椅子…。』

「ザツー・ヘ!!トナさんちのやつたんか!？」

『ああ、気にしなくていいよ。『//捨て場から拾つて直しただけの奴だから。』

「…みらこさん?」

「いや、俺は知らないぞ!/?親戚が『由緒正しき名家に伝わる王座』つて渡してただけだし!—!」

ミトナの所有物だった時点であながち間違つてないが、まさかのリサイクル品…。微妙な気分になるのは仕方が無い…。

「ところで、はやはてちゃんが議長なの?」

「ナニヤで、なのはなやん。」

「八神家暗黙のルールその2。『八神家で一番偉いのは、はやはやて。』

「みらい、お前…。何か思つといひは無いのか…?」

「無い。」

彼の名譽のために言つが、みらいが白毛警備員だから偉くないとかでは無い。むしろ、魔方で作った畳空間で野菜を栽培したり、最近は魚の養殖を始めたので稼ぎは多いくらいである。しかし、この家ははやての物であつて家主もはやてである。そんな彼女を差し押して家のことを仕切るのは間違い、ところが彼の考え方である。

（閑話休題）

「では、議長。これからの方針をリストにしてましたので、お聞き下
りこ。」

「つむ。」

「…はやて、なんだか様になつてゐるね……。」

「あの子、将来大物になるわよ…。」

とりあえず転生者から聞き出した情報と、ミトナの説明を踏まえて考え出したこれからの方針をまとめてみた。

- - -『夜天の書』を完成させる。
- - -管理局と折り合いをつける。
- - -転生者の対策。
- - -防衛プログラムと戦うために戦力増強。

「当分の問題は管理局だな…。」

『女神の書』により、時間はたっぷりあるので完成を急ぐことも無い。転生者も特に脅威にはならないだろうし、あわよくばリンクカーを奪えるかもしれない。しかし、実際はこの世界にリンクカーを持つ者は少ないので、最終的に別世界に行く必要がある。そうなると、管理局に目をつけられるのは必須…。

「事情が事情だから、説明すればいいんじゃないのかな？」

「甘いぞ、なのは。組織つてのは規模が大きいほど意見がバラバラだ。全員が全員、リンディ提督みたいに話の分かる人じや無いんだよ。当分は、慎重に動かないと…。」

「… なあ、みらい。」

「どうしたフイーア？」

フイーアがすく言いにくそうに話しかけてきたのを怪訝に思いながら、聞き返す。

「リンディ提督はともかく、クロノ（執務官）は『夜天の書』のことを知ってるのを忘れたのか？」

「…………。」「…………」

「…………。」「…………」

「…………。」「…………」

「忘れてたああああああああああああああああああああ…？…？」

みらいの絶叫に耳を塞ぎながらも、フイーアは昼間の会話を聞いてなかつた面々に話す。例の転生者の話を、自分ともう一人の転生者、そしてクロノがそれを聞いたことを…。要するに、限定的にとはいへ、管理局員に『夜天の書』のことは発覚しているのである。

ついでにハラオウン親子と『夜天の書』の因縁も話した。その話題になつた瞬間、リインフォースと守護騎士たちは顔を俯かせた…。

「そりが、あの二人にそんなことが…。」

「ああ…、でもクロノは割り切つてたよ…。あいつは、もう過去に囚われてなんかいなかつた…。」

結局クロノにはこつちで分かつたことは全部説明し、彼を経由して改めてリングディに協力してもらうことにした。そこで、ふとみらいが気づいた…。

「ん？… そういうえば、クロノともう一人の転生者は本局で何を調べてるんだ？ あっちでやれることなんてたが知ってるだろ？」

「……実はな、俺も信じられなかつたから言わなかつたんだが…。」

「……フイーアは口を開けつつある……、みらいとはやての大切な人たちに關することを……。

「リーゼ姉妹とグレアムおじさんのことなん……。」

「……」

「誰だ！？」

突如、誰かの気配がフイーアの言葉を遮り、『ドサッ』といつ物音がベランダの方から聞こえてきた。全員、各自のデバイスと武器を構え、唯一戦う術を持たないはやてを守るよつに集つ。

「シグナム、ついて來い。他のみんなは、はやてを頼む。」

「おひ。氣をつけろよ？」

みらいはオルギニースを、シグナムはレヴァンティンを構えながらゆづくとベランダに迫る……。そして、みらいは銃剣を外に向けな

がらシグナムに田で『開けぬ』と指示する。

やがて、みらいの金剛と共にシグナムが勢いよくベランダの扉を開けた。するとそこには…。

「うーへ、こつたこづったんだ…！？」

「…………お願い、アリ、アを。」

……傷だらけでボロボロの『ワーゼロシット』が倒れていた…。

第十五話 星を従えしトトロ（前書き）

ちょっと、雑だったかもしないんで後口書きを直します…。

第十五話 星を従えし亡靈

リーゼアリア side

（3年前・海鳴市）

「…クソッ、なんのよアイツ……！？」

「どうするのよアリア…？」のままじや…。

自分達が敬愛する主人の願いを叶えるため、『闇の書』の主に選ばれた『ハ神はやて』監視していった『リーゼアリア』と『リーゼロッテ』。その一人の監視中にいきなり現れた次元漂流者は謎の襲撃者を撃退し、監視対象を守った。

だが、そのまま居候されでは困る。計画にどう影響するか分からないので、二人は彼を排除しようとしたのだが…。

「強すぎよ…。」

「私達、二人掛かりで無理なんて…。」

……ものの見事に返り討ちされてしまった……。

「戦闘技術も一流だつたけど……。魔法がやつかいね……。」

「もう意味分かんないわよ、アレ……。」

魔力もほとんど使い切り、変身魔法まで解除してしまい満身創痍である。今、誰かに襲われたら……。

「……見つけたぞ……。」

「……うー?」「

死ぬ。

声のしたほうを見ると、いつだか監視対象を殺しにやってきた黒装束の同類だった。二人は何度か奴らを撃退しており、それほど強くは無いが弱くも無いと感じていた。

「前回はよくも邪魔してくれたな…。まさか、グレアム提督の飼い猫だつたとはな…。」

「何故、父様のことを…？」
「自分達の素性をあつさり言い当てたことに驚いたが、それも長く続かなかつた…。

「それを貴様らが知る必要は無い。…お前達、やれ…」

「ハフ…」

「ハフ…？」

潜んでいた複数の黒装束達が一斉に一人に襲い掛かつてきた…。
一人は、一瞬覚悟を決める。しかしその時、一人の背後から青白い光が差し込んできた…。

「何……？」

「…………」

「「「ぬわああああ……」」

「魔力の弾丸！？なんだこのふぞけた濃度は……？」

突如、どこからともなく飛んできた魔弾に黒装束が次々と蹴散らされていった。何が起きたのかと思い、リーゼ姉妹は後ろを振り向く。

「よう、誰だか知らないが無事かお前ら？」

「……先ほど自分達を撃退した、『ミランダル・ラインベルト』が居た。

変身魔法で姿を変えていたため、自分達がさつき彼を襲つた人物であるとは思つてないようである。ミランダルは若干ぶつかりぼつに安否を訊いてきた。

「え……ええ、お蔭様で……。」

「あ、ありがとうございます。」

戸惑いながらも、一応礼を述べる一人。正体に気づいてないなら、それにこしたことは無い。その時、邪魔をされた黒装束のリーダー格が声を荒げた。

「……貴様つ！－何をする！－？」

「黙れ外道共。うちの居候先の女の子だけでなく、道端の女性まで襲う輩は徹底的に滅してくれる！－！」

「何つ！－？ちよつと待て、我々は……！」

「問答無用！－！【爆碎満弾砲弾】－！－！」

－－ミランダルの言葉とともに、リーダー格が立っていた場所が吹き飛んだ……。

その後もミランダルの猛攻は続き、結局黒装束たちは撤退していった。やがて、ようやく夜の静けさが戻ってきた。

「で？お前達はなんなんだ？耳と尻尾を付けてるといひを考えると、魔法の関係者みたいだが……。」

「えっと……私の名前は『リーゼアリア』。」

「私は『リーゼロッテ』……。とつあえず助けてくれてありがと。」

「気にするな。とつあえず、治療もかねて家に来ないか？」

「えー…？」

まさか監視対象の家に呼ばれるとは思わなかつた…。

「あんた居候じや無いの？勝手に私達を連れて行つていいの？」

「……うちの西候先の家主はな、家族が居ないんだよ……。」

「 「……。」「

「計画のために事前に調査しておいた内容なので、特に驚く」とは無い……無いのだが……。

「今のあいつには通院先の医者と、遺産を管理してくれるが会つてくれない親戚だけなんだ……だからせめて、あいつの話相手ぐらいにはなつてくれないか?」

序盤はやや悲しげな表情を、後半は苦笑いしながら彼は言つてきた……。そこで、二人は考える。このままコソコソ隠れながら監視するのもいいが、自然と接触しながら監視するのもいいかもしないと……。

(ロッテ……。)

(了解。)

念話で一言だけ確認しあい、彼の誘いを受けることにした。あくまで計画のためである……、断じて観察対象に情が沸き始めたわけでは無い……筈……。

「じゃあ、お邪魔させてもらひつわ。あなたの名前は?」

「『ランダル・ラインベルト』。アルテニア王国ついでにこれから飛ばされてきた、世間的には次元漂流者って奴らしい。」

（現在 2019・04・海鳴市・住宅街）

（……………。彼のことを思いだすなんて…、これが走馬灯つてやつかしら…。）

リーゼアリアは思い出していた、彼と初めてまともに会話をした時のこと。彼に連れられて、監視対象である彼女に1人の友人と接し始めた時のこと。

- - - みんなで彼をからかってふざけ合った…。
- - - みんなでお互いのことを語り合った…。

みんなで彼女が立てるよつになつたことを喜んだ。

(今思えば…、血の繫がりが無い家族を持つ者同士で通じる物があつたのよね……。)

- - グレアムを『父様』と呼ぶ自分達。

- - 互いを家族と認め合つたみらいとはやで。

「ふつ、これで八神はやてとジヴォルケンリッターは安全だな…。」

「もつー近はぢつした?」

「さあな…。だが、今はとにかく八神家に居る“イレギュラー”を仕留めに行くぞ。」

だんだんと意識が朦朧としてきたものの、それでも素手で自分の“腹部を貫いた”襲撃者の言葉は聴こえてきた…。

先日に引き続き八神家を監視していたリーゼ姉妹だったが、突如

この3人に襲われたのである。不意を突かれた上に中々の実力者で、人数でも不利な二人は徐々に追い詰められていった…。そして、襲撃者のうちの1人がロッテにトドメを刺そうとしたところを庇い、自分が死に掛けていた…。

今彼女は腹部から出血しており、口からも少々血が溢れてきた…。

「…お前らは先に行つてろ。今の八神家はマジックトラップだらけだから気をつけろよ?」

「心配ねえよ。俺がもらつたのは『幻想殺し』だぜ?」

「ちつ…、プレデターの武器なんて貰つんじゃ無かつたぜ…。」

「つべこべ言わずにさっさと行け。俺は猫姉妹の片割れにトドメ刺したら行く。」

何を言つてゐるのかよく分からなかつたが、どうやら自分は殺されるらしい…。それを証明するかのように、最後に残つた男がアリアの首を掴んで持ち上げた。

「あぐつ…。」

「さて、八神家のために死んでもらおうか。」

襲撃者は腕を構える、先ほど自分を貫いた突きの構えを…。確實に息の根を止めるためか、心臓に狙いを定めているようである…。

「…ああ、これは罰なんだ…。みらいことはやめて騙し、自分の心さえ騙した自分への罰…。」

(…でも、せめて最後に…直接…。)

「…一人に謝りたかったなあ…。もう一度、彼の姿が見たかったなあ…。」

「……おー…。」

「なつー?」

「…突如、彼女の耳に響いた音は聽きなれた者の声であり、初めて聞いた口調だつた…。

「俺の身内に…何をしていぬ……。」

「何でーーお前が…！？」

「…その声は、今最も聽きたくなかったし、聽きたかったものでもある…。」

「何を、してーると…ーー訊いて、いるんだ…糞野郎がああああ
ーー！」

『ガガガガガンー!』

「グおわっー？」

彼の怒声と轟音と同時にアリアの首を掴んでいた手は離れ、彼女は重力に従つて落ちる。しかし、体が地面にぶつかる事はなかつた。誰かの腕が自分を支えていた。

「おーーーーしつかりしつアリアーーー！」

「… // … リンン… …。」

「今、最も会いたくなかった彼が…同時に会いたかつた彼が…八神みらいがそこに居た…」。

みらい si de

「【私は救済者、私は修復者、我が意志の元に彼の者の傷を癒したまえ】。」

古くから伝わるアルテニアの治療魔法でリーゼアリアの傷口を塞

ぐみりこ。じつやく効果があつたよつで、彼女の顔色がよくなつて
きた。そして、口を開く。

「……//」、「……、私達……。」

「今は喋るな。治療魔法って言つても心急処置だ……。」

「……でも……。」

「ロッテから雑な説明はしてもういた……。」

「ひー?」

「だから、詳しい説明はあとでしてもういた……。今は……。」

視線を上げると、わきばづぶつ飛ばした襲撃者が若干覚束ない足
でフラフラと戻ってきた。封鎖結界を張つたので手加減無くぶん殴
り、空っぽの民家を壊しながら吹つ飛んで行つたのだが……。

「思ったより頑丈だな……。」

「神から貰つた『夜鬼族』の肉体を舐めんなよ……？」

「神…、転生者か…。」

「初めましてだな、イレギュラー。とりあえず、その猫を殺すのを邪魔しないでもらえないか?」

そう言つてリーゼアリアを指差す転生者。見た目は黒髪で金色の目をした普通の人間だが、もらつた力により尋常じやない身体能力を所持している…。

「一応、お前の家族を守つてやつたつもりなんだぜ?」

「…。」

「そいつら猫姉妹は、過去に囚われた主人の復讐のために八神はやてどヴォルケンリッターを利用しようとしてたんだ…。そのために、お前らに近づいて騙してたんだ。」

その言葉に、アリアは俯いた…。もちろん、事実なので弁解するつもりは無い。だがせめて、自分の口で言いたかった…。自分で彼に懺悔したかった…。

「だから何だ……？」

「……はあ？」

「え……？」

みらいの口から発せられた意外な言葉に、転生者もアリアも固まつた。しかも彼は、まるで騙されていたことなど、どうでもよさそうな口ぶりで……。

「その話なら、さつき来る前に口ッテから聞いた。『私達は一人にとんでもない隠し事をしていた』とな……。」

「だつたら何故！？」

「そんなの簡単だ……。騙してたことを怨んだり憎んだりするより、何か事情があるって信じてやれるほど……。」

「……こいつが大切な奴だからさ……。」

「//ハシ…。」

「ついでに、これは八神家全員の意志だ。はやても、詳しいことはアリアの口から聞きたいそうだ。」

まさかの思わぬ展開に焦ったのは転生者である。自分の予定では、猫姉妹を手土産に八神家の信頼を得ることに成功し、イレギュラーを油断したところで仕留めるつもりだったのだから…。

「…しかも、『八神家全員の意志』と言つたか？」

「…そ、そんな馬鹿な…。はやては何も思わなかつたのか！？」

「うひの家族を勝手に呼び捨てすんな。あいつは、ただ何をするにも本人の口から直接聞いてから考へるとよ…。」

「……そんな…。」

「そういうわけだ…、余所者はとつとと帰れ。“俺の気が変わらないうちに”な…。」

そう言つてみらいは、肩にアリアを担いで家に帰ろうとする。だが、転生者は諦めきれなかつたようである……。どこからか傘を取り出しその先端を一人に向けた。

「……はい、そうですかと言つわけないだろ……」

「……最後の警告だ、帰れ……。」

「黙れ、そして死ね……」この世界を俺達『転生者同盟』の理想に造り変えるために……！」

「- - - がががががががががががががが - - - ! ! !

傘の先端にある銃口が火を吹き、銃弾が放たれた。弾幕はみらいとアリアの二人を襲う……筈だった……。

「何！？」

「気が変わった……アリア、ちょっと待つてろ……。」

全ての銃弾が見えない何かに止められたかのように、たゞ“宙で静止”したのである。それを余所に、みらいは、そつとアリアを路上に降ろす。そして……。

「……悪いが、今田の俺は……。」

「……魔法の効果が切れ、銃弾が地面に落ちたのとほぼ同時に……。」

「容赦できそうに無い。」

「なー?」

「……田の前に銃剣を振り上げたみらいが居た。」

「ふんつー!」

「ぐああつーーー（メキイーーー）

「ぐああつーーー」

今の一撃で左腕を碎かれた転生者…。だが、彼の猛攻は止まらない。足、腰、頭、首、腕…体のあらゆる部分に重たい一撃が加えられていき、体が粉碎されていく…。

「がああああああああああああああつーーー？なんでだーーー？俺の体は『夜鬼』の…ーーー！」

「確かに頑丈だが、お前程度の防御力と全く遭遇しなかつたわけでもない…。」

「クソつーーーだつたらーーー！」

- - - 接近戦は不利と感じた転生者は距離を取るとするが、逆に絶望してしまつ…。

「な、なんだそれは…？」

“ 300 ”。 みらいの背後に、無数の光の弾が浮かんでいた。その数、

「終わりだ、転生者…。【天龍星空連隊】ーー！」

“……”

転生者は傘を広げて放たれた魔弾の流星群を防御する。傘が悲鳴を上げながらボロボロになつていつたが、段々と腕にかかる衝撃が減ってきた…。そしてついに…。

「…………防ぐやつたや。」ははは。

衝撃が無くなり、魔法の嵐が収まると確信した彼はそっと傘を
どける…。やがて、彼の視界に入ってきたのは…。

「容赦はできないと言つた筈だが……？」

…自分の目の前に添えられた銃口と、そこから放たれた閃光だ
った…。

第十六話 和解（前書き）

レイハとバルディの破壊と強化の展開は考えてありますので、安心を…。書くのはもう少し先になりそうですが…。

第十六話 和解

リーゼロッテ side

「八神家・みらいが外出して数分」

「外出つてか、進撃だらありや…。」

「封鎖結界張つた瞬間に“住宅地壊しながら”進んでたもんね…。」

重傷のロッテから断片的な説明を受けた途端、みらいは躊躇うことなく走り出した。よっぽど焦ったのか、結界も張らずに魔力を漲らせて光弾を纏い始めた時は全員が焦った。

「で…、ロッテ。説明してくれるんだろうな?」

フィーアは、今シャマルに治療されながら安静中のリーゼロッテに向かい合う。それにつられるように全員の視線がロッテに集まり、彼女は一瞬ビクリと体を振るわせた。

しかし、元々アリア以上にみらいとはやてを騙している事に迷いを持つてた彼女は、彼らに助けを求めた時点で多少なりこうなることを覚悟していたが、ここにきて彼女らに全てを告白することを躊躇

躊躇つてしまつた…。

（何故か“アイツら”は私達の目的を知つてたみたいだけど…。それでも父様を裏切るわけには…。）

謎の襲撃者（転生者）はどういうわけか自分たちの目的を知つており、それを阻止するために襲つてきたようなのだ。みらいとはやとの知り合いつて訳でも無む邪じやうだったので、向こうの目的は結局分からずついだつたが…。

「なあ、ロッテさん…。私ひそかに隠してたことって、なんや?」

「う…、はやて…。」

ところが、唐突に口を開いたのははやてだった。

「確かに2人が私たちを騙してたり、欺いたりしてたってのは正直シヨツクやつたわ…。」

「…。」

「でもな?それだけで口クな話も訊かずに絶交するほどの薄い仲で

「も無いやうか?

卷之三

「だから、話してくれへんか？… どんな事情であれ、私は受け止め
てみせる。」

「……分かつた、全部話すよはやて……。」

もうこれ以上、この小さな友人を騙すのが耐えれなくなり、彼女は洗いざらい吐くことにしたのだった…。

転生者 Side

八神家付近、半径50メートル

「本当に魔法なのかコレ!?」

あの場所に残つたリーダー格がフルボッコになつてるとも知らず、2人の転生者は目的地の近くまで辿り着いていた…のだが……。

「く、くそつ……もう一度…『ドパアアアン…』ぎやあああああああアスツ…？」

2人の行く手を無数の光弾が塞いだのである。おそらくリーダー格が言つてたマジックトラップだらうと思い、あらゆる異能を打ち消す『幻想殺し』を持つてして消滅させようと試みたのだが……。

「腕が変な方向にいいいいいいいいいいいい！」？

全くもつて意味を成さないのである。右腕で触れるたびに、光弾は爆弾のような衝撃波を生み出し、彼を襲い続けた。しかも、拳旬の果てに腕をボッキリやつてしまつたようだ…。

「痛えええええええ！？ オイ！－俺じや駄目だ、お前のプラズマキヤノンで……オイ…？」

宇宙人の科学装備を持った相方に頼もうとしたのだが返事が無い。怪訝に思い後ろを振り向くと…。

「…死ね。」

……ズタボロになつて路上に捨てられた相方と、自分達の“リーダー”で”殴りかかつてくる亡靈が居た。

フィーア side

（再びハ神家）

ロッテが事情を説明し始めた最中、突如響いた炸裂音と誰かの悲鳴が止み、静かになつた。何が起きていたのか分からず、不思議そうな顔をしていたお子様組だったがフェイトがフィーアに尋ねてきた。

「フィーア、さつきまで何が起きてたの？」

「襲撃者がみらいのマジックトラップに掛かつたんじゃねえか？」

「つ……やっぱ……フィーア、奴らの中に魔法を完全に無効化する奴が……！」

フィーラの言葉に反応したロッテが焦燥感に駆られた。このままでは奴らがここに来るのはと…。しかし、フィーラはそのことに冷や汗ひとつかかなかつた…。

「大丈夫だ。あいつのトラップは『アンチ・アンチマジック・マジック』だ。」

「…早口言葉?」

「違うわアホ。」

「『魔法を“潰す術を潰す”魔法』…つてことかしら?」

「流石フレシアさん、やつこいつこと。」

先ほど転生者が酷い目に遭わされた魔法の正体は案外簡単なものであり、魔法の膜で空気を限界まで“圧縮しただけ”的ものである。限界まで圧縮された空気は、解放された瞬間爆弾よろしくな勢いで拡散し、強烈な衝撃波を生む。空気自体は自然の物なので、能力が反応することも無い。

「…『幻想殺し』は魔物（衝撃波）の封印（魔法の膜）を自分で破つてるだけなのだ…」

「よしんば『』に来れたとして…、お前は“この面子”と戦えるのか？」

- - - AAA級の魔導師が2人と、使い魔が一匹。

- - - オーバーS級の天才が一人。

- - - 歴戦の猛者である騎士が4人。

- - - ロストロギアとそれに匹敵する魔導書に宿りし2人。

- - - 異世界の現役将軍が1人。

- - - 現在出撃中の元近衛銃士1人。

「…無理……。」

今更ながら、今の八神家に集っている面々は一国の軍隊すら滅ぼせそうな戦力を有していた…。魔法が通用しないからどうこうなるレベルでは無い。

「そうなると、総統は私やな…。八神帝国総帥、はやて総統や…！」

「　「　「　「　「　……。」　「　「　「　「　「　」

「　王　。」

「　流石に向こうつか…。」

「　むしろ向こう言えばいいんだよ…。」

「　反応に困ります…。」

はやてのボケに返ってきたのは微妙な空氣と沈黙だった…。うん、すげつたねー！

「　…聞かなかつた」と口にしてや…。

「　お、馬鹿がつてゐる内に終わつたようだな…。」

「　…がちやつ

「ただいま。」

玄関の扉を開ける音と、みらいの声が響いた。アリアのことが心配だったロッテは真っ先に2人が居るであろう玄関へと向かって行つた。

するとやはり、アリアを背負いながら何かを引きずつてきたみらいが帰つてきてた。どうやら全部片付けたようである。だが、いくらか顔色が良くなつたとは言えグッタリしたままのアリアを見て、ロッテは思わず叫びながら駆け寄つた。

「アリア！！」

「大丈夫だ、命に別状は無い。けれども腹に穴空けられたからな…
シャマル！！」

「はーい！！」

アリアをシャマルに託しながら、みらいとロッテはリビングへと戻つて行つた。

「『闇の書』への復讐、か……。」

「ずっと黙つててごめんなさい……。」

アリアをベッドで休ませながら、残りのメンバーはリーゼ姉妹から全てを聞いていた。二人の主人である『ギル・グレアム』提督が、はやての親戚を名乗つていた『グレアムおじさん』と同一人物であることと、彼が『闇の書』に対する復讐のためにはやてを利用していたことを……。

「まあ、家族の望みは叶えたくなるものやしな……。」

「しかたないっちゃ、しかたないか……。」

「へ……？」

「……それだけ……？」

- - - 軽かつた。

煮るなり焼くなり好きにしてもらいつもりだつたアリアとロッテは、拍子抜けして間抜けな声が出た。

「主はやで、みらい殿！？そんなのでいいのですか！？」

これに真っ先に反応したのはシグナムだった。自分たちの大切な主であり家族である2人が、こんなにアッサリとした態度を取っているのが納得いかないようである。

「そう言つてもなあ…確かにグレアムおじさんと、アリアさんとロッテさんのことはショックや…。けど、まだ何も起きてないんやで？それに、真相を自分達から教えてくれたことの方が大事や。」

「それにだ、2人とも。俺たちに対する、お前らの今までの態度も全部演技だつたのか？」

「それにだ、2人とも。俺たちに対する、お前らの今までの態度もやでが立てるよになつたことを喜んだあの日々は…

「それは違つ……。けど私たちは……。」

「だったら充分だ。とんでもない隠し事じゃらも、まだ何とでもなる内容だったしな……。」

「うやら二人は、本当に気にしてないようである。それでも、やっぱり後ろめたいものがあるようで再度訊いてくる……。

「……本当に、許してくれるので……？」

「ああ、むう氣にするな。はやくも言つたが、まだ何も起きてないんだから……。」

「アリヤで2人とも。私たちの縁は、そない簡単に切るにはできないで？諦めや。」

「……アラン、はやく……。ありがと……。」

もう一度と2人の前に顔を出すことも出来なくなると思つてた分、一気に安心感に満たされたリーゼ姉妹。たまらずロッテは涙を流した。アリアは意地を張つて堪えてるようだが、それを知つてか知らずかみらいとはやでが何かを思い出した。

「あ、セツコえーば…。」

「忘れてたな、みらいさん…。」

「？」

みらいとはやての2人は、一度互いに手を合わせ顎きあい視線をリーゼ姉妹に再度向ける、そして…。

「「明けまして、おめでとう。『これからもよろしく』お願いします。」

- - 結局、アリアは泣いた。無論、嬉し泣きである。

フイーラside

(さて…、どうしたもんかね?)

ハ神家の面々とリーゼ姉妹が話し合つてた中、フィーアとプレシアは別室でみらいが引きずつて来たモノと対話を終わらせたところだった。

「『転生者同盟』、こいつやまた安直な名前を…。」

「頭が残念なのは確かだけ…、物騒なのは変わりないわね。」

「…黒羽製の鎖で縛られた転生者トリオが転がっていた。」

「とりあえず、『夜天の書』は『グレアム』提督と話を付ければ大丈夫そうだな…。いつかの誰かさんほど狂つてないらしいし…。」「それ、私のことかしら?」

ロッテ曰く、グレアム提督は確かに『夜天の書』に復讐心があるものの、幼いはやてを犠牲にすることに罪悪感を感じていたそうだ。何も失わずに済むプランがあるのでならば、迷わず飛びつくだろう…。

管理局全体も、長年の悩みの種である『夜天の書』の被害がなくなる可能性があるのでなら、そんなに曰くじらを立てることも無いだろうし、グレアム提督がそれなりに手を回してくれそうだ。ハラオ

ウン親子もクロノの態度からして大丈夫だろつ……。

「クロノには明日、朝一で連絡を取つて説明するか……。その後にリーゼ姉妹経由でグレアム提督と話をつければ問題ないな。……当面の問題はこいつらか。」

そう、転生者である。対話（拷問）を終えた彼らは現在沈黙しているが、喋ってくれた現実は厄介極まりなかつた……。

「……遂に我慢できなくなつた転生者たちが、手を組んで世界を“修正”しようとしていると云うのだ。」

彼らの言つ“修正”とは、勿論『原作の展開』のことである。予定より半年近く遅く始まった上に、彼らの知らない展開が次々と起きる中、とうとう自分たちの手で世界を戻すと決めたそな……。

「『怒りも悲しみも乗り越えてこそ感動があるんだ！』とぬかした馬鹿の右腕を“踏み千切つた”俺は悪くないと思いたい……。」

「……そこはノー「メントよ……。でも、わたくしの言葉は認められないのは確かね……。」

----- “感動”ねえ…。他人の人生をなんだと思つてやがるんだ?

部屋の空気が途端に重くなつた…。 フィーアが殺氣を滲ませ始めたのである。

「人の体験や記憶を聞いて何かを感じるのは別に構わないさ…。ただ、それを娛樂扱いされて喜ぶとでも思つてるのかい? 何故、君たちの要望に合わせた生き方をしなきゃいけない? 何故、悲しい思いをしなきゃいけない? 僕たちは“見世物”や“語り部”的に生きてんじや無いんだよ?」

「フィーア、例の口調に変わつてゐわよ…?」

「おつと失礼。ついつい殺意が…。」

「殺るなら子供たちが居なことひしてちょうだい…。」

フレシアが恐ろしいくらい低い声でそつと言つてきた…。

「あ、殺すのは反対しないの?」

「私の娘が…アリシアが死んだことと、フロイトの経験した全てを“物語の展開”で片付けられて許せると思つてゐるの？」

「それもそつだな…。けれど、こいつらは管理局に引き渡すとしますか。下手すると転生者対策に管理局の協力が必要になるかもしないし…。」

“同盟”と言つだけあってか規模もそれなりのようで、場合によつては人手が足りないかもしない…。幸か不幸か、管理局でも転生者による被害は出でているので、改めて脅威（転生者）を送りつけて詳細を教えたら、案外簡単に増援を寄越してくれそうだ。

「なんにせよ、何事も明日からか…。今年も忙しくなりそつだ…。」

そう言ひついでや、彼は転生者3人を亜空間魔法による別の空間に放り込んだ。因みに、右腕を踏み千切られたのは『幻想殺し』の男である。故に、今の彼はただの片腕のチンピラである。

「さて、戻りますか。」

「ええ、そつね。」

「…2人は皆の居るところへと戻つていつた。」

第十七話 怒りのダークホース（前書き）

ネオクリムゾンさん、オリキャラありがと「わざわざ」です。彼らは明日あたりにでも出します。

今日は、実は怒らすと一番怖い彼女の話を…。

第十七話 怒りのダークホース

グレアム side

～1月2日・時空管理局本局～

「…………これは、じつこいつとかね…………？」

「え、えーと……。」

「あはは……。」

管理局の重鎮である『ギル・グレアム』提督は自分の部屋で驚愕した。使い魔であり、娘たちでもあるリーゼ姉妹に呼ばれて来てみれば、そこには思わず珍客が居たのである……。

「こやあ～、いひして会うのは初めてやなグレアムおじさん。」

「……。」

- - - 『夜天の主』と『銀河の守護霊』が、そこに居た…。

はやて side

「… そうか、全て知つてしまつたのか……。」

「はい。」

ここに来た粗方の理由を説明され、自分の企みがはやてに知られたと理解したグレアムは少々落胆したようである。

「軽蔑するかね…？」

「…確かに、最初に聞いた時はショックでした……。けど、まだ誰も傷ついてないし、誰も悲しんできませんやん?」

「…。」

「せやから…、これまでのことは水に流します。幸い、グレアムおじさんの因縁である『夜天の書』の問題も片付きました。」

「…はやて君、君はそれでいいのかね…？私は、君たちのことをずっと欺いてたのだよ？」

自分のやつたことへの罪悪感故か、なかなか自分の気持ちに決着がつかないようである。そこら辺はリーゼ姉妹と一緒にだと、はやてとみらいは内心苦笑した。

「さつさも言つたけど、まだ何も起きてないし誰も傷ついてないんやから別にいいんです。それに…。」

「…？」

「アリアさんとロッテさんの一人と友達になれたのも、『夜天の書』のみんなと家族になれたのも、大好きなみんなと今日という日を迎えたのも、全部グレアムおじさんのおかげやつたんやから…。」

「はやて君…。」

「グレアムおじさんが遺産の管理をしてくれたり、アリアさんたちに私を守らせたのは計画のためやうけど……、それでも今日まで私が生きてこれた理由に変わりないんです。私にとつてグレアムおじさんは、大切な恩人に他ならないんです！！」

「……私などには、勿体無い言葉だな……。ありがとう……そして、すまなかつた……。」

グレアム提督はようやく肩の重荷を降ろすことができたようだ……。彼の表情は、心なしかスッキリしたものになっていた。

フイーア side

／アースラ艦内・艦長室

「まさか、別れてからたつた1日でここに戻るとは思いませんでしたよ……。」

「まったくよ……。しかも、まさか『闇の書』……今は『夜天の書』ね。それに関する要件なんて……。グレアム提督から話を聽かされた時な

んて本当に驚いたわよ……。』

みらいとはやてに同行してきたフィーア。グレアム提督と和解した2人は、今後のための下見を兼ねた『クロノ』と『レスター』、そして正月早々クロノにコキ使われた『ユーノ』を連れて先に家に帰つた。能力上、基本的に本局に入れない彼はアースラに直行し、『夜天の書』に関するこれから計画のためにリンディ提督と相談をしに来ていた。

結果、全面的に協力してもらえることになりそうだ。やはり、グレアム提督が関わつてることが一番大きかつたようである。アースラの艦長室に着くころには話が通つてた。

「ところでクロノから聞きましたが……、よろしいので？」

「……あなた達の家族を奪つた『夜天の書』を救うような形になつて……。

「息子であるクロノに割り切れて、私が割り切れないわけ無いでしょ？……でも、確かに今回の件に関わりを持つた時点で運命染みた物を感じるのは否定しないわ……。」

リンディのそのいつも通りの雰囲気に安心したフィーア。もしも、彼女の雰囲気に黒いものが混ざついたら即効で2人を連れて逃げるつもりだったが……。

「それを聞いて安心しました…。では、またよろしく頼みますよ?」

「ええ、任せてちょうどいい。」

- - -『夜天の書防衛プログラム』の破壊計画における監視と協力。

- - -転生者による妨害対策。

この一つが、フィーアの提示した要求である。一つ目は、こちらの事情とミトナの魔法技術を一部提示したら許可が出た。勿論、破壊するためとは言えロストロギアを持し、尚且つ完成させることに変わりないので野放しは論外である。それ故、監視が付くのは当然なのでフィーアは特に気にしなかった。むしろ、場合によつては手伝つてもらう。上層部は、あえて『夜天の書』と因縁があるハラオウン親子に任せたようだが、かえつて好都合だ。

そして、二つ目は言わずもがな…。もはや、こちらのことなど御構い無しの迷惑集団のことである。万が一、奴らの規模が軍隊クラスだと流石に厄介なので数が多いにこしたことは無いのである。

「あなた達の家に居る人達で充分な気もするのだけど…?」

「…天才とか大天才とか騎士とか銃士とか軍人とかロストロギアとか…。」

「少數精銳というのは遊撃や突撃には最適ですけど、防衛には限界があるんですよ…ミッドチルダで防衛戦は今まで無かつたんですか？」

「大規模な物は…。」

基本的に連邦の戦い方は、フィーアの様な化物クラスが先陣を切つて敵陣を焼き乱すだけ乱し、一般兵が取りこぼしを始末しながら徐々に進撃するというものである。防衛線も同じようなものであり、精銳部隊が敵の主力を削るために思う存分暴れ、取り逃がした敵は一般兵が数の暴力で始末するのだ。

戦いは数で決まらないと言うが、限度があるので。

「もし一人でも防衛線を抜けてしまったら犠牲者は一人とは限らないんです。一人の敵兵は百人の民間人を殺すことだって出来るんですから…。」

「…分かつたわ。その提案も全面的に協力するわよ…。」

「感謝します。」

「全体的にいい方向に向かいそうで安心するフイーアだつたが、彼の平穏はここまでだつた…。

「つと、失礼。電話が…。」

突如、彼の『黒羽製魔改造携帯電話』が通話を受信したのである。誰だらうと思つて番号を確かめたら、はやてだつた…。怪訝に思い、出てみると…。

『フイーア兄いいいいいいいいいいいい…早く戻ってきてええええええええええええ…』

「ど、どうした…？」

恐ろしく切羽詰つた様子のはやてが出てきた。敵襲…、では無さそうだ。恐怖や焦燥感を感じるもの、それはびつつかつて言つと“ビビリ”に近い。

『実は、『ヒョウヒョウヒョウ…』。』

「ん……あ～あ、なんてこつたい…………ゑ？…………ハア！？そ
れはヤバイ！…すぐ帰る！…」

徐々に顔を真っ青にしたフィーアが慌てて携帯の電源を切り、立ち上がる。その尋常じやない雰囲気にリンディは怪訝な表情を見せる。

「どうかしたのかしきり？」

「…一番怒らせたくない奴が怒つたらしい…………。」

「…なのはが『魔王』なら、あいつは『破壊神』だ……。」

みらい side

（海鳴市・公園にて・先ほどの電話の数分前…）

「お久しぶりです、みらいさん。」

「しかしまあ、久しぶりだなユーノ。半年振りか？」

「はい。なかなか連絡できなくてスイマセン……。」

「いや、別に気にするな。」

本局からの帰り、先遣隊を兼ねたクロノとレスター、そしてユーノはみらい達と合流し八神家に向かっていた。そのことを家に居たシャマルに連絡すると、その帰り道の公園にシグナムとフェイトがいるらしい、ついでに一緒に連れ帰ってきてほしいことである。

ちなみに、何をしているのかと云つて……。

「あー、クロノ君? ちゃんと結界は張つてるから大目に見てや……?」

「今回はどうかぐ、今後はけやんと許可を取つてくれ……。管理外世界で無闇に魔法の行使をすることは禁じられてる。まじで……。」

-----“模擬戦”なんて論外だ……。

「スマンな、あのバトルジャンキーにはキック戻つとくからな……。」

「いや、あなたも同類でしょ？みらいことさ…。」

初めて会った時の彼は、ジュエルシーードを渡す代わりにフィーヤーとの試合（死合）を求めたのである。現在も、家族の目を盗んでシグナムとの模擬戦を楽しんでいる。

「…なるべく自重する。といひで、シャーマン三尉だつたか？」

「はい。レスターでいいですよ。」

『御無沙汰です、みらいさん。』

「お、久しぶりだなリリア。」

話題を変えるためにレスターに話しかけたみらい。彼に同行してリリアも会話に加わる。

「ふむ…。確かに、お前は平氣そうだな…。」

「え？…ああ、“転生者の割には”つてことですねっ。」

「うむ。気を悪くしたのならスマ…」。

「いや、転生者が全体的に悪質なのは事実ですからね…。昨日も一人戦う羽田になりましたけど、やつぱり性格がちよつとアレでした…。」

《一度と動けなくしてやりました。》

彼が転生者の一人だといつのことば、はやてとゴーノを含めたここにいる全員が知っている。しかし、彼は断然まともな人間性を持つており、ゴーノとは初対面にも関わらず仲良くなれたそうだ。

「ところでクロノ、そつちで何か判つたことはあつたか?」

「ほとんど西達が調べたことと一緒にだ。しかし、『転生者同盟』か…。最近、ミッドチルダでの襲撃が減ったと思ってたら地球に集まつてたようだな…。」

「これからも厄介なことが続きそうだな…。だが何にせよ、協力してくれて感謝する。」

「氣にかかる」とは無…『ドゴオオオオオオオ…』——つ…? 何

だ！？」

クロノの言葉を遮る様に爆音が鳴り響いた。気づけば話している内に目的地の公園に着いており、丁度結界の中に入つたところだったのだが、音のした方を見ると…。

「すまん、テスタロッサ！！大丈夫か！？」

「は、はい…。どうにか…。」

「本当に大丈夫かい！？」

モクモクとしていた砂塵が晴れると、そこには地に倒れ伏したフレイトとそれに駆け寄るシグナム、さっきまで結界を張つてたアルフの姿があった。2人ともバリアジャケットとデバイスを展開しているところからして、模擬戦中にシグナムが加減をミスリ、半ば本気でフレイトをぶつ飛ばしたようである…。

「あの馬鹿…、【紫電一閃】使いやがったな？…おいコラ、シグナム…！何してやがんだ…！」

「つーーみらい殿、主はやて…いや、そのこれは…。」

シグナムは弁明しようとするが、言い訳のしようが無い。シグナムにとつてフェイトが予想以上の実力者であり、ついつい熱くなってしまったのだろうが、それにしつたてやり過ぎだ…。

「…そして、ユーノが気づいてしまった…。

「あれ…？ フェイト、バルディッシュは？」

「え？ ……あ、ああああああああ！？ バルディッシュ、ハハハハハハハハハハハハ！」

「…………あ…。」

「…………シグナムの攻撃に耐えきれず、粉碎されたバルディッシュが居た…。」

「シ、シグナム…………！」

「何してるんやああああー？ セツセツと謝りいいーー！」

「ほ、本当にすまなかつたテスタロッサーー！」

八神家の三人の顔面は真っ青である。特に、自身の相棒（武器）の大切さをよく理解している戦士2人はなおさらで、シグナムは綺麗な土下座を決めている。

しかし、やはりフロイトは涙目である。プレシア経由で、このバルティッシュの大切さを聞いたあとなのだが、一段とショックが大きかつたのである……。

「おい、フレットもどき。お前には直せないのか？」

「誰がフレットもどきだ……。アハは無事みたいだけど、あそこまで本格的に壊れてるとなると僕じゃ無理だよ……。」

「幸い、この世界にフレシアさんがいるなら平気じゃないか？」

「すでにそこは、カオスな世界が展開されていた……。

『モニに直れや四乳。ピンク。』

「こやこやこやこや俺じやない俺じやなこーーー。」

「じゃあー、誰なんだ?」

『バルディッシュコさんとの半年振りの再会をよくもまあこんな形にしてくれたなあ……ええ、おこ?』

こきなり公園に響いた声。その声は、背筋にゾクリとするものを感じるのは冷たく、低い“女性”の声だった。発信源は“レスターの右腕”…。

——フィアの相棒、サポートAIの『リリア』だった。

「つ、リリア……さん……?」

『ちよっと『ガーラーダ』借りますよレスターさん。』

「え……こや、ちよっと。」

『貸せつってんだろ糞ガキ。』

「イエス・マムッ！……って、うわー？GNファング全部使う氣ですかー？」

「いつや否や、半ば強制的にレスターのデバイス『ガーラーザ』を展開し、ありつたけのGNファングを射出するリリア…。既にコントロールも奪つたらしい…。

「…後に彼らは知ることになる…。腕時計サイズである、小さな彼女は…。

「み、みらい殿！？彼女は何者なんですか！？」

「あれは『リリア』って書いてフイーアの相棒兼部下…！…あいつ曰く、そんじょそこらの魔導師よりよっぽど強いんだと…！…あ、そういういえばバルディッシュとすゞく仲が良かつたらしい…。」

「…とてつもなく強大な存在であると…。

『覚悟しやがれボケナス…。』

「ちよ、落ち着いてリリアちゃんあああああああすつー?」

「レスタああああああああ！？」

() () 口調が違うすぎる... ーー() ()

ੴ ਸਤਿਗੁਰ

第十七話 怒りのダークホース（後書き）

ちょっとギャグティエストになりました…。レイハの破壊はちょいシリアルになりますけど…。

第十八話 日頃の?いえいえ積年のですよ?（前書き）

連続投稿!! 新キャラは次回に…。

第十八話 日頃の？いえいえ積年のですよ？

みらい side

海鳴市・公園にて

「お、落ち着けええええ！」

現在、公園は阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。久々に会えたバルディッシュが粉々にされており、怒りの化身となつたりリアがら容赦なく破壊活動を行つてゐるのだ。

彼女は今、レスターから半ば強奪した1Mサイズの『ガデラーザ』を乗りこなしており、ビームキャノンを連射しながらシグナムと止めに入ろうとしたみらいを襲っていた。

『脳粒子波同調…。』

「お前脳みそ無いだろー…?」

『細けえ』こと『氣』にしてんじゃねえよ…、GUNFAUNGL射出をするー。』

せりに追い討ちをかけるかの『』と、リリアはGUNFAUNGL射出した。しかも“全部”…。

「……明らかに、持ち主である俺より使える数が多いんですけど？俺つてまだ10機前後が限界なのに、リリアさん100機超えてるよね…？」

「なあなあ、レスターさん。あれつて『ガンダム00』の『ガデラーザ』？」

「…ん？そつそつ、かませ犬とか言われてるけど多分最強のMA『ガデラーザ』。」

「なかなか、ええ趣味してんやん。」

「それほどでも……あれ……？」

「……何故はやでが『ガンダム〇〇』（前世の世界のアニメ）を知つてゐんだ？」

「え？……去年から普通に放映も上映もされとつたで？」

「マジで？……まあ、いいや。今度、長々と語りつか……。」

「バッヂコイー！」

前世ではロボットアニメ好きの少年だったので微妙な謎より、久々に語れる相手に会えたことが嬉しかったのでそれ以上気にしなかつたレスターだった……。

不意に視線を戻すと、さらなる修羅場が目に入ってきた……。

「レヴァンティンー！」

『シユランゲフォルム。』

「【飛竜一閃】！！」

「ガガガガガガガガガン！！」

「カートリッジ装填！！」

（ガチャン！）

「【十六夜流星群】！！」

シグナムとみらいが一人掛かりで必殺技を放ち、ファングを次々と撃ち落していく。しかし、一人の表情は険しい……。

（（思つたより当たらない……！））

確かに撃墜しているにはしているのだが、いかんせん予想より攻撃が当たらない。3機墜とすつもりで放つと1機しか墜ちなかつた……。

『やつてくれるじゃねえか…。流石にファーリアが一目置くだけある
つてか…!』

「頼むから口調だけでも戻してくれない！？」

『だ が 断 る …!』

言つや否や、全てのファングが上空に集う。そして、その銃口と
刃を2人がいる真下へと向けた…。

『墮ちるがいい…!』この戦闘馬鹿共が…!』

「くそつ…シグナム、とにかく土下座しろ土下座…!」

「さつさつしました…!」

- - オ ワタ ¥ (^○^) /

覚悟を決める暇も無く、リリアの指令により2人の元に飛んでい
くファングの大群。その時…。

「炎翼砲門」——

「？」

『ちつ・！・邪魔を・！・』

顔を青くした救世主が現れた。
フイーラ

フィアーアサイド

救世主は完全にビビっていた。相棒であり、上司である彼でさえリリアがここまでキレてるところは初めて見た…。何度も喧嘩したことはあるものの、これほど凄まじいものではなかつた…。

（まあ、帰ってきたそいつの仲のよかつたバルティッシュがアレジ
やあ……。）

もう思いながら粉碎されたバルティッシュに手をやる。「アアは無
事だったからよかったものの、やはり軽い問題ではないだ……。

「フイーアー！」

「お~う、フロイト。といあえずバルティッシュは壊れてないか?」

「ちょっとA-Eがフリーーズしてるので、少ししたら戻ると想ひ……。」

「そりゃよかつた……。もしも再起不能になつてたらアイツ……。」

-----シグナムを殺してたかもしれない……。

「そ、そんな筈……あるかも……。」

「お前もお前だ…、模擬戦で無闇に本気出すんじゃ無い…！」

「…はい。」

軽い説教を済ませ、リリアに向き合つた。「リリアの方は、狙いをフィーアの方に変えたようだ、空中のファンクが全部じつちを向いていた。

「とにかく、早くバルディッシュを起しそ。今のコリアを止めれるのはソイツの言葉だけだ…！」

「うへ、うへ…」

「クロノ、ユーノ！！結界を張り直せ…！レスター、ガデラーザには悪いがちょっと傷物にするぞ？」

「…」

「了解……なるべく優しくしてやつてください…」

「今のバルディッシュよつはマシな状態にしてくれ……じゃ、逝つて

ぐるー！」

「——“不死鳥”は“破壊神”的元へと駆け出した。

リリア side

『来やがつたな！－フィーラあああああああ－！』

「ちよつと待て！－本当に前リリア－？」

『細けえことは気にすんじやねえ！－GNキャノン発射！－』

「つー－【黒羽・溜め無し殲滅妖光】－！」

「——ドゴオオオオオオン！－」

問答無用で放たれた閃光をフィーラは同等の威力を持つた閃光で迎撃する。互いの光線がぶつかり合い相殺される前に、二人はすで

に動いていた。

『GNファンゲ!!』

「【舞え、黒羽】！」

一人の言葉に答えるかの「」とへ、空を『鋼の牙』と『漆黒の羽根』が埋め尽くした。そして…。

『日頃の鬱憤』、晴らさせていただく！』

「上等……【速射彈頭・參式】……」

無数のGNファングと、黒羽により造りだされたミサイルの大群がぶつかり合つた。互いの破壊の嵐は衝突するたびに爆発を生み出し、瞬間にも関わらず空をさらに明るいものした……。

「… むご、ワハレッテ。」

「余裕ないからスルーするけど……、何?」

「ジュエルシード事件の時もこんなだったのか……?」

「……手加減してくれてたみたいだ……。」

「……そつか……。増援、呼ぼうかな……。」

既に結界の負担がやばくなってきたにも関わらず、2人の戦いは終わる気配が全く無い。否、規模的にはもはや戦争に近い……。

「あいおりあいおりあいおり【炎翼砲門・機銃式】……」

『痛つ……ああああたまにいい響くんだよ……叫んでばかりでええ……』

「叫んでばかりかなのはお前だ……！」

次々と建物が吹き飛び……とこづか公園の面影がなくなっていく。結界の中では無かつたらと思つどゾッとする。何度かクロノ達のところにも流れ弾が跳んできて肝を冷やした……。

しかし、バルティック・ショとフロイト達がいるところに流れ弾が一発も放つてないのは、流石といつべきだらうか…？

「いい加減頭冷やせ……これ以上やつたら死人が出る……」

『聞く耳もたん……周りなどどうもこいつ……私は戦う……』の意
思で……』

「……」「ブシドー？」

「リリアさん、実は遊んでる……？」

終わりが見えないかに思えたこの戦い……、それは唐突に終わった。

「……【止まれ】。」

『なー?』

「つー? 体が、動かない!?」

突如響いた声…。その言葉の通りにフィーラとリリアはおろか、黒羽とG.N.ファングすら凍つたように動きを止めたのである。

何が起きたのかまるで理解できない面々であつたが、すぐに謎は解けた。

『まつたく、騒がしいと思つたら既にして何してるの?…?』

「将…、またお前の悪い癖が原因だそうだな?」

…ミトナ(本)と、それを腕に抱えたリインフォースが居た。

ミトナ side

「改めて申し訳なかつた、バルティツシユ…。」

『いえいえ、お気になさらず。むしろ、マスターである彼女を守りきれなかつた私に非が…。』

『そんなことありませんよバルディッシュさん。大人気ない彼女が悪いのです。』

「お前もだ馬鹿野郎…。」

バルディッシュのフリーズも解けたのでリリアの機嫌（口調）も元に戻り、平穏が戻った。直接戦闘に巻き込まれた3人と、結界を張っていた2人は肩で息をしていた。幸か不幸か、序盤でぶつ飛ばされたレスターは比較的マシな被害で済んだ…ガデラーザが少々ボロボロになつたが……。

ミトナの魔法（詠唱無しのチート）により、戦闘は強制終了になつた。聞くところによると、二人は散歩中だつたらしい。はやて達が本局に行くときには、守護騎士達も含めて全員でついて行こうとしたのだが『夜天の書』 자체をよく思つてない人間も多いらしいので地球で待機していたのだ。

「そして結界の気配がしてきてみたら、お前たちが暴れていたといふことだ…。」

『まだ、その“戦闘症候群”治つてなかつたんだね…。いつそ治療プログラムでも造ろうか?』

「ぐう…何も言い返せん……。」

一步間違えれば友人が悲惨な目に遭つたかも知れなかつたこともあり、ミニアトリインフォースの説教は長かつた。みらいとはやての御仕置きと違い、この説教は精神的につらいものがあると経験者は語る。

『といひでバルディッシュ君にフォイトちゃん。もしよかつたら僕が修理しようか?』

『なんですか?』

『え? いいんですか?』

『一応、プレシアさんにも許可は取るつもりだけど強化もしてあげるよ。最近、何かと物騒だし…。』

こうして済し崩し的にバルディッシュの修復強化が決定した。様々な魔法を理解し、根本が全く違うアルテニアにベルカの魔法を普及させた彼なら、バルディッシュを託しても問題無いだろう。

「ありがとうございます。でも、一応母さんに訊いてみますね。」

『うん、待ってるよ。あ、っこでこなのはなちゃんのレイジングハートも強化しておいたかな?』

- - ようやく収束した大騒動。しかし、新たな波乱はすぐそこまで来ていた。

第十九話 そいつは現れた…（前書き）

彼の感じはこなんんでいいですか？

第十九話 そいつは現れた

? ? ? s.t.e

（海鳴市・とあるビルの屋上）

（……なんだありや……。）

彼は今、街のビルの屋上である光景を眺めていた。その光景が繰り広げられている場所は、彼の立っている場所から大分離れているが関係ない。この黒髪の少年の能力を持つてすれば、“地球の裏側から”でも覗けるのだから…。

（イレギュラーの連れな時点で警戒しておくれだったか…。あの腕時計、リリアとと言つたか？）

せつときから見てるのは、激昂して破壊の限りをつくしているリリアである。

（神に力を貰つた転生者よりよっぽど危ないじゃねえか…。あのイレギュラー2人と魔導書にしたつてそうだ。実際に、あいつらの手によつて何人の転生者がやられたことやら…。）

能力を駆使してずっと観察を続けていくうちに、例の2人がいかに驚異的かよく理解した。胡散臭い神により授かつた能力を扱う転生者を、彼らはもう何人も潰しているのだ…。もつとも、この少年は『転生者同盟』と訳あって敵対してるので、あえて好都合だったが…。

(ん?……馬鹿なっ!?)

唐突に、さらに驚くべき光景が目に入ってきた。リリアとイレギュラーの一人…フィーア達の動きが完全に静止したのである…。それはもう、写真のように空中でピタリと止まっている。

(いつたい何が…って、あれはリインフォース?……そうか、例の魔導書か…!—)

彼女が手に持っている『闇の書』にそっくりな謎の魔導書が見えた。あれは、もう一人のイレギュラーが持ってきて数年前からハ神家にあつた正体不明の本だつたが、昨日本格的に起動したらしい…。(本当に厄介な奴らばかりだな…。けど、いつも止まるわけにはいかねえんだよ…。)

- - - 管理局を潰すために…。

(そのために悪いが…。)

彼はさつきまで見ていたのとは別の方角を見る。常人にはただの街並みしか見えないが、彼には見える…。自分が会うべき存在が、自分が潰すべき存在が…。

(お前の未来を潰させてもらひつーーー)

- - - 彼は飛び立つ。一人歩く、栗色の髪をした少女のもとへ…。

フイーア s.i.d.e

（住宅地）

「本当にふざけた真似しやがつて…。」

『ふざけてません。悪いのはそこのバトル中毒です。』

「…そ、そろそろ許して貰えないだろ？」「…？」

『お断りじゃボケえ。』

「フィーアさん…、リリアさんを返していいですか？頼もしいけど怖いです…。」

現在、3人と1機はなのはの元へと向かっていた。ミトナとプレシアの手により、バルディッシュの修繕を兼ねた魔改造が決まったので、ついでになのはのレイジングハートも強化してしまおうということになったのである。

出迎えの面子がフィーアとシグナム、そしてレスターとリリアといつ最悪の組み合わせになつたのは、この間にシグナムがリリアに先ほどのことを水に流してもらつのが目的であった。フィーアは万が一の時のストッパーである。

『だいたい、いくら通信で連絡を取れてたといつてもですね、直接会うのと話すのとでは全然違うのですよ？折角こつそりと自己修復

と称して体に磨きをかけたというのに見せるべき相手は粉々で瀕死の状態で私に気づけやしないし気づいたと思ったら何故か私を見て顔を真っ青にするしなんでこんな思いしなきやいけないんですかってねえ聞いてます？私はこの馬鹿について行きまくったせいで所謂キャリアウーマンみたいなものになつたんですがそのせいでのA.I仲間がロクによりつかなかつた中あのバルディッシュさんだけは紳士的で貴公子然とした態度で接してくれてその瞬間にときめいて…。』

「…フイーア殿…。」

「諦める…。」

「つづか後半は惚氣…？」

- - - 無視して構いません。 (b y 作者)

リリアとの和解を半ば諦めてゲンナリしたその時、彼らに誰かの念話が響いた。

(誰か来てええ！！)

「…なのはの悲鳴が、3人の頭に響いた…。」

? ? ? side

「ちっ、助けを呼びやがったか…。」

「あなたは誰！？なんでこりんなことを…？」

(マ…マスター…。)

なのはの手には碎かれたレイジングハートが握られていた…。突如、なのはの前に現れたこの黒髪の少年は有無をいわさず襲い掛かり、剣のようなデバイスで慌てて展開したレイジングハートを粉碎したのである。

「あえて言つなら復讐の下準備か…？」

「…？」

「まあ、何も知らない間に魔法の世界から退場してもいい。何、命までは獲らない……。」「……」

「な、何を……？」

「お前が一度と魔法を使えなくなるように魔力を封印をかけてもう一つ。そのためには気を失つて貰わなければいけないんで……。ひょりよつと『ゲメンな……。』

そう言つて彼は剣を棍棒のような物に変形させ、それを振り上げる。なのには思わず恐怖で目を瞑つた。そして……。

「……ガキンッ……！」

「へへへ……、もう来たのか……。」「……」

「……」いつもまた面倒くさいのが……。

-----長剣で棍棒を防いだフイーアが現れた。

フイーア side

「フイーアさん！！」

「よウ。こじにも本当に物騒な街になってきたなオイ…。」

内心でフイーアは舌打ちをしていた。今の受止めた一撃でだいたい相手の実力が判つてしまつた…。恐らく、こじしばらぐ相手にしてた転生者とはワケが違つ…。

(こじつは、今までの能力にかまけた馬鹿共とは違つ…。下手すると俺と同等か?)

「…そいつは光栄だな。」

「……しかも、能力持ちか…。」

恐らく自分の思考なり心なり読んだのだらう。これはいよいよ厄介になってきた。

「シグナム、レスターとなのはを連れて先にハ神家に行け。あわよくば援軍を呼んできてくれ……。」

「なんで私なのだー?」

「レスターはまだ道をイマイチ把握できていない。ついでに、帰宅途中に手負いのなのはが襲われるのが一番不安だ……。だから頼む。」

「……心得た、極力速やかに戻つてくれる。だから、死ぬなよ……?」

シグナムも相手の実力が驚異的なものであると薄々感じているようだ。しかし、今は手負いのなのはを守るのが優先…。彼女は渋々承諾した。

ついでにと言わんばかりに、シグナムは黒髪の少年を睨む。それに対し、少年は苦笑いを浮かべた。

「噂通りのバトルマニアだな……、こんな時に『手合わせしてみたいなんて……。』

「つー？私の思考をー！？」

『シグナムさん、さつと行きますよ。いい加減にしないと…。』

「クッ…貴様、名前は何だー！？」

「俺か？…俺の名前は、」

…『ストーク・カーキング』。お前達を潰す者だ…！

ストーク side

(…なんで名乗つたんだ…?)

この場を去っていくシグナムたちの背中を見送りながら、彼は心中で呟いた。自分で答えておきながら、何故シグナムの問いに答へてしまったのか疑問に思つ『ストーク』。だがそんな疑問もさっ

さと切り捨て、思考を切り替える。

「…目の前の敵を潰すために…。」

「しかし、アンタは心を読まれても平気な面してたな…。」

「故郷の奴らはなんでもありだつたからな。嫌でも耐性が付くぞ…。」

「

普通は先ほどのシグナムみたいに動搖したり取り乱すものなのだが…。

「…しかも、もつ頭の中では俺の能力対策を考えてるな?」

「当たり前だ…。武器の使い方も身体能力も同じ様な癖してそんな能力まで持つてるお前に俺はどうしろと?」

そう言いながらも、黒煙状態の『ヴィルガロム』を右手に纏わす。それに対しストークも自身のデバイスである『形無』を一度光の粒子に変化させる。

「先にダメ元で尋ねるが…、なのはを襲つた目的は?」

「教える義理は無い……と言いたいが、あえて言つなり復讐の下準備だ。」

「ああ、わかった。本当に面倒なことこの上ない……、場合によっては気が引けやつだ……【サー・ベル】。」

「お蝶つばさ」ままでだ。どのみち邪魔をすると言つたのなら……。

「光の粒子を槍に変え、フイーラに突きつける……。
まずはお前を潰す……。」

「やつてみる……私の前に全て奪つてしまへやん……。」

- - - 急遽展開された封鎖結界の中に、特大の衝撃が走った。.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8489y/>

漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

2011年12月21日13時13分発行